
真紅の館の姫君（S）

KAHORI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真紅の館の姫君（S）

【Nコード】

N0187Y

【作者名】

KAHORI

【あらすじ】

地の底にある魔法王国の貴族の娘であるヴィアーナは兄しか知らない十八の娘。近頃兄の様子がおかしくて…。（ムーンライトノベルズで発表している同タイトルの作品のR15版です）。BLの回があります。サブタイトルに を付けています（行為はありません）のでご注意ください。

真紅の兄と妹

高い高い塀の中、ヴィアーナは今日もじょうろを手に、庭で真紅の薔薇の世話をしていた。この庭には赤い花しか存在しない。赤はこの家を象徴する色だからだ。

今年で十八になるヴィアーナの肌はこの上無く白く滑らか、髪は純度の高い紅玉^{ルビー}が彼女の頭から溶けて流れたような煌く真紅、優美な眉も、睫毛も、ふくよかな唇も赤なら、瞳もまた深い真紅だった。着ているドレスも血のように赤い。

ヴィアーナはふと空を見上げる。空は紫色を帯びた黄昏の色を呈していた。地底にあるこの国——神話の時代に活躍した、魔力甚大なる紫眼の竜の子孫である魔王が治めるヴァール・ドゥナ・ガーシユは、もともと光の射さぬ空間なのだが、城の有能な宮廷魔術師が魔法で刻々と色を変じて民の目を楽しませてくれているらしい。光源は見当たらずと言いつのに明度を変える不思議な空には時に雲が流れ、星が出る。

兄はまだ帰らないのだろうか。ヴィアーナは溜息を吐きながら、空に、大いなる真紅の鷹の幻影を見る。

ヴィアーナには年が五つばかり離れた兄がいた。この屋敷、ヴァール・ドゥナ・ガーシユきつての貴族であるヴァリドゥー家の当主ハディール。彼は真紅の鷹に姿を変じ、強大な魔力をもって地上に住む魔力を持たぬ下等な生き物である人間どもを脅かし、日々、ヴィアーナ達の住む地底世界の存在を知らしめている。ハディールの不興を買った人間の町は一瞬の内に灰燼に帰した。ヴィアーナは兄ほど美しく素晴らしい青年を知らない。

（お兄様、今日はどんなお土産を持ってきたさるのかしら）

ヴィアーナが手を止めていた水やりをまた始めようとしたその時、視界の隅に小さな影を確認し、再び空を見上げた。兄だ。

「お兄様！」

じょうろを赤煉瓦の花壇に置き、ヴィアーナは両手を広げて兄——飛来する真紅の鷹の方へ駆け寄る。鷹の大きさは、広げた翼の端から端までが手を広げたヴィアーナの倍はある。鷹は薔薇を散らさぬ様にか、いったん塀の上に止まり、せわしく羽ばたきながら翼を収めた。

「お帰りなさい、ハディールお兄様——今日は人間の町を幾つ消されたのかしら——聞くまでもないわね」

鷹は次の瞬間、金や黒の刺繍で装飾された真紅の衣を纏った丈高い青年の姿に変じた。塀に佇んだままの体勢で、すんと庭先に降りると、ヴィアーナは彼に抱きついた。少々癖のある、燃えるような赤い髪、秀麗な眉の下の鷹のように鋭い瞳。無愛想で滅多に微笑む事の無い唇。ヴィアーナは兄の全てが好きだった。

「ヴィアーナ。いい子にしていたか？」

「ええ、それはもう。いつものお兄様のヴィアーナよ。ところでお土産は？」

「こいつめ」

ハディールは微かに笑いながら妹の額を小突いた。ヴィアーナが軽やかな笑声を上げると、ハディールは懷から取り出しながら、妹に後ろを向くように促した。

「何かしら」

兄の手によりヴィアーナの首筋に掛けられた太めの銀の鎖の、白い胸元の中央にぶらさがる精緻な彫刻が施された小さな銀の板には、煌く紅玉が大小五つほど嵌め込まれていた。その見事さにヴィアーナは目を瞠る。うなじの髪を除けられ、金具を留められた。

「なんて綺麗」

紅玉はヴァリドゥー家を象徴する石である。ゆえにヴィアーナはいくつも所有していたが、これほど見事な石は持っていない。

「この世で最も紅玉が似合うのは我が妹をおいて他にはいまい。さあ見せてくれ」

催促されてヴィアーナは緊張しつつ伏し目がちに兄の方を振り向く。どうか、お兄様の期待を裏切りませんように。

「——やはり。思った通りだ。それどころか、宝石の方が霞んでしまっ」

ハディールは鋭い瞳を和ませた。良かった。ほっとヴィアーナは心の中で胸を撫で下ろす。そして入れ替わるように、ヴィアーナの胸は弾んだ。兄を独占する時間が訪れたのだ。さて、これから兄と何をしようか。チェスカ、お人形遊びか、それとも観劇に連れて行って貰おうか。兄は屋敷の外へ出る事をあまり許可してくれないけ

れども。

「お前は私のおき紅玉だ」

ヴィアーナがあれやこれや考えていたその時、ふいにハディールから指先でそつと顎を持ち上げられた。彼の真摯な瞳と目が合う。

「お兄様……」

ヴィアーナはこんな時の兄の瞳が苦手だった。どうして良いのか、分からない。正視が耐えられず、視線をあちらこちらに泳がせてしまう。息が苦しくなる。

「どうして、そんな瞳を……」

動揺しつつ問うと、兄は無言で顔を近づけて来た。

「あ……だ、め」

動けない。唇が、触れ合う。何だろう、どうして兄は最近、私にこんな事をするのだろう。

「あふ……」

兄の舌が入り込んで来ると、ヴィアーナは全身がかつと熱くなるのを感じた。今日の口接合は、何だか違う。危険だ。そう思うが抵抗出来ない。口の中を蹂躪されるうちに、痺れる様な心地良さと共にヴィアーナの奥処が妖しい反応を示し始めた。唇だけでは無く、更なる何かを求めているような反応。けれどその行為をヴィアーナはまだ知らない。友達が集まって、密やかな話をした際に耳にした

ばかりだ。

「んん……ん……っ」

堪らず、ヴィアーナは兄の衣を掴んだ。ハディールはまるでそんな妹の反応を面白がっているように、くずおれそうになる彼女の腰を支えつつ、執拗に舌を絡めた。甘やかに、弄ぶように。

「んんふう……っ」

もう、やめてやめてお兄様。心の中でヴィアーナは哀願する。

「——感じているのか？」

唇を離し、ハディールは妹の泣きそうな瞳を見つめて薄く笑んだ。

「お……兄様の……意地悪……」

「堪らない」

もう限界かも知れない、とハディールが物憂げに呟いたその時。

「ヴィアーナ、どうしたの？ さっき声がしたようだったけれど」

屋敷の奥から声がした。ヴィアーナ達の母の声だ。

「私です。ただいま帰りました母上」

ハディールは妹を抱いたまま何事も無かったかのような口調で屋敷の奥に声を掛ける。

「おお、お帰りハディール。ヴィアーナもそこにいるのでしょうか？
二人とも、中へ入って来なさい」

「だそうだ。歩けるか妹殿」

ハディールはからかうように妹の耳元に囁く。

「平気よ」

うなだれたヴィアーナは小さく返答した。

「今のは、お前をからかったただけだ」

「お兄様！？」

ヴィアーナの顔がさつと青ざめる。

「うぶだな」

くつくつと肩を揺らし、彼は笑った。兄は一体全体、私をどうしたいのだろう。

「済まなかった」

ハディールは宥めるように妹の肩を優しく叩き、やがて兄と妹は寄り添いながら屋敷の中へ入った。

虹色の客人

あくる日の昼下がり。ヴァリドゥー家に来客があった。ヴァール・ドウナ・ガーシュ——古い言葉で竜の治める国と言う意味らしい——きつての名門貴族、ヴァリドゥー家と比肩する家格のロンドデル家の双子の姉妹だ。二人ともヴィアーナとは旧知の間柄で、訪れたのはもちろんヴィアーナと時を過ごすのが目的であった。

落ち着いた赤い色を基調としたタイルが張られた壁の、赤銅色の獅子の口から水が流れる光射すサンルームに二人を招き入れ、ヴィアーナは窓の外を眺める。そこにはヴィアーナの着ているドレスと同じ色の、赤い薔薇の海が広がっていた。

ヴィアーナは昨日のこの庭での出来事を思い出す。

兄がたまにしてくる、ついばむような接吻は、少々行き過ぎだが愛情表現の一種だと思っていた。けれど昨日、兄がしたあの接吻は。

まるで恋人同士がする接吻の様ではないか。

ヴィアーナの心は揺れる。真摯な兄の瞳。からかっただけ。どちらが本当なのか。

否。本気なわけが無いのだ。なぜなら、兄だから。兄が妹に恋心など抱くはずが無いではないか。

（——やっぱりお兄様ったら、ひどいわ。接吻と言うのは、相思相愛の殿方とするものなのよ。それを……！）

「ヴィアーナ、どうしたの？ 考えごと？」

「あ、いいえ」

友人が訪れていた事を忘れていた。ヴィアーナは窓から離れてすでに友人が腰掛けるテーブルの方へ歩み寄り、向かいの椅子へ腰掛けた。

ロンドデリルの双子の姉の方をユラン、妹の方をミランと言った。ヴィアーナと同年だ。二人とも、象牙の肌に虹色の瞳にゆるやかにうねる白く輝く髪をしていて、七色に光る小さな貝殻で出来たスパンコールが無数に付いた純白のドレスを着ている。双子だけあって二人ともよく似ており、一見するとどちらが姉でどちらが妹なのか分からない。

しかし彼女達と長年付き合っているヴィアーナには独自の見分け方があり、二人を間違える事は無かった。彼女達には言えないが、より目つきが悪い方がミランなのだ。彼女達はいわゆる不良と言う奴で、親に黙って市街地へ出かけては流行を先取りしていた。今日も双子はそれぞれ流行りの絵師に描かせた象牙の扇子をわざわざ広げてヴィアーナに見せ付けるように傍らに置いている。いつも彼女らには遅れを取り、齒がゆく思うヴィアーナであったが、双子は別にヴィアーナに一步先んじるつもりなど無く、毎度悪い遊びに誘ってくれるのだ。兄が怖ろしくていつも断っているのはヴィアーナの方なので仕方が無い。

「ヴィアーナ。今日はね、この本を貴方に薦めに来たのよ」

にやにやしながら双子が背後から差し出した本には『甘い果実』と題字が書かれていた。向かい合う男女の絵が描かれている。

「なあにこれ」

「何て言うか……ねえ」

双子は顔を見合わせて笑みを深める。本当に、心から通じ合っている風なむつまじい彼女達であった。

「とにかく凄いのよ。描写が……」

とユラン。

「描写？」

「行為の」

とミラン。

「行為の……」

ヴィアーナはよく意味が解らぬままに彼女達の言葉を繰り返した。接吻の描写が凄い本なのだろうか。

貴方がまだ知らない行為よ、とミランに言われ、少々不快に思いヴィアーナは鼻息を漏らした。いつもこうだ。この双子は自分よりも色々な事を知っているから私を馬鹿にする。

「接吻くらいなら知っているわよ」

ヴィアーナの意外な言葉に、ユランが愕然した表情をした。手に

していた茶器を取り落としそうになる。

「——お兄様に大切にされ過ぎている貴方だから、そんな事全然知らないと思ってたわ——どこで？ 誰と？」

「誰と出会うつて言うの？ 婚約者でもいるの？ 社交界に出ていない貴方が接吻するつて言ったら——」

双子はテーブルに身を乗り出してヴィアーナに畳み掛けた。

社交界、と言う言葉がヴィアーナの胸を切なくさせた。ヴィアーナのまだ知らぬ世界である。

ヴィアーナの曇った表情を読み取り、ミランがはつと失言に気付く。

「ごめんなさい」

謝罪にヴィアーナは気にしないでと弱々しく首を振る。

そうなのだ。目の前の双子はもうすでに大人の婦人と認められ、城で行われる舞踏会に顔を出したりしている。しかしヴィアーナはまだだった。母や兄がそれを許さないのだ。魔法王国きつての名家であると言うのにヴィアーナにはなんと魔法が使えない。始祖が大いなる魔力を有していても、代を重ねるごとに魔法を思う様に使えなくなる事もあるらしいのだが——反対に強大な力を制御出来ずに持て余す場合もあり、そのような者は国王が設立した魔術の学院で修練を積む事になる——しかしそれだけでは無い。兄が言うには、所作が貴族の娘としては優雅さに欠けると。母が言うには、嫁に出すには刺繍や歌がまだまだ合格点にはほど遠いと。

「私、貴方達と違って魔法も使えないし、お行儀もまだまだから……早くお兄様やお母様の許可が降りる様に、もっと頑張らなくちゃいけないわ」

駄目だ。どうしても声が沈んでしまふ。二人に対する憧れと嫉妬、劣等感が増していく。

「そうよ。くよくよせずに、元気を出して。私達の赤い薔薇」

ユランの励ましにヴィアーナは心からの微笑を浮かべた。良い友人達だ。

「お城の話を聞かせてよ」

ヴィアーナは居住まいを正しつつ切り出す。話題を変えるのに好都合だ。何と言っても接吻の相手は兄だったのだから、問い詰められても困る。

「お城の……そうねえ」

双子は視線をめぐらせながら共に考える。白い睫毛の中の、夢そのものが凝縮された玉の様な虹色の瞳。ヴァリドゥー家の始祖は炎を操る真紅の鷹であり、真紅の鷹は家紋にもなっているが、ロンドデリル家の始祖は百色の迷夢と言われ、その始祖の姿の詳細は公表されていない。

「あ、そうだ。魔法はね、国王陛下だって使えないのよ」

とミラン。ヴィアーナには初耳だった。

「初めて聞いたわ。そんなんで大丈夫なのかしら、この国は」

一貴族の娘である自分ならともかく、魔法王国の頂点に立つ者が。

「陛下にはモスリー卿がいるから大丈夫よ」

ユラン。

「モスリー卿？」

「このヴァール・ドゥナ・ガーシュの空を魔法で素敵なか色に変えている、宮廷魔術師を務められている魔導卿よ」

ユランに続きミラン共にその声にはうつとりした響きがあった。ヴィアーナは想像する。美意識の高い双子の事だ。きっとその魔導卿は素敵なか方なのだろうと。

「紫水晶の瞳をしたとても美しい殿方よ。優雅な物腰で、誰にでも同じ優しい眼差しを注いでくれるの——彼に迫る女性は多いわ。だけど彼、女性には興味が無いみたいで、彼女たちの愛の言葉を飄々と受け流して、孤高を保って難しい書物ばかり読んでいるそうよ」

「あらユラン。他人事みたいに言うけれど、貴方も受け流された一人じゃないの？」

焼き菓子を頬張りながらミランがくぐもった声で言う。

「言わないでよ。あの時は人が通ったからよ——とにかく、彼は魔術の学院の卒業生で、学院始まって以来のとても優秀なか方だそうよ。

誰があの方の心を射止めるのか興味があるわ」

和氣藹々と話す双子達の向かいで、ヴィアーナの真紅の瞳が俄かに潤み始めた。唇がへの字になる。

やつぱり、聞くんじゃ無かった。一足先に自分の知らない世界を知った双子が羨ましくてしょうがない。

その時、青い空から真紅の薔薇の花びらのめくるめく雨が降って来て、気付いた双子が歓声を上げた。

風が揺れて、ヴィアーナは振り返る。いつの間にやら椅子の後ろにヴァリドゥー家の当主が立っていた。

「お嬢さん方。妹を虐めないでやってくれませんか。貴方がたと違い、妹はまだ色々と幼い部分がありまして。修行中なのですよ」

双子はたちまち白い頬を紅潮させ、どちらも素敵と零した。

双子と兄が語らっている隙に、何となくヴィアーナは急いでそうしなければいけない気がして、双子から受け取った本を背に隠した。

禁断の本

ロンドデリルの双子が訪れたその夜。

調度やカーテン等、全てにおいて赤を基調とした部屋の中、ヴィアーナは赤い色の薄い生地の子着に着替え、その上から真紅のガウンを羽織り、寝台の上に寝そべって彼女らから借りた本を広げている。食事と入浴を終え、後は寝るだけのくつろぎの時間である。

『甘い果実』と言う題のその本は、男女の恋物語を題材とした小説であった。

親に決められた相手との結婚が間近に迫っている貴族の娘メロリアンの前に、突然現れた野性味を帯びた謎の青年アドルが迫り、主人公の心は揺れる。しかし主人公の婚約者であるダトリール男爵も情熱的な愛を彼女に注ぎ、優柔不断な主人公は二人の男の間を右往左往して頭を悩ませると言う、兄ハディールから社交界はおるか、屋敷の外にすまなかなか出して貰えないヴィアーナには少し羨ましい話であった。

しかしそれはそれ、これはこれ。ヴィアーナはすっかりこの危険な物語にのめり込んでしまっていた。

謎の青年アドルは二ページ目にして主人公メロリアンに荒々しく接吻し、三百ページはある小説の五十ページ目にしてメロリアンの屋敷の窓から侵入し、彼女をまだ完全に説き伏せていないまま寝台に押し倒した。

「あいぶ……って何かしら。所々分からない単語があるわ」

後で棚から辞書を持って来て調べよう。とりあえず今は読み進みたい。ヴィアーナは一体彼女はどんなってしまうのか緊張し、ごくりと唾を飲み込んだ。しかし、小説なのだ。接吻は書いてもそれ以上の事は詳細に書くまい。

果たして、たかを括って次のページを捲ったヴィーアナの目に飛び込んで来たものは。

「こ、これは……」

ヴィアーナは突然目に飛び込んで来た衝撃的な挿絵に大きく目を見開いた。四つん這いになったメロリアンがアドルに後ろから貫かれているではないか。何と言う事だ。

（メロリアン、貴方どうかしてるわよ！ 慎みは？ 貴族の娘としての誇りはどうしたの！？）

思わず心の中でヴィアーナは叫ぶ。そんなはしたない体勢で、アドルに何をどうされていると言うの！？

挿絵には二人が繋がった局部の詳細はさすがに描かれていなかった。なのでヴィアーナは余計にもやもやした。

男女の営みの概要くらいはヴィーアナもすでに知っていた。つい最近の事、家庭教師がヴィアーナに生物学的な知識として書物を携えその行為について教えたのである。しかしそれは絵による解説などの無い文面によるものであり、ヴィアーナの頭の中でその行為が絵的に展開する事はなかった。その夜、いつものようにヴィアーナは母と兄に今日は先生からこんな事を習いましたと食卓で話した。

ヴィアーナの母は青ざめ、ハディールは無言であつたが彼の目の前にあつた前菜と皿は瞬時に灰となつた。翌日、家庭教師は解雇され、再びヴァリドゥー家へ訪れる事は無かつた。ヴィアーナが兄ハディールと領地の牧場に訪れた際に、たまたま馬の種付けが行われていた時などは、たちまちハディールがヴィアーナを衣に匿つてその光景を彼女に見せなかつたが、少し前にロンドデリルの双子がしていた密やかな話を耳に挟んだ事によつて頭の中に絵が現れより具体的になつたのだ。おしべとめしべ、庭に訪れる鳥達の交尾を人に当てはめるくらいには。

（愛の行為は、身体を重ねるだけではないのね）

解らない単語が気になる。メロリアンはどうして喘いでいるのか。彼女をさんざん泣かせながら愛の言葉を囁くアドルは言動が裏腹な暴漢のようにも思える。

（何がどうなっているのか知りたいわ！　こんな単語、初めてよ。私、本当に勉強が足りないわね）

未知の情報が怒涛のごとく頭の中に押し寄せて来たために目を回しながらヴィアーナは本を伏せ、寝台を降りてスリッパを履き、部屋の隅にある書棚へと向かつた。兄の部屋の本棚に比べると書物の量が圧倒的に本当に少ないが、辞書くらいはある。

ヴィアーナが重い辞書を手に取つたその時。

「ほう。夜中まで辞書を出して勉強とは感心だな。我が妹殿は」

ノックも無く入つて来たのはハディールだった。夜更けだが、彼はまだ夜着にも着替えていない。いつも深夜まで魔法の勉強にいそ

しんでいる彼であつた。

「お兄様っ」

振り向いたヴィアーナは口から心臓が飛び出そうになり、辞書を取り落とした。幸い足の上には落ちなかった。

「どうした。そんなに驚いて」

ハディールは部屋の中へ進みながら寝台の上に伏せられていた本に目を止め、好奇心に目を輝かせる。

「何だ？ 何の本を読んでいる？」

「駄目っ！ それは——」

慌ててなりふり構わずヴィアーナは止めに入ろうと寝台へ駆け寄ったがハディールの手の方が早かった。ハディールが本を手取るよりもよつて、裸の挿絵——その体勢は後背位と言つらしい——があるページを。

「——一体何の勉強をしている」

たつた今まで彼にしては上機嫌であつた表情が俄かに厳しいものとなる。ヴィアーナの顔は蒼白になった。

（どう言い訳すればいいの。難度が高すぎるわよ！）

「そ、それは……」

この挿絵に一体どの様な注釈を付ければ兄は納得してくれるだろうか。どう考えた所で良い言い訳が見つからない。

「まさかお前がこんな本を読んでいたとは」

嘆かわしい、と言いたげにハディールは嘆息する。本は片手で開かれたままだ。もう閉じて、本を閉じてよお兄様とヴィアーナは心の中で叫び続ける。ヴィアーナの心臓はばくばくしていた。

「真面目な本よ。ふ、服を描くのを忘れてたんじゃないかしら」

ふ、とハディールは妹の発言を一笑に付す。

「随分と杜撰な本だな。ヴァリドゥー家の者が読むような本ではなからう。ただちに処分する」

兄が炎の魔法を発動させる予感がし、ヴィアーナは慌てて止めにかかった。

「駄目っ！ お兄様、それは借り物なの！」

ハディールは本を持った手を掲げた。ヴィアーナは本を取り返そうと手を伸ばし幾度も飛び上がるが、彼女よりもはるかに背の高いハディールだ。まるで届かない。

「返してっ、お兄様お願いっ」

「双子だな。悪い友達だ。だが悪いのは彼女達だけじゃない。淑女は知ろうとせずに本を閉じるべきだ。失望したぞヴィアーナ……」

厳しい顔付きで必死な様子の彼女を見下ろしていたハディールは、ふいに片方の手でヴィアーナを真紅の絹が光沢の波を作る寝台へと押し倒した。ヴィアーナの小さな悲鳴が上がる。

「何するのお兄様っ」

両の手首をハディールに押さえ付けられ、覆いかぶさって来た彼が作る影の中でヴィアーナは喚く。

「お前もこの本の様な事をされたいのか？ ん？」

弄つような口ぶりでハディールは妹に問う。低く、妹にはどこまでも優しい声で。

「な、何を言つて……」

蒼白だったヴィアーナの頬が瞬時に朱に染まった。

動揺が隠せない。どうすれば良い、ヴィアーナ。文字を読むのが異常なほど早い兄だ。挿絵だけで無く、文章も数十行は読んでいるはずである。何とかそこに抜け道を見出すのだ。ヴィアーナは兄から目を反らしてまずはその鋭い瞳から逃れた。

「読めない単語が多くて……服を描き忘れたこの本に出てくる彼らが何をしているのか、よく解らなかつたわ」

これで大丈夫だろうか。視界の隅で兄の視線を確認する。だが依然として鋭い。

「どんどん私の知っているヴィアーナじゃなくなっていくな」

ハディールはさもがっかりした様に端正な口元に薄く淋しげな微笑を浮かべた。

兄を裏切ってしまった様で、ヴィアーナの胸が切なくなる。

「よ、読めるものもあったけど、意味は解らなかったわ」

「どんな言葉だ？」

「あい、ぶとか」

「いつも私がお前にしている事じゃないか」

「え？」

ハディールは片方の手でヴィアーナの白い額に触れると真紅の髪の中へと指を沈み込ませ、そのままゆるやかに流れる毛先までを優しく梳く。ヴィアーナはうっとり目を見閉じた。兄からこうされるのは、好きだ。

「これも愛撫だ」

説明しながらハディールはヴィアーナに唇を近づける。その寸前、ヴィアーナは気配に気付き目を開けた。

「だ、駄目っ」

ヴィアーナは反射的に接近して来る兄の胸を両手で押しのけた。こう言う事は、恋人とするものなのだ。いくら兄の事が好きでも。

「お兄様、もう悪ふざけはやめてよねっ」

ハディールは不意打ちを食らったように呆然と目を見開いた。

「それにつ、いくらヴァリドゥー家の当主と言っても、ノックをしないで淑女の部屋に入ってくるのは失礼よっ」

立て続けに兄に訴えるヴィアーナの目に涙が滲んだ。自分はもう子供では無いのだ。男女の接吻は重んじられるべき行為だと言う事くらい解っている。冗談では済まないのだ。

しかし、そんな妹の訴えをよそに、ハディールの視線が別のところに集中している事にヴィアーナは気付かなかった。兄を近付けまいと両腕を身体の前で突っ張っているために、ヴィアーナの小さな胸は寄せられ、その中心の色付いた部分は薄い夜着に透け、二つの突起は生地をほんのりと押し上げている。

ハディールの唇は微かな声を発した様に僅かに開かれていた。

「——それは、済まなかった」

ハディールは幾分が気落ちした様子で身体を起こすと、本を取り返そうとヴィアーナが手を伸ばすのを阻止しつつ寝台から降りた。

「淑女としての自覚が芽生えつつあるのは良い事だ。私もそろそろお前への接し方を改めなければいけないな」

「新しい扇子を買ってくれたら、昨日の事は許してあげるわよ」

ヴィアーナは勢い良く起き上がって兄の背に言い放った。ついでだからねだってみよう。昼間、ロンドデルルの双子が持っていた様な扇子を。

「あれはやり過ぎだが、こんな悪書を読み耽っていたお前だ。反省させる為にも百貨店へ行くのはしばらくお預けだ」

「そんな！」

ヴィアーナは激しく後悔した。が、時すでに遅し。しまった。兄が確実に眠っていると思われる時刻に読めばよかった。

ヴィアーナの唇がへ字になったその時。

まるで悲鳴のような声が聴こえた。ヴィアーナ、ヴィアーナ、私の娘、どこにいるの？ と、屋敷中に響く声で。

「母上か」

言いながら、ハディールは部屋の扉へ向かい、扉を開けて廊下に耳を澄ました。

「またうなされている様だ。ヴィアーナ。早く行ってやれ」

ヴィアーナは兄に頷いて寝台から飛び降りた。ヴィアーナの母は時々、夜にうなされる事があった。そのような時はヴィアーナが彼女の側へ行き、一緒に眠るのがヴァリドゥー家の決まりである。

「行って来ます」

ヴィアーナが駆け足で部屋の外へ出る際、扉を開けていたハディールは自分の脇を通り過ぎる妹の髪を愛おしげにそつと撫でた。

漆黒の青年

翌朝。朝食前にヴィアーナは母の臥所から抜け出し、真紅の夜着にガウンの姿で庭に出て薔薇の世話をしていた。空は薄い紅に染まっていた。

昨晩うなされていたヴィアーナの母は、娘が来て手を握ると大いに安心して寝息を立てた。そんな事はたまにあり、ヴィアーナの母、ヴァリドゥー夫人は何か過去の思い出を引きずっているようでもあったが、娘には一切その事を話さなかった。

ヴィアーナが蹲って花壇で育てている薔薇の花びらの剪定をしていたその時、ヴィアーナの視界の隅で人影がよぎった。人影の方を振り仰ぐ。兄だ。

紅玉で出来た水盤には葡萄酒が満ち、真紅の薔薇の咲き乱れる庭に、燃える様な赤い髪、血の様に赤い外套を身に纏った類稀なる美貌の青年、真紅の貴公子ことヴァリドゥー家の当主、ハディールが佇んでいた。空を仰いでいる。おそらく地上へ出立するのだろう。

ヴィアーナはしばし兄の姿とその横顔に見惚れた。こんな夢の様な青年が自分の兄だなんて。

「お兄様……」

ぼつりとヴィアーナが呟くと、気付いてハディールは声の方を向いた。炎の気性を宿す彼の真紅の瞳は妹を認識するとたちまち和む。

「もつご出立？」

朝食もまだなのに。ヴィアーナが薔薇の剪定を止めて立ち上がる
うとしたその際、指先に鋭い痛みが走った。

「あっ」

棘に刺さった様だ。確認すると、小さな真紅の玉が指先で膨れて
いた。

「大丈夫か？」

案じながらハディールが歩み寄って来た。ヴィアーナは頷きなが
ら立ち上がる。しかし思いの他深く刺してしまった様で、涙が滲ん
でしまう。兄に見られたくない。

ハディールは目の前の負傷した手を胸に抱いてうつむいたヴィア
ーナの顎を上げて潤んだ瞳を確認した。

「泣き虫め」

次に傷付いた妹の手をそっと手に取ると、自身の唇に押し当て、
やがて啜えた。

「っ」

ヴィアーナは兄の唇と舌の感触に身体をびくりと震わせた。同時
に視線を反らす。どうしてそんなに見つめるのか。居たたまれずに
指を兄の唇から引き離そうとするが、力強い兄の手は全く解放して
くれない。

「うう……っ」

まただ。またあの妖しい感触。兄から深く接吻された時と同じ様に、身体の奥が疼く。

「お兄様、また私をからかつ——」

動転したヴィアーナが兄に喚こうとしたその時、指先が漸く解放された。

「——泣き虫のお前だ。あの時もさんざん泣くんだらうな」

「あの時つって——」

はっ、とヴィアーナは昨日、兄に没収された本の内容を思い出す。ヴィアーナはもはや兄の言葉の意味が薄々とわかる様になっていた。

ハディールは妹の表情の変化を読み取る様に真紅の瞳を鋭くした。

「やっぱり、お前にはお仕置きが必要だな」

不吉な言葉を残し、ハディールは赤煉瓦の塀の方へ向かった。塀の前まで来て地面を蹴った直後、彼は巨大な真紅の鷹に変化し、翼を広げてそのまま空へと飛び立った。

さて。兄に没収された借り物の本を何とかしなければなるまい。

真紅のドレスに着替え、朝食を終えたヴィアーナは自室のソファ

に腰掛けあれこれと思考をめぐらせた。本来は勉強に当てられる時間であるが、家庭教師が兄に突然解雇された為に、ヴィアーナは気ままな時間を過ごしていた。

双子から借りた例の小説を、ヴィアーナはまだ五十ページ程しか読んでいなかった。あと数百ページ未読だ。小説の主人公メロリアンと謎の青年アドル、そして主人公の婚約者ダトリール男爵はどうなるのか。最終的にメロリアンは誰を選ぶのか。何としても続きが読みたい。

しかしハディールの部屋には鍵が掛けられている。魔法の研究などに使う薬品があり、よく何があるのかと面白がって勝手に侵入していたヴィアーナの身を彼が案じた為である。

「うーん……」

使用人に書店へあの本を買いに行かせるのはどうだろう。いや、書店くらいなら自分でも行けるのではないか？ 屋敷からそれほど離れていないはずだ。

（この自由な時間も、次の家庭教師が来れば終わってしまうわ）

それならば。ロンドデリルの双子の様な真似は出来ないが、一人で近所の書店へ行くくらいなら。

「決めた！ 書店へ行くわ。そしてあの本を買って続きを読むの」

決断し、ヴィアーナは立ち上がった。何と言う名案だろう。心躍る。そうと決まればこうしてはいられない。まずは今着ている真紅のドレスを脱がなければ。外歩きには向いていまい。馬車を出すの

には母か兄の許可が必要だから、それは出来ないのだ。

ヴィアーナはドレスを脱いでクローゼットの扉を開く。しかし赤いドレスしかない。出鼻をくじかれ、ヴィアーナは吐息を漏らす。そして扉の裏に貼られた小さな鏡に映った自分を見て再び嘆息する。

ヴィアーナは鏡を見て思う。この髪と目。どんなに市井の娘のような身なりをしても、この赤はヴァリドゥー家の人間の特徴であり、この姿で道を歩くのはお忍び中のヴァリドゥー家の人間ですと言って回るようなものだ。どうにかしなければ。

「そうだわ。誰か魔法が使える者がいたような……」

（——馬丁のキール。あの人少し魔法が使えたはずだわ）

私のおこずかいを彼に渡して服と髪と目の色を変えて貰おう。それがいい。そうしよう。ヴィアーナはクローゼットの中から比較的裾の広がらぬ、装飾の地味なものを選んでそれを着た。

母との昼食を終え、難色を示す馬丁のキールに無理やり口止め料兼手間賃を渡し、髪をこの世界におけるごく一般的な色である金色、瞳を緑、そして地味なドレスをこげ茶色に変えてもらったヴィアーナは、まんまと屋敷の外へ出るとレースの白い日傘——宮廷魔術師が闇一色であった空の色を変える様になって婦人達の間で流行り始めたのだ——を差し^{エクスラド}て緑石の街路樹の路を歩いた。

開放的な気分にヴィアーナの足取りは軽くなる。私は今、貴族の娘でも何でも無い、ヴァール・ドゥナ・ガーシュのごく普通の娘。

馬丁に施されたこの魔法はそれほど持たないと言う事なので、書店で本を購入したらすぐに屋敷に帰らなければならないが、それでも

馬車が行き交う目抜き通りに出たヴィアーナは辺りの建築物を見回しながら歩く。書店は市街地の目抜き通り沿いにあつたはずだ。確か百貨店の並びの近く。いつもはヴァリドゥー家の炎のたてがみを持った馬が引く四頭立ての馬車を止めるあの場所の近くだ。

「あつ、見つけた」

開いた書物の形をした大きな看板が目に入り、ヴィアーナはその白い壁に葡萄と蔓の浮彫の施された重厚な建物の中へ入った。

ヴァール・ドゥナ・ガーシュで一番大きな書店、『リントス』の中に入ったヴィアーナは、日傘を畳むと入り口で足を止め、まずは整然と並んだ書架の群れを見渡した。立ち読み客も多い。

（あの本は一体どこにあるのかしら）

緑色のお仕着せを着た男性店員が通りかかり、ヴィアーナは彼を呼び止めた。

「本を探してくださる？」

「どういった本でございましょう。題名、または作者名などはご存知ですか？」

「『甘い果実』と言う題名の小説よ」

静かな店内に響いてしまったヴィアーナの声に、立ち読み客が本

から顔を上げる。ヴィアーナは頬を染め口元を覆った。本の清算が済んだら即刻退散だ。

書店から出て、本の入った袋を携えたヴィアーナは帰路に着いた。しかし、書店はヴィアーナの屋敷からほど近いはずだと言うのに、一向にたどり着かない。ヴィアーナの心に不安が押し寄せる。まさか道に迷ってしまったのでは。

そんな折、雲行きが怪しくなった空からぽつりぽつりと雨が降って来た。日傘を叩く雨音に、ヴィアーナは空を見上げる。

「何て事なの」

次第に雨足はひどくなり、気付けば水に浸された街路の上で水がはね踊るほどになった。もはや日傘で防げるものではない。

「本が濡れてしまうじゃないの！」

本が濡れるのは時間の問題だ。急ぎどこかで雨宿りをしなければ。ヴィアーナは辺りを見渡し、目に入ったパン屋の軒下へ向かって駆けた。本は死守しているものの、ドレスはもはやびしょ濡れだ。

「雨なんて要らないわよ、宮廷魔術師さん！ いい迷惑だわ！」

空へ向かってヴィアーナが怒声を発したその時。

「ですが、砂埃の街路や建物の屋根はきれいになりますよ」

実にのんびりとした、歌うような声がして、ヴィアーナが振り向くと、いつからそこにいたのか、すぐ隣に髪も身に纏う外套も漆黒

の、実に高雅な顔立ちの美青年が立っていた。ヴィアーナと同じく雨を凌いでいるようだ。

「乗り合い馬車がここへ来ますので、良かったら家で雨宿りして行きませんか？　すぐ近くなのですよ」

「ええ、是非」

ヴィアーナは青年の誘いに一も二も無く飛び付いた。良かった。これで本が濡れなくて済む。

青年はヴィアーナへ向けてにこりと柔らかく微笑した。彼女の兄と同じくらいに丈高いその白皙の青年の、黒く長い睫毛の中の瞳は、アメジスト紫水晶の様であった。

青薔薇の屋敷

乗り合い馬車から降りたヴィアーナは街で出会った謎の青年の漆黒の外套マントに庇われて雨の中、彼に誘導されるまま街路を駆けた。

ヴィアーナは購入した本を抱き締めて走りつつ、青年の外套の中から雨雲で薄暗くなった街路を見渡す。ここはどこだろう。乗り合い馬車に乗っている時間はほんの僅かだった。道路は様々な色タイルで整地され、しつかりとした門構えの屋敷が並んでいるのを見ると、市街地のど真ん中に展開する高級住宅地なのだろうが、あまり外に出た事が無いヴィアーナにはほとんどと言って良いほど土地勘が無い。

ふとヴィアーナが青年を見上げると、彼は本で頭を庇っていた。ひよっとすると、買ったばかりの本なのではないのだろうか。自分だったら外套の中に入れて濡れるのを防ぐけれど。

「本が濡れてしまいましたわね」

「読めれば問題ありませんので」

即答に、彼は少し兄に似ているかもしれない、とヴィアーナは思った。年も兄と同じくらいであろう。

「もうすぐ着きます——あのぼろ家です」

青年が指差したのは高い塀に囲まれた豪壮な屋敷だった。

（家より立派じゃない！）

一瞬ヴィアーナは思った。しかし、屋敷に近づくにつれ、ヴィアーナの胸に不安が芽生え始めた。古い。

屋敷の塀には大きなひびが幾つも入っており、屋敷の門には無数の蔦が絡んでいて長い事手入れがされていない様子である。一見すると無人の屋敷だった。

「さあ中へ」

青年がヴィアーナを促しつつ黒い門を開けると身も世も無い女の悲鳴のような音がした。蝶番に油が長い事差されていないようだ。

扉が開くと屋敷の敷地から風に乗って鮮やかな青い色の花びらが街路に広がり、ヴィアーナの濡れた足元にも張り付いた。薔薇の花びらだった。屋敷の敷地には一面にびろうどのような深く青い薔薇の花びらが敷き詰められていた。

「青い薔薇……」

ヴィアーナは思わず呟いた。青がこんなにも深遠な色だったとは。

いつしか雨は止んでいた。しかし雲はまだ重く暗い。灰色の空の下、青年の後に続きヴィアーナは敷地の中へ入った。青い絨毯を踏みしめながら奥へと進むヴィアーナの目に入る何もかもが古色蒼然としていた。薔薇の蔦の這った円柱や石膏像の裸婦が庭のそこかしに佇み、水槽が干からびてひび割れた噴水はヴィアーナが通り過ぎると客人を歓迎する様に中央から青白い光を躍らせた。

「きれい」

噴水の前で思わずヴィアーナは立ち止まった。我が家の庭にもこんな仕掛けの噴水が欲しいものだ。

「それにしても荒れ放題のお庭ね」

残念だ。手入れすればもっと素敵になるだろうに。

「ここには私一人しかいないもので、庭にまでなかなか手が回らないのです」

青年は立ち止まりヴィアーナを振り返ってはははと笑いながら答える。

「一人？ こんな広いお屋敷に？ 嘘でしょう」

規模から言えば大貴族や大富豪の邸宅並みではないか。一体この青年は何者なのだろう。

「いえ本当です。ここには滅多に帰りませんが——ちょっと荷物を取りに帰った所で貴方と会ったのです」

「別宅があると言っ事なのね」

「はあ、まあ、そのようなものがあります」

青年は曖昧に答えながら蔦の葉に覆われた建物の方へ歩き出す。ヴィアーナは駆け足で青年に追い付いた。

「別宅があるのに庭や屋敷の手入れをする者を雇えないの？」

見上げた先にある横顔にヴィアーナは恍惚となった。美神の彫刻の様だ。雨に濡れてその額に張り付いた黒髪が彼の凄絶な美貌を一層引き立てる。

「参りましたね。もうその辺で勘弁してください、お嬢さん」

青年は肩を竦めながら演技じみた弱った声で哀願した。別段本心から弱ってはいないようだ。食えなさそうな人物である。

「ヴィアーナですわ」

ヴィアーナは名を告げた。名前だけなら良いだろう。姓さえ教えなければ。

「貴方は？」

「これは失礼しました。モスリーと申します」

彼もまた姓では無く名だけ告げた。

「モスリー様……」

どこかで聞いた事のある名前だ、とヴィアーナは記憶の糸をたどるが、思い出せない。しまった。これほどの家ならば大抵は門のどこかに家紋が掲げてあるはずだ。確認すれば良かった。青い薔薇の美しさに気を取られていた。

（謎の青年はアドルで、メロリアンの婚約者はダトリール男爵……なら気のせいね。聞いた事の無い名だわ）

昨日と今日で未知の情報が頭の中に一気に押し寄せて来たせいで混乱しているのだろう。

モスリーの屋敷の応接間に通されたヴィアーナは、彼に待っている様に言われ、埃まみれのソファに腰掛けた。広い部屋の中を見渡してみる。漆喰の天井には美しい薔薇の彫刻が施されており、壁には手刷りと思われる青薔薇の意匠を用いた壁紙が貼られ、重厚な檜材の腰壁に囲まれた格調高い部屋であった。しかし先ほど見た庭と同様、大理石の暖炉も棚もテーブルも埃が堆積していてしばらく手入れされた形跡が無い。

ヴィアーナは暖炉の上の大鏡の手前に、小さな四角い金の額縁に収められた肖像画が乗っているのを見つけた。黒髪の若い女性が描かれている。あの青年、モスリーにどことなく面影が似ていた。彼の姉か妹だろうか。

ヴィアーナがぼんやりとそんな事を思っていたその時、戻ったモスリーが扉を開けて入って来た。漆黒の外套は脱いでいたが、やはり総身黒ずくめである。彼の手には紫色の女性ものの衣類がある。

「母のドレスがありましたんで、良かったら着替えてください。濡れていて気持ち悪いでしょう？」

「えっ」

善意を前面に押し出した様なにこやかな表情で差し出されたドレスを、ヴィアーナは躊躇しつつもソファから立ち上がり受け取った。

まさか下心はあるまい。

ヴィアーナがドレスを抱いてじつとモスリーの次の行動を見守る中、彼は華麗に踵を返し——乗り合い馬車からここへ来るまでの間に、ヴィアーナは彼の身のこなしが素晴らしく優雅である事に気付いていた——かくしてヴィアーナは無事に少し胸の部分が余る紫色のドレスに着替え終えたのだった。再びノックしてモスリーが部屋へ入って来た時、彼が手にした盆の上には銀製の茶器があり、紅茶の葉が丁度開く頃合であった。

「ところでヴィアーナ。それは何の本なんですか？」

ヴィアーナの向かい、テーブルを挟んだソファーに掛けたモスリーは茶をすすりながら彼女の脇に置かれた本に目をやる。本には『リントス』の葡萄の意匠が入った紙製のブックカバーがかけられていた。

「えっ……あっ……その」

ふいに問われてヴィアーナは紅茶の入った器を零しそうになった。おっとりした雰囲気のもスリーだが、本に目をやる彼の眼光は兄並みに鋭い。

ええい、言ってもわかるまい、と思い、ヴィアーナは口を開く。

「『甘い果実』……と言う小説ですわ」

澄まして答える。

「ああ——聞いた事があります。今話題の女性向けのきわどい本で

すね」

気まずい沈黙が流れた。

「それにしても良い香りのお茶ですわね」

「湿気ていなかったので使いました。香りも飛んでいなかったようですね。良かった」

「ここにはどれくらいいらして無かったの？」

「さて……もう半年以上になりますかねえ。前回も本を取りに来ただけでしたが」

「そんなお茶を私に!？」

私はヴァール・ドゥナきつての名門、ヴァリドゥー家の令嬢よ、と切り札的な台詞が口を突いて出そうになる。だが、彼がいなければ本も濡れていたし、濡れたドレスのまま家にも帰れずに街中をさまよって風邪をひいていたかもしれない。紅茶の事くらい我慢すべきであろう。

モスリーは申し訳無さそうに頭を掻いた。ヴィアーナは衝撃を受ける。男のものには違いないのだが、まるで豎琴を奏でる者のそれのように繊細な手だ。

「——ごめんなさい。飲めれば問題ないわ」

居住まいを正し、ヴィアーナは再び紅茶を味わった。味わいながら推理する。

「わかった。貴方、何かを奏でる人ね？　豎琴とか」

少しでもだけたヴィアーナの問いに、モスリーは考える様に天井を仰ぎ見る。

「うーむ——まあ、幻を奏でる事はありませんが」

人差し指で天井を指し示し、楽団の指揮者の様に振りかざすと、彼はシャンデリアの光を赤青黄色と変化たり、何も無い天井から青い薔薇の雨を降らせた。

「このように」

指先を軽くふつて元の状態に戻すとモスリーはヴィアーナに向けて微笑を浮かべた。

ヴィアーナは思わず笑んだ。彼は機知に富んだ人物のようだ。どこか得体の知れないその微笑に彼の謎は深まる一方である。同時に好奇心も。

「良いわね、魔法が使える人って。私、魔法が使えないのよ」

「ん？　貴方には魔法がかかっているようですが……それは自分でかけたものではなかったのですね」

ヴィアーナの頭を見ながら呑気にモスリーは言う。ヴィアーナは思わず頭髮を押さえた。そうだ。この髪、そして目。馬丁のキールに色を変えて貰ったけれど、キールの魔法はそれほど持たない。まさか。

馬丁のキールに金色に変えて貰ったヴィアーナの髪は、モスリーと時を過ごしている内にうつすらと赤を滲ませる様になっていた。瞳の緑色に至ってはもはや真紅である。

「さて。『どちら』が本当の貴方なんでしょう」

さして驚いた風も無く、モスリーは言う。

「面倒な魔法だ——赤が本当なら少し怖ろしい気もしますが」

のんびりとした声のにこやかなモスリーとは裏腹に、部屋に不穏な空気が満ちた。警戒されている、とヴィアーナは察した。

「き、金色、金色よ！ 目は緑なの！」

ああ、私に魔法が使えたら！ このまま完全に真紅の髪と目に戻ればモスリーの警戒は本格的な物になるだろうし、帰り道も難儀しそうだ。頭を覆い目を閉じていたヴィアーナの手にふいに何かが触れた。氷の様に冷たい。

ヴィアーナが目を開けると、間近にテーブルから身を乗り出したモスリーの顔があつた。彼の神秘的な紫色の瞳に、刹那、ヴィアーナの魂は吸い込まれそうになった。自身の頭を覆うヴィアーナの手には彼の手が重ねられていた。

「何も聞きません。解りました。髪は金色ですね」

ゆっくりと、モスリーの手がヴィアーナの髪の上を滑る。赤に変じようとしていた髪は見る間に金色になった。

「目を閉じてください」

促され、ヴィアーナは目を閉じる。すると瞼の上に彼の指がそつと触れられた。本当に、冷たい手だ。

「瞳は緑——さあ、開けてください」

ヴィアーナが再び目を開けると、馬丁のキールにかけられた鮮やかな緑色の瞳が戻っていた。

「馬車の中でもずっと思っていたのですが、貴方は私の初恋の人にとっても良く似ている」

ヴィアーナの片頬に触れ、懐かしむ様にモスリーは言った。

「さわ……らない……で」

私に触れても良いのはお兄様だけ。ヴィアーナは手を撥ね退けようとすが、出来なかった。身が竦む。彼は魔力のある怖ろしい瞳をしている。

「これは失礼」

モスリーはさっと身を引いた。

「子供の頃の話です。どうかお気になさらず」

モスリーとすぐに視線を合わす事も出来ず、何やら居たたまれずにヴィアーナは窓の方に目をやった。いつの間にか空は晴れ、夕の

色に染まろうとしていた。

黒塗りの馬車

「大変！ もう帰らなくちゃ」

モスリーの屋敷の応接間で、ヴィアーナは夕暮れになりつつある窓の外を見て叫んだ。兄が帰って来る前に帰り着かねば、大変な事になる。

「では馬車を手配しましょう」

モスリーが椅子から立ち上がった時、窓の外で鳥の鳴き声がして彼もまた窓の外を見た。

二人が見守る中、窓の外のバルコニーに一羽のカラスが飛来して欄干に止まった。

ヴィアーナはほつと胸を撫で下ろす。一瞬兄かと思った。否、鳥は鳥でも兄が変化するのは鷹だ。カラスのような鳴き方はしない。

「丁度良いところへ」

モスリーはカラスの方へ歩み寄り、窓を開けた。バルコニーの欄干に止まっていたカラスは彼がバルコニーに歩み出るより早く羽をはためかせて彼の肩に飛び移った。

「ご主人様がなかなか戻らないので心配になって様子を見に来たんです」

カラスはモスリーに女の子の様な愛らしい声で語りかけた。

「来客がありまして」

モスリーがカラスに答える。

（カラスが喋ったわ）

ヴィアーナは部屋の中からモスリーと会話する肩の上のカラスを見て思った。

（人が変化しているのかしら。お兄様のように）

魔力甚大なる真紅の鷹が始祖であるヴァリドゥー家だが、代を経るごとに文明を築くのに最も適した形、つまり人の形に変容していき、始祖がかつて有していた魔力と本質のみを留めるようになった。これは魔法王国ヴァール・ドゥナ・ガーシュにおける全ての民に言える事である。ヴィアーナの兄ハディールの本来の姿も人の形である。ただし何も考えずに変化を行った場合、始祖の姿に近くなる。

「丁度良い。エリン、このお嬢さんをお送りしなければなりませんので馬車の手配を」

命じられたカラスはモスリーの肩の上で小さく跳ねて移動し、ヴィアーナの方を振り向く。

「エリン、エリン」

があがあとカラスは騒ぎ出し、羽をはためかせると部屋の中へ入り込んだ。

「きゃあ」

突然の事に驚き、ヴィアーナは後ろへよろけそうになったが辛うじて踏みとどまった。カラスがヴィアーナの真上を旋回している。羽を掠められたシャンデリアは小さく揺れていた。そのうち碎けて降り注ぐかもしれない。

「お、落し物しないでね。一体何なの」

ヴィアーナは頭を庇い、シャンデリアの真下からすこし離れた。しかしカラスは上空で円を描きつつヴィアーナを追って移動してくる。ヴィアーナは蹲ったどうすれば良いのか。

「やだもう、モスリー様、助けて」

ヴィアーナが助けを乞うと、彼はバルコニーで肩を竦めた。部屋の中へ向けて歩み出す。

「エリン、やめなさい。お嬢さんがびつくりしていますよ」

モスリーはカラスを仰ぎ見て言いながら、部屋の中へ入って来た。カラスの名はエリンと言うらしい。不思議な響きだ。ここヴァール・ドウナに無いような。

「だってだって初恋のエリンじゃない！ ご主人様、もう私の事なんてどうでもいいんでしょうね、いいんでしょうね」

「何を言っているんです。別人です。それよりも早くなさい。私の命令が聞けないのですか？」

あくまでも柔らかい口調だが、語尾にわずかに冴え冴えとしたものを宿して、モスリーはカラスに訊く。

「めめめ滅相も無いです、手配して参ります、まま参ります」

カラスは慌てたように窓から飛び出して行つた。

「——うちのカラスがお騒がせしました。ヴィアーナ嬢」

モスリーがヴィアーナの所へ歩み寄つて来る。ヴィアーナは騒動によつて乱れた金髪を整えつつ安堵の吐息を漏らした。

「あのカラスは人が変化したものではないの？」

「ええ。ただのカラスです。私の世話をしてくれています」

カラスを飼育するなんて珍しいと思いつつも、ヴィアーナは口に出さなかつた。何となく解つてきた、この青年が。廃屋のようなこの屋敷と言ひ、かなり風変わりのようだ。

「初恋の人の名はエリンと言つのか？ カラスもみたいだったけど」

初恋の人の名を付けたと言つ事なのだろうか。

「そうです。いやはや、お恥ずかしい。これ以上の詮索はご勘弁を」

モスリーは頭を掻きつつ照れている風を見せるが、彼の顔は依然として柔らかな笑みを浮かべたままの鉄面皮だ。ヴィアーナは少し齒痒い気がした。カラスの事であんなにうるたえるんじゃないかった。目の前の青年には何かに動揺したり、顔色を変える事などあるのだ

ろうか。モスリーとは僅かな時間を過ごしたただだが、おそらく彼は普段からこうなのだ。恋をしたと言うのが不思議なくらいだ。

「モスリー様」

「様は不要です。私は貴方の事をヴィアーナと呼びたいのです」

風変わり、柔和な微笑の鉄面皮、そして少しずうずうしい男だ、と内心ヴィアーナは苦笑した。ずうずうしいのは何かしらの裏打ちがあるゆえの自信からくるものかもしれないが、目の前の自分がヴール・ドウナきつての名門貴族、ヴァリドゥー家の令嬢だと知れば、どんなに富裕な者であっても、よしんば貴族であろうとも簡単に叶えられる事では無い。けれど今は市井の娘。

「ではモスリー。今日は本当にありがとう。本も濡れずに済んだし、ドレスを貸してくれたお陰で風邪をひかずに済んだわ」

「私のほうこそ。今日は貴方のようなお嬢さんと出会えて良かった。まさか雨がこんな楽しい時間を与えてくれようとは」

ヴィアーナも同感だった。そう言えば、雨が降った後は我が家の庭の薔薇がいきいきとしている。あれも雨のお陰だった。

「このドレスは洗濯してきつとお返しするわね」

つい、とモスリーは更に前に歩み出てヴィアーナの手を取った。相変わらず冷たい。触れるなど言ったのに、この男は。

モスリーは紫色の双眸でじっとヴィアーナの目を見つめた。

「ドレスはどうか、ご不快でなければ返さずに受け取ってください。ドレスもきつとその方が喜ぶでしょうから」

「えっ……いいの？ これはモスリーのお母様の物なんじゃ」

「母は私が子供の頃に亡くなりまして」

「貴方、天涯孤独と言っちゃつなのね」

「おっしゃる通りです。母のドレスを着た貴方を見た時、胸が熱くなりました」

低く美しい声は哀愁を帯びるものの、やはりその表情は少しも感情を表出しない。それよりも、彼の顔が徐々にヴィアーナに近付いて来るではないか。危機だ。

「ちょ、ちよつとモスリー！」

ヴィアーナは身を引こうとしたが、手を握られていて逃げるに逃れられず、顔を紅潮させ、ぎゅつと目を閉じる。身体が震える。

しかし、いつまで経ってもヴィアーナの唇に彼のそれが触れる事は無く、やがて、ふふ、と彼の笑う声が聞こえた。

「可愛いですね貴方。特にその唇」

ヴィアーナが目を開けると、モスリーの美貌がそこにあった。優しい微笑はほんの少しだけ、心の奥からの感情を滲ませているようだ。

「またいつかお会い出来るといい——いえ、きっとそうなるでしょう」

モスリーはヴィアーナの手を解放すると、窓の方を振り向いた。

「エリンが帰って来ました。馬車が着いたようです。さあ外へ」

外はもはや夕闇に沈んでいた。布に包んで貰った濡れた衣服と購入した本を手にしたヴィアーナと漆黒の外套を羽織ったモスリー、そしてカラスのエリンが青薔薇の屋敷を出ると、薄闇の中、門の前にそれでもはつきりと解るほどの豪華絢爛な黒塗りの箱馬車が停まっていた。二頭立てで黒馬が引き、馬車の扉部分や車輪は金で装飾されている。

「何だかすごく豪華な馬車だけど……」

二頭立ての簡素な物だが、こんな見事な造りの馬車は我がヴァリドゥー家にも無い。本当に彼は一体何者なのだろう。

「自家用では無く、貸し馬車です」

補足しながら、モスリーは肩の上のカラスを軽く睨む。

「それにしても豪華ですね」

「これしか無かったんです」

エリンが羽をばたつかせて言い訳する間、馬車の御者席から紫色

のお仕着せを着た御者が降りて来てドアを開き、緋色の絨毯の敷かれた折り畳み式の階段を引き出した。

ヴィアーナは馬車の方へ歩みながら、ふと足を止め、何気なく門の方を振り返った。そう言えばこの家の紋章を確認していなかった。

屋敷の門にささやかに掲げられた盾形の紋章に描かれていたのは、一輪の青薔薇を意匠化したものであった。貴族の娘の必須的な知識として名家の家紋は覚えさせられたヴィアーナであるが、このような紋章は見た事が無い。

「さあヴィアーナ」

モスリーから背に手を添えられ、促されてヴィアーナは馬車の中へ進んだ。

やがて二人と一羽が馬車に乗り込むと、階段が収納され、おもむろに扉が閉められた。

「行き先は？」

「ええつと」

ヴィアーナは考える。ヴァリドゥー家の前で馬車を止めてはモスリーに自分の身元がばれてしまう。モスリーは悪人ではなさそうだからそれでも良いのだが、騙したようで後味が悪い。それに、兄がもし帰っていれば親切にしてくれたモスリーにも迷惑がかかるかもしれない。

「七番街の——そうねレアン公園まで」

ラドレ公園はヴァリドゥー家の近所であり、屋敷まで歩いて数分の距離である。

「解りました。レアン公園までお願いします」

モスリーが背後の小窓から御者に行き先を伝えたと、やがて馬車は走り出した。

馬車の中、心地の良い緋色のびろろ張りの椅子に腰掛けたヴィアーナは、向かいの席に長い脚を組んで腰掛けるモスリーから視線を外す為にカーテンを開けて窓の外を見た。

橙色の街灯の点る薄暗い窓の外、街路を花火を散らす派手な馬車や人が行き交う中、物凄い速さで疾駆する光り輝く馬が横切った。それから何頭も、何頭も後に続いてゆく。赤い毛色のその馬は炎のたてがみを持っており、乗り手は赤のお仕着せを着て、片手に松明を持っていた。

「一目瞭然、あの馬はヴァリドゥー家ですね、ご主人様。何だか物々しい様子ですけど、何があったんでしょうねっねっ」

モスリーの肩からカラスも窓の外を覗き見て零す。

ヴィアーナと言えば、窓の外を見たまま、思考が停止して硬直していた。

（……お兄様だわ。もう帰っていらっしやっただわ）

恐怖のあまり、ヴィアーナの唇に薄ら笑いが込み上げてきた。あ

の馬の群れは自分の搜索隊に違いない。それ相応の覚悟をして帰宅しなければなるまい。

「どうしました？ ヴィアーナ」

弄うような紫の瞳と目が合う。ヴィアーナの内面を見透かすような。もしかすると、この青年はヴィアーナの正体を知っているのかもしれない。

「いい、え、何でも」

「もうすぐ着きますよ。公園」

レアン公園の入口に馬車を停車めて貰うと、ヴィアーナは荷物を手に馬車から降りた。空にはすでに明るい星が出ている。

「今日は本当にありがとう」

ヴィアーナは振り返り、馬車を降りたモスリーに再び礼を述べた。

「そんな事をしている場合ですか。さあ、早く帰らないと、門限はとつくに過ぎているのでしょうか？」

「え、ええ。そうなの。家の者が厳しくて」

ヴィアーナがぎこちなく答えると、ふいにモスリーは一步前に進み出た。先刻の事もあり、ヴィアーナは思わず身構える。

モスリーはさっと華麗な仕草でヴィアーナの目の前の空間を撫でた。

「護身に妖魔を付けておきました。家に入ればその家の持つ結界の力により消滅する程度のものなので心配要りません。家にたどり着くまでに貴方の身に何かあればすぐに私に知らせが届くと言っただけの事」

「あ、ありがとう」

「——お兄様によろしく、と言いたい所ですが、やはり私の事は伏せておくのが良いでしょうね」

声を低めて言うと、モスリーは身を翻し、馬車に乗り込む。

「それでは可愛いヴィアーナ、近いうちにまたお会いしましょう」

肩越しにかえりみてヴィアーナに再会を望む別れを告げると、扉は閉まり、馬車は再び走り出した。

モスリーの言葉に驚く時間も別れを惜しむ時間も全て後回しに、ヴィアーナは一目散に我が家へ向かった。

数分後、ヴァリドゥー家にたどり着いたヴィアーナは、突如現れた髪と目の色が違う令嬢に戸惑いつつも目下搜索中の彼女だと認めた門番から、ヴィアーナの母が行方不明となった娘を心配するあまり倒れてしまった事、そして兄ハディールが黙って家を抜け出た妹に烈火のごとく怒っている事を知らされた。

怒れる真紅の鷹

ヴィアーナは屋敷の中へ入ると、執事に濡れたドレスや購入した本を自室へ届けるよう命じてから、まずは彼女の母がいると言う居間に向かった。恐らく怖ろしいご面相をしていると思われる兄ハデイルとの対面は後回しだ。

「お母様！　ただいま戻りました」

ヴィアーナが居間へ入ると、そこには一人掛けの椅子の背もたれに、脱力した様にほとんど仰向けの状態で座る母ヴィアネーラの姿があった。いつものヴィアーナと同じ赤い髪と瞳に真紅のドレスを纏った貴婦人だ。細い眉とまなじりが上がった、少々きつめの高雅な顔立ちはどこらかと言えば兄ハデイル似である。見た目の年齢はヴィアーナの姉で通るほどに若く美しい。小間使いが運んで来た水を、手だけ差し伸ばして受け取っている所であった。

「ヴィアーナ……？」

か細い声とともに、ヴィアネーラは青ざめた顔を入り口の方へ向ける。入口に立った娘の姿を確認すると、彼女は真紅の瞳をこれ以上ないほどに見開いた。

「ヴィアーナ！　何処へ行っていたの！？」

コップを小間使いの持つ盆に置いて、ヴィアネーラは娘に向けて両手を広げた。ヴィアーナは母の元へ駆け寄ると緋色を基調とした草花の模様の絨毯の床に跪いてその腕に飛び込んだ。

「ごめんなさい、お母様！」

ヴィアーナは母の胸の中で謝罪した。ヴィアネーラは力の限り娘を抱き締める。

ヴィアーナの胸の中で次第に罪悪感が膨れ上がった。ちょっとした思い付きでの行動が、これほど母を憔悴させる事になるとは。

「——わたくしがどれほど心配したか分かっているの！？　この子は」

「本当にごめんなさいっ、ごめんなさいお母様！　一人で街へ出てみたかったの。まさかこんな騒ぎになるなんて」

「当たり前です。お前はヴァリドゥー家の大切な一人娘なんですから。いなくなったら家の者総出で街中を探し回るに決まっています。あと一時間、探しても見つからなければハデール自ら馬を出して国王様に嘆願し、搜索のお触れを出して貰うところでした。もちろん明日の新聞にも載せるつもりでしたよ」

「そんな……大変な事に……？」

ヴィアーナは自分の身体が小さく震えるのを感じた。自分は、何と言う事をしてしまったのだろう。

「それもこれも、貴方がわたくしの大切な娘だからです——さあ、顔をよく見せておくれ、ヴィアーナ」

母に言われるまま、ヴィアーナは彼女の腕の中から顔を上げた。ヴィアーナの瞳に涙が浮かぶ。ヴィアネーラはそれ以上詰る事をせ

ず、娘に慈愛の眼差しを注ぎながらその頬に触れ、その感触をひとしきり確認すると今度は金色に変わっている髪を優しく撫でた。

「何て髪をしているの。ああ、キールに魔法で変えて貰ったのね」

キール、と聞いてヴィアーナははっと気付く。居間へ来るまで馬丁のキールの姿を見なかったが、彼はどうしたのだろう。ヴィアーナが街へ出る際に髪と目の色を魔法で変えてくれた彼である。

（まさか、私の事でお兄様から酷い折檻を受けているんじゃない……）

「そう言えば、キールはどうしたの？ お母様」

顔を青ざめさせてヴィアーナが問うと、彼女の髪を撫でていたヴィアーナの手が止まった。

「さ、さあ……」

気まずそうに視線を反らす母に、ヴィアーナは不吉な予感がした。

「あの子、ハディールにひどく怒られていたわね。貴方が一人で出歩こうとするのを、阻止すべき所を手助けをしたのだから、当然と言ったら当然なのでしょうけど……」

ヴィアーナの話尾が小さくなる。ヴィアーナは確信した。冷静そうに見えて気性の激しい兄の事だ。おそらくキールは酷い目に遭った、もしくは今も遭っているに違いない。

「お兄様は今どこに？」

怒られるのも折檻を受けるのも私だけでいい。髪を目の色を変えて貰うのも彼に無理やり頼み込んだ事だ。キールに罪は無いのだから。

「書斎にいるわ——私の事はもういいから、ハディールの所へ行つてあげて。あの子、本当に貴方の事を心配していたから」

「わかったわ。お母様。それじゃあ夕飯の時にまた」

ヴィアーナは立ち上がる。

「わたくしはもう休みます。貴方の顔を見たから安心して——もう眠るだけの気力しか残っていません」

元来身体の弱い母である。ヴィアーナは弱々しく微笑する彼女に自責の念が増した。兄がお説教から解放してくれたら添い寝する事にしよう。

「じゃあ明日の朝に」

兄のお説教は長時間にわたるかもしれないので、提案はすまい。

「おやすみなさい、お母様」

ヴィアーナは母の頬に就寝前の口付けをした。母の微笑が完全に笑顔になる。

「おやすみ、わたくしの愛するヴィアーナ」

口付けを返され、ヴィアーナは一礼すると部屋を後にした。さて、

恐怖の書斎へ向かわねば。

兄はどれほど怒っているのだろつ。怖ろしい。怖ろしくて足が竦む。

ヴィアーナはヴァリドゥー家の書斎兼執務室の重々しい扉の前で躊躇っていた。手は扉にノックする直前で止まっている。

（でも、お兄様に会わない事には事態は正式に終息しないから……）

ヴィアーナが屋敷に帰った時点で執事等から書斎の兄に知らせは届いているかもしれないが、ヴァリドゥー家の人騒がせな炎の馬の搜索部隊はまだ市街地を駆け抜けているはずだ。

心を決めて、ヴィアーナは扉をノックした。ややあつて、入れ、とぶつきらばうなハディールの声がした。声の感じからしても兄は相当怒っているようだ。

「ただいま帰りました。お兄様……」

ヴィアーナが扉を開くと、ハディールは細い金縁の眼鏡をかけ、書斎の奥の書類やインク瓶等が置かれた執務用の机の上に両肘を付き、組んだ手の上に顎を乗せて厳めしく待ち構えていた。視線を合わせるのが怖い。ただでさえまじりの上がった鋭い目つきをしているハディールは、眼鏡をかけると余計に眼光が鋭くなる。

視線を合わすのが怖ろしくて、ヴィアーナは床に目を落とした。黒こげになった大きな物体が目に入り、足を止める。

「う、これ……」

ヴィアーナは声を震わせた。

「お前の不良行為の手助けをした馬丁だ」

ヴィアーナは絶叫した。現実を受け止めきれず、一度では収まらず三度絶叫した。

「キール!!」

ヴィアーナはその物体の前に蹲った。黒こげの物体は、よく見ると年の頃十四、五の少年だった。衣服からして、馬丁のキールに間違い無い。

「酷いわお兄様!! あんまりよ!!」

涙を吹き零しながらヴィアーナはハディールを強く睨み付けた。地上世界の人間どもならともかく、兄がまさか、自分の屋敷に仕える人間にこんな残酷な事をするなんて。

ヴィアーナの批難に、しかしハディールは少しも動じない。片手で眼鏡を正し、ヴァリドゥー家の当主としての尊大かつ冷徹な、いつもの彼の表情で妹を正視する。

「当然だ。つまり今回お前がした軽率な行いはヴァリドゥー家にとってそれほどの重大事だと言う事だ。身をもって思い知るといい」

「そんな——そんなあ!!」

ヴィアーナはキールの亡骸にすがって恥も外聞も無くわあわあと泣いた。外の廊下を行き交う家人に聴こえるかもしれないが、そんな事はどうでもいい。ヴァリドゥー家の気性の荒い炎の馬が、この少年には良く懐いていた。気の優しい少年だった。ヴィアーナの命令を断れなかったのだ。

「キールは優しい子だったわ！　うちの馬だってあんなに懐いていたわ！　魔法がちつとも使えない私をなぐさめてくれたわ！　キールは何も悪くないのよ。私が無理やり頼んだだけなのに——それなのにそれなのに、お兄様ったらこんな酷い目に遭わせるなんて！　残酷よ人でなし！　キールの代わりに恨んでやる！　可哀想なキール！」

「自分のした事をすっかり棚に上げてお前は——」

ハディールがぼやく。

「謝るわよ！　ごめんなさいお兄様！　どうも済みませんでした！　——返してよ！　キールを！」

無残なキールの遺体から顔を上げ、ヴィアーナが涙の瞳で改めてキールを見つめると、ふいにその胸の辺りが上下したような気がした。目の錯覚だろうか。しかも彼の目の縁のあたりがきらりと光っている。

ハディールが舌打ちしてもう少し堪えろ、と呟く。

「うっ、うっ……」

キールの口元が耐え忍ぶように引き結ばれ、歪んだ。彼の閉じた目の端から涙が一筋、零れ落ちる。

「キール!？」

「——もう駄目です旦那様。息を止めるのも苦しいし、これ以上お優しいお嬢様を騙し続けるのは……俺なんかの為にこんなに泣いてくださって……俺は俺はっ」

黒こげの遺体が嗚咽を始めたではないか。ヴィアーナは状況を飲み込めず、眩暈を覚えた。

靴墨を塗っただけです騙して済みませんお嬢様、と大声で叫びながらキールは上体を起こし、ヴィアーナに思考する時間すら与えず、あっと言う間に退場した。

室内に微妙な空気の時間が流れた。

やっと状況を理解したヴィアーナは再び兄を睨む。今度はハディールが目を反らす番だ。

「お兄様……悪戯にしては、質が悪すぎるわ」

努めて表情を陰しくしたヴィアーナは机を回り込んで兄の元へ歩み寄った。

「お前が悪いんだ。軽はずみな事をするから」

言い置き、ハディールは真横に立ったヴィアーナの方に身体を向けた。真紅の瞳は相変わらず怒っている。瞳の中に炎を宿している

ようだった。

「あれでは足りない。お前にはそれ相応の罰を与える」

罰、と聞いてヴィアーナは思わず身を竦めた。兄の魔力が凄まじい事は知っている。人間の住む地上世界の街の一つや二つを眼力で破壊出来るほどだ。そんな兄から、一体自分の身にどんな罰が与えられると言っのか。

ハディールは妹の前に金の指輪が嵌められた手をかざした。今からどんな怖ろしい事が降りかかるのか、とヴィアーナは思わず目を閉じる。

「しばらくこの姿でいろ」

空から降って来た大音響にヴィアーナが目を開けると、目の前には兄ハディールの巨大な靴があった。

「な、何？ 私一体どうなったの？」

ふいに何かに背を摘みあげられ、ヴィアーナの足は宙に浮いた。

「きゃ、きゃあああつ、な、何！？」

そのままどんどん高度が上がっていき、ヴィアーナは足をばたつかせて慌てふためく。分厚い本が並べられた書棚が並ぶ書斎の景色が見える。しかしその何もかもが大きい。つまりヴィアーナの身体が小さくなったのだ。

やがてヴィアーナの高度は厳しい顔付きの兄ハディールの怜悯な

美貌の前で停止した。背を摘んでいるのは兄の指だったようだ。

ハディールは目の前にぶら下がったヴィアーナの姿を見て、指先で彼女を揺らしつつ片方の口の端を吊り上げて悪辣に笑む。

「や、やめて、揺らさないでっ！ 高いっ！ 落ちたら死んじゃう！」

「これでお前は家から容易に出ていけまい。出ようとしても敷地から出るのに何日もかかってしまうだろうな。その間に家の誰かに踏み潰されるかもしれない」

「な、なんて意地悪なお兄様！ もう勝手な事はしないから、早く元に戻してよ！」

「反省の色が無いぞヴィアーナ」

ハディールは机の引き出しを開けると文具の収められたそこにヴィアーナを放り込んだ。

「お前が本当に反省するまで、元に戻す気は無い。まずはそこで頭を冷やせ」

言っと、ハディールは無慈悲にも引き出しを閉めた。

「嫌っ、お兄様！ 暗いのは嫌よ！ 出してっ！」

突然暗闇の中に閉じ込められ、ヴィアーナは喚きながら壁——引き出しの中——を叩いた。せめてランプくらい欲しいものだ。

「ランプも無いわ。あるのは硬くて冷たい床と物言わぬ文具達だけ。こんな所にいたら身体どころか心まで冷え切ってしまいそう」

「文句が多いぞ」

すかさず返って来た兄の声に、ヴィアーナは仕方無く床の上に腰を下ろして兄の怒りが解け許しが出るのを待つ事にした。

「せめてパンとお水をちょうだい。おなかが空いたの。晩御飯をまだ食べていないから」

ヴィアーナが外に向けて声を張り上げると、外で瓶の蓋が開く音や食器の音がした。しばらくして引き出しが僅かに開き、厚手のハンカチと蜜の載った焼き菓子が一つ投げ込まれ、小さくなった茶器に入った紅茶が未開封のインク瓶の口の上に置かれた。

「ありがとう、看守さん。ヴィアーナの願いを聞いてくれて。ハンカチはひざ掛けに使わせていただくわ」

しおらしい声で礼を言う。ヴィアーナは兄の怒りの解き方を本能的に知っていた。怒った兄とは会話するのが何より一番なのだ。

「ところで何してるのお兄様——あ、この紅茶冷めてる……」

不満を漏らしつつヴィアーナは茶器を傍らに置き、先ほど引き出しの中に転がってきた菓子を両手で抱えて齧りつきながら訊く。暗闇と思っていたが、引き出しの間に僅かな隙間があり、そこから光が漏れている。真の暗闇ではないので安心だ。

「お前の搜索を打ち切る為の書き物だ——まったく人騒がせな妹だ」

翼がはためく音と、窓が開く音がした。おそらく市街地の方々へ散らばった捜索隊への撤収命令をヴァリドゥー家を象徴する赤い鷹の使い魔に委ねて飛ばしたのだろう。

「ヴァリドゥー家の厄介者なのね私……」

これは本心だった。魔法も使えない、ダンスも、歌も刺繍も、何一つ合格点が出ないヴィアーナである。このまま社交界に出られなければ自分はヴァリドゥー家にとって何の役にも立たない、お荷物人間ではないのだろうか。最近はそんな気さえしている。

「解ってはいるようだな」

兄の言葉に、ヴィアーナは暗澹たる気持ちになった。焼き菓子を齧る速度が急速に落ちる。本音だろうか。まさか愛している兄からそんな言葉を貰うなんて。

ヴィアーナは焼き菓子を食べ終えると立ち上がり、引き出しの中をさまよい歩いた。底の深い引き出しの中にはインク瓶、切手の入った箱、赤の封蝋や持ち手が金で出来た印璽がある。全てハディールがヴァリドゥー家の当主としての執務に用いるものだ。彼の仕事は何も地上世界に地底の魔法世界の存在を知らしめる事だけでは無い。ヴァリドゥー家は屋敷の敷地だけで無く、田舎に広大な土地を所有している。ヴァール・ドゥナ・ガシユの国王から始祖である真紅の鷹が封ぜられた領地である。ゆえにハディールは歴代の当主がそうしたように、領民の統治、巨大農場の経営なども行っていた。屋敷の中で家族の愛に包まれてのうのと暮らしているだけのヴィアーナとはその身にのしかかる重圧も忙しさも桁違いなのだ。ヴィアーナはヴァリドゥー家の役にも立たず、それどころか迷惑をかけ

て兄の足を引っ張ってしまう自分に何やら嫌気が差してきた。

ヴィアーナは引き出しの隙間からの光で先端を輝かせたペン先の前に足を止めた。

「お兄様、迷惑をかけてごめんなさい。勝手に出歩いて……ヴィアーナは悪い子でした」

「頭が冷えたか。それならそこから出すくらいなら許してやってもいいが」

ハディールはまだヴィアーナにかけた魔法を解く気は無いようだった。小さいままにしておいた方が面倒が起らないと兄は思っているに違い無い。兄にとって面倒でしかない妹なのだ。自分は。

ヴィアーナはペンを持ち上げた。鋭いペン先を胸の前に持つてくる。この胸を突いて死ねば、厄介者の自分がいなくなって、母を除いた兄を始めとするヴァリドゥー家の人間の小間使いに至るまでもがきつと諸手を上げて万々歳だろう。

「不肖の妹ヴィアーナは、これ以上この家に迷惑をかけないよう、お兄様のペンで胸を突いて死にます」

数瞬の後、引き出しの外から返答があった。

「ふ、悲劇の主人公気取りかヴィアーナよ。例の悪書の影響か？ そんな脅しには乗らん！」

兄の罵声を聞き、ヴィアーナは心の中ですから泣く。なんて冷酷で非情な兄なのだ。妹がこれから死ぬと言っているのに——ちなみ

にヴィアーナが読んだ箇所までは『甘い果実』にそんな展開は無かった——じゃあ本当に自分が死んだらどうなのか。兄はどんな態度を示すのか。いちかばちか。成功すればキールの件の応酬になるだろう。

「さようなら、お兄様」

別れの言葉を告げて、ヴィアーナはぱたりとその場に倒れて死んだふりしてみた。少し離れた所にある赤いインク瓶を見て小道具に使えば良かった、と思いながら。

お仕置き

書斎の引き出しの中、ヴィアーナが死んだふりをして待ったのは瞬き三回程度のほんの僅かな時間だった。

「ヴィアーナ！？ まさか本当に」

ハディールの手により勢い良く引き出しが引き出される。

「ヴィアーナ！！」

ハディールの叫びが書斎に響いた。文具の入った引き出しの中、鋭く光るペン先の傍らでうつ伏せに倒れた妹ヴィアーナがいるではないか。すぐさまハディールは彼女をつまみ上げて震える片方の手の平の上に載せる。

「何て馬鹿な事を！！ 早く止血をしなければ！！」

しかしハディールの広い手の平の上、金色の髪を散り広げて仰向けに寝かされた小さなヴィアーナはぴくりとも動かなかった。

「私の…ヴィアーナ……う、嘘だろう……？」

兄の手の平の上、息を止めて死んだふりをしたヴィアーナは、しめしめと思いつつ薄目を開けて密かに兄の表情を窺った。信じられない、と真紅の瞳を驚愕に見開いたハディールが小刻みに震えながらかぶりを振るのを見た。やり過ぎだろうか。ヴィアーナが乗っている兄の手もひどく震えている。兄はやはり私を愛してくれているのだ。

そしてハディールがようやく書斎の引き出しの中で起こった惨劇を受け止め、僅かに開かれた彼の唇からとうとう絶叫が響き渡るかと思われたその時。

突如としてハディールは表情を老獪なそれに豹変させた。絶叫の代わりにくっくくつと彼の魔的な笑いが部屋に響く。ヴィアーナはその不気味な笑いに思わずびくりと身体を反応させてしまった。

「私が泣き叫ぶと思ったら大間違いだ――まんまとひっかかる兄と思ったか？ 実にくだらん。そう言うのを二番煎じと言うんだ」

何だ。ばれていたのか。ヴィアーナは落胆しつつ、苦しくなつてふう、と息を吐くと、今度は空気をうんと吸い込んで肺に空気を取り込んだ。

「ひどいわお兄様。息を止めて我慢してたのが馬鹿みたいじゃない！」

ヴィアーナはハディールの手の平の上で飛び起きて頬を紅潮させながら兄を睨み付けた。

「やれやれ、いつも自分のした事を棚に上げるな、お前は」

ハディールは妹の視線を受け止めて肩を竦める。

「何の事かしら。ずっと息を止めているのはさぞ辛かったでしょうね、キールは」

言外にこれは先刻の応酬であつたのだと言いつつ、ヴィアーナはハデイルの手の平の上、人差し指につかまり、はるか下方にある開け放たれた監獄、引き出しの中を覗き込む。先ほどヴィアーナが死んだふりをした場所の近くにあつた赤インクの瓶を見てつい口にした。

「やっぱり赤インクを使うべきだったわ」

失敗だった。ペンで胸を突くと言っておきながら、胸から血の一滴も出ていないのだ。すぐにばれて当然のお粗末な芝居だった。ヴィアーナは口をへの字にしつつ、立ち上がって衣服や髪の流れを直した。

「お前と言つやつは……」

ヴィアーナがふいに見上げた兄の顔は眉間に皺を寄せ、再び怒りの表情を呈していた。猛禽類のような殺気に満ちた眼光である。

「きゃっ！　驚かさないでよ！　怖い顔！」

ヴィアーナが驚いて彼の手の平の上で尻餅を付いたその時、ハデイルは手の平をぎゅっと握り締め、妹を身動き取れぬよう拘束した。

「きゃああ、苦しいっ、苦しいわお兄様、放して、放してようっ」

「苦しむがいいヴィアーナ。少しは私の気持ちを思い知れ！　この不良娘！」

ハデイルはヴィアーナを強く睨み付けながら彼女を握る手に力

を込める。ヴィアーナは悲鳴を上げた。まさか兄が自分にこんな乱暴な事をするとは、思いもよらなかった。まさか、本当に握り潰すつもりなのでは。

「ちょっと！ 死んじゃう、死んじゃうわ、いやいやお兄様っ」

ヴィアーナの必死の叫びに、ふっと彼の手の力が緩んだ。今だ、とヴィアーナが兄の手の中から髪を振り乱しながらなんとか逃れ出した両手を使い、今度は上半身を引っ張り出していると、ハディールの指先がヴィアーナの胸元につんつんと触れた。

「何てドレスを着ている。胸元がぶかぶかじゃないか。仕立て直せ。谷間が見えすぎだ」

溜息混じりにハディールは指摘した。

「こ、これは——のお母様の」

モスリー、と言う名は伏せた。今あの青年の事を兄に話せば、本当に当分この姿のままでいさせられるに違いない。それは嫌だ。

「や、やめてお兄様、あんっ」

兄から胸を触れられ続けているうち、ヴィアーナはつい妙な声を出してしまった。小さな双丘に触れていた兄の指先がぴたりと止まる。彼の頬に微かに朱が差した。

「——人形遊びの趣味はない」

咳払いをしてハディールはヴィアーナを机の上に解放すると再び

目の前の書類に目を落とし、再びペンを取りインクを吸い込ませて書き物を始めた。

「お兄様、怒ってる？」

着地してすぐそこにあつた書類の束の上に腰を下ろし、ヴィアーナは訊く。

「怒りを通り越して呆れた」

紙の上に素晴らしい速さでペンを走らせるハディールは、いつもの冷静な彼であつた。これ以上妹の相手をしてくれそうに無い雰囲気を出している。つまらなくなり、ヴィアーナは机の上を見回した。書類の束の間に飛び出した金色の生地を目を止める。何だろうあれは。ヴィアーナは立ち上がり、近付いてみる事にした。

ヴィアーナは書き物を続けるハディールの目の前を、視界の隅で彼を気にしつつ横切った。ブーツを履いているので机の上でコツコツと硬質な足音がするが、ハディールはそしらぬふりだ。

ヴィアーナがたどり着いたその先にあつた物は、大手百貨店の意匠が金で印字された赤い包装紙に太めの金色のリボンがかけられた包みだつた。誰かへの贈り物だろうか。

「お兄様、これなあに？」

兄はつんとして答えない。

「無視なのね。誰かへの贈り物？ ひょっとして私に？」

兄に恋人がいるなんて、そんな悲しくなるような事は考えたくない。美丈夫にして貴公子然とした兄だ。社交界で兄に言い寄る女性がないわけではないだろうし、目の前の品物は贈られた物かもしれないが、それについてもヴィアーナは深く考えたくない。きっと愛する妹の私宛てだ。そうに違いない。

「リボン解いちゃうわよ。いいわね？」

ヴィアーナは兄の返答を待たずにリボンの端を持って後退した。兄が書き物をしている書類を踏んでしまいが仕方が無い。どんどん後ろへ退がっていくと、するするとリボンが解けていった。

リボンを解くと今度は包装紙を開く。中から茶色の木箱が現れた。中央に何か銘打たれている。どこかで見た事のある意匠だ。

「何かしら……」

わくわくしながら箱の端を両手で持ち上げて中を覗く。そこには白絹の詰め物の中に象牙の骨で出来た赤い扇子が収められていた。縁や象牙の部分は金で装飾されている。

「扇子じゃない！」

ヴィアーナは心を躍らせながら木箱を渾身の力でずらして、灯かりの下で確認した。箱の中へ入り、扇子を取り出して少し開いて見る。赤い絹の布地には流行の絵師の手と思われる貴婦人や赤い薔薇、ヴァリドゥー家の象徴である真紅の鷹がそれぞれ濃淡を変えて描かれていた。

「わああ——お兄様、これ！」

ヴィアーナは目を輝かせて兄を振り仰いだ。ロンドデリルの双子が屋敷に訪れた時、彼女らに扇子見せびらかされたヴィアーナを、きつと彼は不憫に思ったのだろう。

（お兄様はいつだって私の事を考えてくれているんだわ）

「悪い子だ」

それは仕事を終えた後のような伸びやかな口調だった。ハディールは再びペンを置くと眼鏡を置いてヴィアーナを摘み上げ、机を蹴って椅子を少し後退させた後、彼女を元の姿に戻すと自身の膝の上に横座りさせた。ヴィアーナは背に回された兄の腕に背をもたれる。ハディールの膝の上はヴィアーナだけに許された特等席だった。

「お前の喜ぶ顔が見たかったから早く帰ったと言っのに。お前ときたら、髪も目の色も変えて、一体どこで何をしていた。ん？」

低く、この上なく優しい声で訊きながらハディールは膝の上に座らせたヴィアーナの髪に触れた。撫でつけながら本来の真紅に変えていく。紅玉を溶かしてなめらかにしたような、ヴァリドゥー家の令嬢の真紅の髪に。

「キールの魔法にはよく保ったな。目を閉じろ」

ヴィアーナは言われた通りに目を閉じた。ハディールが指先でそっと妹の瞼に触れる。再びヴィアーナが目を開けると、緑色であった彼女の瞳は紅玉のそれに変わっていた。

「街へ行ったの。一人で色々見てみたかったから……そうしたら道

に迷ってしまったて……それで帰るのが遅くなったの」

言いながら、ヴィアーナの胸は痛んだ。短い間に自分はひどく嘘つきになってしまった。心から愛する兄に言えない事など今まであっただろうか。兄に没収された本を買う為に変装して家を出て、道に迷った末に謎の青年と出会った。そして会ったばかりのその青年の屋敷に招かれ、彼と二人だけで時間を共にした。このドレスは彼の母の物だ。そんな事実、目の前の兄がいかに優しかろうと言えるはずもない。

「外出の際は必ず供を付けるようにしろ。そして馬車を使え」

兄は意外な事を言った。

「じゃあ、供を連れて馬車で行けば、私だけでお出かけしてもいいの？」

兄の付き添いがないと外出も許されないヴィアーナであった。しかしハディールは多忙を極め、ヴィアーナが外出できる機会は限られていたのだ。

「近くなら許そう。ただし必ず私が母上の許可を得る事だ。今回のように変装して黙って出て行かれるよりはよほどいい。一人で出歩くななんてもつての他だ。どれほど心配したと思っている」

こいつめ、とハディールは妹を強く抱き締める。ヴィアーナはきやっと笑いながら逃れようと兄の腕の中で暴れた。

「お兄様、やだ、放してったら」

じゃれあっていたその時、ふいにハディールがヴィアーナの頬に手を添え、唇を近付けて来た。ヴィアーナは拒まなかった。自分もそうしたかったから。これは少しの間離れていた二人の、言わば確認作業だ。ヴィアーナは目を閉じる。

唇が重なる。二人はしばらくそのままの状態でした。やがて、ハディールの舌がヴィアーナの唇の間に割り込む。

「んっ」

ヴィアーナは拒絶の意思を示すように兄の逞しい胸をそっと押した。この接吻は駄目だ。兄妹ではいけないのだ。妖しい気持ちになるから。

「ヴィアーナ……」

唇が少し離れただけの、すぐ目の前で自分を見下ろす兄の視線が熱い。

（駄目よ、お兄様、そんな瞳をしないで……）

危険だ。ヴィアーナは慌てて兄の腕から逃れようとするが、力強い腕に抱き締められて逃れられない。そうしているうちに彼の唇がヴィアーナの白い首筋を這う。

「あっ……だ、だめっ」

危機感と心地良さが同時にヴィアーナに襲いかかる。どうして良いのか判らずヴィアーナは小さく震えた。兄の唇が、舌と共に首筋をゆっくりと滑り下りていく。

「ああ……ん……っ、おにい、さ……」

ハディールの唇はヴィアーナの鎖骨の辺りで止まった。彼の手はヴィアーナのドレスの胸の部分をずらし、補正下着を着けた彼女の胸の谷間を露にする。下着は胸の下半分と胴を覆っていた。

「あつ、だ、駄目っ」

ヴィアーナは大いに動揺した。兄は一体、何をするつもりなのか。下着をあともう少しでも下にずらされたら胸が兄の目の前に零れ出してしまうではないか。怯えながらもヴィアーナは兄に瞳で問う。対するハディールは妹を見つめながら、ひどく苦悩するような面持ちをしていた。

次の瞬間、ハディールは眉根をきつと寄せ、何らかの決意を示した後、ハディールはヴィアーナの下着を少し下へとずらした。ヴィアーナの小さな胸の片方、薄く色付いた部分が露になる。ハディールの視線はそこに釘付けになった。

「い、や……おにい……様っ」

頭を振りつつヴィアーナは眩暈を覚えた。一体我が身に何が起ころうとしているのか。

「私のヴィアーナ……本当のお仕置きはこれからだ」

ハディールは乳房を優しく包み込みながら、親指の腹でそつとその中央にある色付いた部分に触れた。ぴくん、とヴィアーナの背がしなる。

「あ、う」

そのままハディールがうつとりとした表情でその場所に愛撫を続けると、ヴィアーナの胸先は次第に隆起し、弾力を帯びていった。

「や、やだ……いや、お兄様っ」

兄の手によって変化する自身の身体に、ヴィアーナの心に遅ればせながら羞恥が訪れる。

ちらり、とヴィアーナは視界の端で兄の次の行動を確認する。彼の舌が尖った胸先に触れようとしていた。

「あっ、ひぁあっ」

ヴィアーナは兄の舌の感触に再び身体をびくりびくりと反応させる。やがて胸先は彼の口に含まれた。

「は、う」

温かい感触と、胸先を転がす舌の動きを感じた。いまだかつて感じた事のない刺激に全身の神経が集中して感度がいや増す。もう許して。許してお兄様。

ヴィアーナは泣きながら兄の頭を押さえ付けて抵抗した。

「……おに……さま……も、許して」

するとハディールは胸先から唇を離した。しかし依然として舌先

は接触したまま濡れた胸先を嬲り続けている。何と淫らな光景だろう。

「もう、やああッ」

ヴィアーナは頬を紅潮させ、しゃくりを上げて泣いた。嫌なのに、片方の胸先も兄に可愛がつて欲しい思いが募る。それほどに心地良い。胸先だけでなく身体の奥が、秘められた場所が甘く疼き出し、じっとしていられずにヴィアーナは腰のあたりをむずがるようにもじもじさせた。

ハディールは妹の反応を見て顔を上げると、いたく感動したように彼女の初々しい痴態を眺めた。

と、その時。扉をノックする音がした。ハディールは慌てず自身の膝に横座りしているヴィアーナを胸に抱き寄せる。次の瞬間扉はハディールの許可を得ずして開いた。

「ハディールや。もうお説教は終わって？」

現れたのはハディールとヴィアーナの母、ヴィアネーラだった。ランプを片手に夜着に真紅のガウンを上から羽織っている。

「母上。少し叱りすぎまして。今あやしていた所です」

説明しながらハディールは息の荒いヴィアーナを抱き締め、その背をよしよし、と撫でる。

「まあ。貴方、ただでさえこわもてなのだから女の子へのお説教は優しくしないと——貴方の顔は母親のわたくしでさえ正直怖ろしい

もの——本当にお父様似で。少し笑うと卒倒しそうなくらい素敵なところも良く似ているけれども——怖ろしかったでしょうね、ヴィアーナ」

今は亡きヴァリドゥー家の先代当主、ハディールとヴィアーナの父とヴィアーネーラは従兄妹同士の婚姻であり、ゆえにどちらも赤い髪と瞳の、ヴァリドゥーの形質を有していた。

娘を案ずる母の声を受け、ヴィアーナの背に緊張が走る。ヴィアーナはハディールの胸に顔を突っ伏したまま、無言で母に頷いた。胸がはだけて顔を紅潮させたこの姿を母に見られる訳にはいかない。

「大丈夫？　ヴィアーナ」

「ヴィアーナは疲れておねむのようなので、これから私が寝室へ連れて行きます」

「それを聞いて安心しました。ヴィアーナ、明日はお母様が果物のケーキを焼いてあげるから、もう泣かないで。ゆつくりおやすみなさい——それにしても、キールが生きていたみたいだから良かったわ」

貴方、手打ちにするような勢いで書斎に連れて行ったものだから気になって、と呟きながらヴィアーネーラは静かに扉を閉めると部屋を去った。

「——さあヴィアーナ。お仕置きは終わりだ。寝室へ連れて行ってやる」

ヴィアーナは兄のつれない言葉を聞き、憂鬱な表情で彼の首に両

手を回した。

言わなければ察して貰えない。けれど、恥ずかしくて口に出来ない。

（もつとして、だなんて）

「何だ？ 甘ったれの妹殿。もちろん抱いて寝室まで運んでやるぞ。まったく世話のやける」

ハディールは意地悪くとんちんかんな返事をする、ヴィアーナを抱えて椅子から立ち上がった。

「…兄様の……じわる」

兄の胸の中、ヴィアーナは小さな声でなじった。ハディールは聞こえぬふりをして移動し、短い呪文で扉を開け放つと廊下へ出た。

「そうだ。明日から新しい家庭教師が来る事になったぞ。良かったな、ヴィアーナ」

「え？ もう？」

ヴィアーナは先ほどの羞恥の涙に濡れた顔を上げた。供を連れてのヴィアーナ単独での外出を許可した癖に、それは無い。

「何がもう、だ。魔術の学院『イグナ・ダヤ』の創設者で私の恩師でもある立派な方だ。お前に相応しい家庭教師がなかなか見つからないから、お願いして特別に来ていただく事になったんだぞ。失礼の無いようにな。当分は遊ばず勉学に励め」

「お兄様の、意地悪」

今度はきっぱりと兄を睨み付けて言う。

「心外だな。私はいつだってお前に優しくしているつもりだ」

ハディールは取り澄ました声で言った後、お仕置きはまたの機会に、と小さな声で妹の耳に囁いた。

銀色の貴婦人

ヴィアーナ行方不明騒動があつた次の日の午後。

いつものように真紅のドレスを纏つたヴィアーナは、昼食を終えると、新しい家庭教師を出迎える為に屋敷の前に出た。

出迎えているのはヴィアーナと屋敷の使用人達だけである。ヴィアーナの母、ヴィアネーラはヴィアーナが物心付いた時から一切、屋敷の外へ出ない。兄ハディールは朝食後に国王の住む城へ向かつたのでいなかった。昨日のヴィアーナの件で街中を騒がせた事を国王に申し開きに行ったのだろう。申し訳なく思つたヴィアーナは、当分は外出すまい、勉強にいそしもうと胸に誓つたのだつた。

「大魔導師ってどんな方なんでしょうね、お嬢様。なんか俺ときどきしてきましたよ」

そうヴィアーナに語りかけたのは、彼女の隣に立つ馬丁の少年、キールだつた。昨晚、身体中に塗り付けていた靴墨はすっかりきれいに落とされている。黒髪黒瞳、えへへと良く笑う愛嬌のある顔立ちに、ヴァリドゥー家に仕える者らしく赤のお仕着せを着ていた。ヴァリドゥー家の人間が使用する気性の荒い炎の馬がこの少年には懐くので、数年前、奉公に來た初日から彼はヴァリドゥー家の使用人達に重宝がられていた。炎の馬とはそれほど厄介な馬なのである。

「昨日の事、まだ許したわけじゃないわよキール」

じと、とヴィアーナはキールを横目で睨む。昨日、ヴィアーナは彼が書斎で兄に手打ちにされたかと思つて大泣きしてしまつたのだ。

それが死んだふりだったなんて。

「あれは旦那様に命令されて――」

キールが弱り顔でヴィアーナに弁解する。

「知らない」

つん、とヴィアーナはそっぽを向く。だがヴィアーナは本心から怒っているのではない。そうしていれば、気の優しいキールはヴィアーナがつまらなそうにしている時を好機と見て、許して貰おうと何か面白い事をしてくれる。ヴィアーナはそれを期待していた。最近ではヴィアーナがぼうつとしている窓辺で突然、愉快な人形劇が催された。

「お嬢様つてば」

キールが哀しい溜息を吐くのを聞いてヴィアーナは内心しめしめ、と思った。そしてまだ客が訪れない屋敷の門を眺める。

（キール、私も気になるわ。大魔導師がどんな方なのか……）

不安やら緊張やらで、ヴィアーナは落ち着いて立っていられず、そこら中を歩き回りたいくらいだった。しかしそんな所を客人に見られては少々恥ずかしいので辛うじて抑えているのだ。

新しい家庭教師ドル・ハリアドルは、兄ハディールが少年時代に学んだ寄宿学校、魔術の学院『イグナ・ダヤ』の創設者であり、魔法王国ヴァール・ドウナ・ガーシュに古来より伝わる数多の魔術を見事に体系化し、研究を重ねた後に数々の斬新な魔術を編み出した

と言う稀代の天才らしい。歳はまだ若いと言う。革命児であるハリアドル以降、体裁ですら魔法の杖を持つ魔術師は皆無となった。名前の最初に冠せられた「ドル」とは大魔導師に冠せられる古代語の称号である。

（そんなすごい方が私の家庭教師になってくださるだなんて——ひよっとしたら、私も少しは魔法が使えるようになるかも……）

淡い期待を胸に、ヴィアーナは家庭教師の到着を待った。

しばらくして、ヴァリドゥー家の門扉が開き、立派な黒塗りの二頭立ての馬車が敷地内へ入って来た。

「来られたわ！」

兄の師匠でもあるその大魔術師は、一体どんな人物なのだろうか。

ヴィアーナとキール、そしてその他の使用人達が固唾を飲んで見守る中、馬車は屋敷の前に停まった。歩み出て馬車の扉を開けた御者に白い手袋を嵌めた手を取られ、馬車の天井に結い上げた髪をぶつけぬように屈みながら、馬車の中からゆっくりと降りて来たその人物は、光の加減できらきらと輝く銀髪を驚くほど高く結い上げて薄桃色のリボンや白い花で飾り付け、同じくスカートが大いに膨らんだ薄桃色の生地には白いフリルや銀のレースで過度に装飾された豪華なドレスを見事に着こなした、背丈もその骨格も少々大柄なものの、非常に美しい貴婦人であった。見た目の年齢は三十代の半ばくらいだろうか。まるで舞踏会に訪れるような出で立ちである。

（大魔導師ハリアドル様は女性だったのね！ あんなにお若くてお美しくて……しかも魔法の才能にも恵まれていらっしやるなんて素

敵……)

夢のように美しい銀色の貴婦人の登場に、ヴィアーナ率いるヴァリドゥー家の一同はほつつと溜息を漏らした。

貴婦人は周囲の反応に満足げに微笑すると白絹に薄桃の花柄模様の、銀のレースの縁飾りの付いた扇を開いて口元を隠した。扇の上に覗いた貴婦人の、まなじりが下がり気味の目を縁取る長い睫毛は髪と同様、銀色であった。睫毛に隠れた瞳は紫色をしているようだ。

「お出迎えありがとう、皆さん」

貴婦人は少々低めの艶っぽい声で礼を述べると、スカートを摘んでいた方の手を離し、人差し指を立てて中空で軽く振りかざした。

突如、上空でぱんぱん、と花火の音がしてヴィアーナが空を見上げると、青空に花火が打ち上がっていた。続いて色とりどりの紙吹雪が舞い降りて来る。目を凝らすと、上空で花冠を頭に載せた半透明の精霊達が舞い踊りながら籠から紙吹雪を撒いているではないか。こんな魔法の使い方は初めて見る。

「お嬢様、す、すごいですね、大魔導師様の魔法って！ 今度里帰りした時の土産話になりますよ！」

興奮したキールの声をヴィアーナは上の空で聞いた。

紙吹雪の中、銀色の貴婦人ドル・ハリアドルが、空を見上げてあつけに取られているヴィアーナの元に歩み寄る。

「君がヴィアーナ嬢だね」

「あ、は、はい。初めまして先生、ヴィアーナと申します」

歌うような美声に気が付いたヴィアーナは目の前に立つ貴婦人に慌てて辞儀をした。

「ハデイルから聞いているよ。彼の言っていた通り、可愛い妹さんだ」

につこりとした表情で、ハリアドルがよろしく、と手を差し出して握手を促す。

「えっ」

兄は外でヴィアーナの事を人に話しているのか。それも可愛い妹だと。握手しながらヴィアーナの心は弾む。同時に、兄の恩師の大魔導師は意外にも気さくな人物のようでヴィアーナは大いに安堵した。

「母も兄の恩師である先生を表へ出てお出迎えしたいと申しましたが、なにぶん身体が弱くて屋敷の外へ出る事が出来ないのもので、どうかお許しください」

話し方も健康な者と変わりなく、屋敷の中では自由に動き回るヴィアーナの母ヴィアーネーラだったが、屋敷の外へは庭であろうとも一切出る事はなかった。ハデイルによると母は心の病らしい。どうして彼女がそんな病になったのか、話して貰えないヴィアーナにはその理由がわからない。夜中に彼女がうなされている時に添い寝してあげる事くらいしか出来ない自分をやるせなく思う事もあった。

「そう——それは大変だね。君の母上と言ったら、まだお若いのだろくに」

ハリアドルの紫色の瞳が微かに光る。ヴィアーナは思わずたじろいだ。貴婦人の瞳はやはり大魔導師と言われるだけあって、見た目の年齢に不相応なほどの膨大な知恵を宿しているようだった。何もかも見透かされるような気がする。

「気にしないで。今日は君の家庭教師として来ているのだから。で、肝心のハディールは？」

貴婦人の真つ直ぐな瞳を見てヴィアーナはふと思う。この瞳をどこかで見たような気がする。そう、モスリー。

（モスリーの瞳と同じだわ）

「兄は所用で城へ参っています。もうじき帰ると思います——本当に私一人で申し訳ありません。さあ、先生、中へお入りください」

ヴィアーナは少し身を傾けて貴婦人を屋敷の入口へ誘う。

「うん。——甘ったれと聞いていたけど、なかなかしっかり者のお嬢さんじゃないか」

屋敷の入口の石の階段を上り、ヴィアーナと豪華なドレスの貴婦人は屋敷の中へ入った。屋敷の入口は、幸いにしてハリアドルが屈まずとも髪を結い上げたその頂まで支障なく入る事が出来た。

屋敷の中にいるヴィアーナ母の挨拶も済み、早速ヴィアーナの部屋にてハリアドルの授業が開始される事となった。ヴィアーナの部屋と言っても授業は無論、ベッドのある部屋では無く、その続きにある日常を過ごす部屋で行われた。調度類は赤を基調とし、壁にはリボンや薔薇などが描かれた薄紅の壁紙が貼られた、大きな出窓のある明るい部屋だ。

隣の寝室の書棚には辞書に紛れて昨日ヴィアーナが購入した『甘い果実』があった。ハリアドルから美しい韻律の古代語の授業を受けながらも、ヴィアーナはそれがどうしても気になる。昨日は兄から寝室へ運ばれると、夜着に着替えてそのままぐっすり眠ってしまった、本は未読なのだ。幸い、兄はブックカバーで覆われた本の中身に気付かずに妹を運び終えると早々に部屋を去った。

（メロリアン、謎の青年アドル、そしてダトリール男爵はどうなったのかしら……）

同時に、ヴィアーナは今まで思考の隅に追いやっていた昨日の兄との書斎での事を思い出す。

兄の唇がヴィアーナの首筋を這い、そして、胸に触れ、胸先を弄んだ。男の手だった。その生々しい感触を、ヴィアーナは覚えている。身体の内奥が熱くなつたあの感触も。兄の腕の中で熱にうかされたように切ない声を上げ、恥ずかしい姿を晒してしまった。思い出すだけで顔から火が出る。しかし身体は貪欲に与えられた感触を求めた。兄に次なる行為への移行を態度で示した。兄の首に手を回し、お願いお兄様、と無言のまま瞳で訴えた。しかし彼はそれ以上の事をしてくれなかった。

（今度はいつ、お仕置きしてくださるのお兄様……）

ヴィアーナは兄の行為の行き着く先が知りたかった。

「ヴィアーナ、聞いてる？」

ハリアドルに指摘され、はっとヴィアーナは手にしていたペンを取り落とした。

「上の空だね。赤くなったり、青ざめたり——面白い子だ」

机に向かうヴィアーナの隣に座ったハリアドルは教科書を片手に苦笑を浮かべた。別段怒ってはいないようだ。彼は再び本に目を落とす。

「うーん、何だっけこの単語……わからないや。忘れちゃった」

どうやらハリアドルは単語の意味をヴィアーナに尋ねていたらしい。大魔導師と言われる人でもそんな事があるのか、とヴィアーナは意外に思った。古代語は魔術を行使する際の呪文に良く用いられる為に、魔法王国では必須の知識である。

「ヴィアーナ、古代語の辞書あるかな？」

「隣の部屋にあります——持ってきますわ」

「いいから、君は次の詩を書き写していて。僕が持ってくる」

立ち上がろうとしたヴィアーナを手で制しながらハリアドルは席を立った。広がったドレスを見事にさばきながら移動する。

「隣って寝室なんだね、失礼するよ」

ハリアドルはそう断って隣室へ入った。同じ女性なのだから構わないが、ヴィアーナは少し引つ掛かりを覚えた。

（今、先生は自分の事を僕、っておっしゃったような……）

そう言えば、声が女性にしては低い。背も兄ほどではないものの、女性にしては驚くほど高い。踵の高い靴を履いているのかも知れないが、それにしても。

（もしかして……）

辞書を見つけたらしいハリアドルが戻って来る靴音が聞こえた。

「あの、先生って——」

部屋の入口の方を振り向いてヴィアーナが疑問をぶつけたその時。

「これなあんだ」

にやにやしながらハリアドルが掲げたのは、大型書店『リントス』の葡萄のブックカバーに覆われた『甘い果実』だった。

「そそ、それは！」

ヴィアーナは大いに動揺して椅子から転げ落ちそうになった。どうしてブックカバーが掛かっているのに見つかったのだろう。書棚の辞書と版型が異なるから目立ったのかも知れないが。

「僕もこれ、読んだよ」

「え、先生もですか？」

頬を染め慌てふためいたヴィアーナの動きがぴたりと止まる。

「いいよね、いいよね。かつてない過激描写がいいよね。僕はアドル派かな」

ハリアドルは再び席に着き、同士を見つけたとばかりにうきうきした様子で話し出した。

「あの、続きは言わないください！ まだ最初の方しか読んでなくて。あと、どうかこの事は母や兄には秘密に」

ヴィアーナは必死に懇願した。折角苦心して手に入れた本なのだ。

「了解したよ。そして、もちろん、他の人には言わない」

ほっと安心したヴィアーナだったが、ハリアドルの低い声に、再び先ほどの疑問が沸き起こる。

「あ、あの——こんな事を聞いても良いのかどうか——大変失礼かもしれませんが——もしかして、先生はその……」

「僕？ れっきとした男だよ。それがどうかしたの？」

青天の霹靂だった。しょうもない憂慮で、心配性のもう一人の自分が心の内でささやかに提唱した『先生が実は男説』は心のどこかで否定されると思っていた。こんなにあっさり肯定されるとは思

わなかった。更に追い討ちをかけるような、それがどうかしたの、との『彼』の切り返しに、ヴィアーナはもう、どう対処して良いやら分からなかった。

「いえ……」

ならば何故女性の格好を、と言う更なる疑問を彼にぶつける気はもうしなかった。

「男の方でもお読みになられるんですね、こう言う本」

「露骨に。%とか\$ #とか書かれていないのがいいんだ。僕の感性がそれらの卑猥な言葉を受け付けなくてね……だから読むのはどうしても女性向けの本になってしまう」

「……はい？」

幾つかの単語がヴィアーナの耳を素通りした。異界の言葉が入っていたようだ。

「失礼。今の発言は気にしないでくれ。ちなみに僕は両刀だよ。これはハデイルには秘密にしておいて欲しい」

膨らんだ胸を反らして言ったハリアドルの声は、威厳に満ちた男性のものだった。

「りよう……とう…？」

ハリアドルは辞書と『甘い果実』を机に置き、うつむいたヴィアーナの顎を捕らえてそつと上を向かせて彼女の瞳を覗きこんだ。

「女性も男性も等しく愛せるって事——理解出来るかな。時には愛される事もあるけれど」

つまりは自由なのさ、と艶やかな声で囁かれ、ヴィアーナはハリアドルの紫の瞳に吸い込まれそうになった。赤と青の間で妖しく揺れている炎のような色。不思議な魅力に満ちている。彼が男の格好をしていたら、おそらく平静ではられない。

「可愛いね、真紅のお姫様。だけど手は出さないよ。何といっても君は愛弟子の妹だからね」

無論、とハリアドルは机の上の辞書を引きながら続ける。

「君の兄にも無論、手は出していない。引き締まった実に美しい身体だと言う事は——師匠の特権で知っているがね」

意味深な台詞を吐き、ふ、とハリアドルは遠い目をして昔を懐かしむように笑った。ヴィアーナは彼の発言をよく飲み込めなかった。

「——お兄様は先生の学院ではどんな生徒だったんですか？」

「成績優秀な不良——厄介な問題児だったよ。彼と、私の甥のモスリーにはほとほと手を焼いた」

「モスリー？」

謎の青年の名を意外な人物から聞き、ヴィアーナは耳を疑った。モスリーとはヴィアーナが昨日会ったあのモスリーだろうか。珍しい名だが。

「あ、知らない？ 『黒の魔導卿』って言われてる、このヴァール・ドウナの空を魔法で素敵に変えている、今をときめく宮廷魔術師の事」

そうだ。ロンドデリルの双子が言っていた宮廷魔術師もモスリーと言った。もしかして青薔薇の屋敷のモスリーと宮廷魔術師のモスリーは同一人物なのだろうか。

「それ、最近友達から聞きましたわ。空の色を変えるなんて、すごい魔術ですね」

青薔薇の屋敷のモスリーも魔法が巧みのようなだった。ロンドデリルの双子は宮廷魔術師のモスリーの事を何と言っていただろうか。特徴は。確かめたい。

「最初の方はモスリーが手ずから空の色を変化させていたらしいけど、今は自動装置を作ってそれに魔力を抽入しているみたいだね。我が甥ながら本当に才能のある子だよ。君の兄上もだ。ヴァール・ドウナの建国に貢献した大いなる真紅の鷹の後裔、生まれながらにして強力な魔力を持ったヴァリドゥー伯爵家の跡継ぎなのだから当然かもしれないけれどね。少年だった君の兄上と我が甥は、溢れる魔力を持て余し、よく衝突していた。授業が終わった彼等が街中でばったり出会う度に市街地はに甚大な被害に遭い、その度に私は尻拭いをさせられたものだよ。懐かしいねえ」

「お兄様が……宮廷魔術師と喧嘩を？」

（品行方正なお兄様が？）

いつも妹を叱る側である兄が喧嘩と聞いてヴィアーナは意外に思ったが、ふと思いついた。かつてヴィアーナはこの屋敷の執事から聞いた事があった。今では信じられない事だが、少年時代のハディールは手の付けられない不良であり、ヴァール・ドウナの街中を魔術の学院の貴公子達と徒党を組んで炎の馬で暴走していたと言った。

その時、ふいに扉を叩く音がした。

「先生、その本隠してっ」

ヴィアーナが小声で叫ぶと、ハリアドルは素早く分厚い辞書に『甘い果実』を挟み込んだ。

「先生、遅くなりました」

扉を開けて現れたのはハディールであった。彼の清々しい顔が、ハリアドルの派手な装いを見て俄かに曇る。

「御機嫌よう。真紅の貴公子」

ハリアドルはこころ持ち顎を上げて澄まして椅子から立ち上がり、扉の前で呆然と佇む弟子の元へ歩み寄った。

「どうだい、今日の僕のおめかしした姿は」

ハリアドルはハディールの前でくるりと愛らしく回る。

「花のようだろう?」

「少々時と場所をお間違えかと。信じていた私が愚かでした」

「天才魔導師に時と場などと言う常識なんて関係ないんだよ。何度言ったら解るんだい不肖の弟子よ」

お姫様抱っこしてくれる約束だよ、とどすを効かせてハリアドルは弟子に迫った。

「妹の授業が終わりましたら、お約束通りいたしましょう」

やった、と飛び跳ねるハリアドルとは対照的に、苦々しい面持ちでハデイルは扉を閉めて去って行った。

眠れないの、お兄様

ヴィアーナの授業が終わり、午後のお茶の時間となった。サンルームでヴィアーネーラのお家製の果物のケーキを食べながらヴィアーナとヴィアーネーラ、ハディールとドル・ハリアドルの計四人の和やかな時間が過ぎる。

遅れてやって来たハディールとハリアドルも、すでにケーキを平らげていた。甘い物は苦手なハディールであったが、母のケーキだけは口にするのだ。

「仕事に追われて、しばらくこんな時間を忘れていました。美味しいケーキをごちそうさまでした」

紅茶の入った器を手に、ハリアドルがテーブルを挟んだ向かいのヴィアーネーラに話しかける。ヴィアーネーラはハリアドルが実は男性だと聞いても大して驚きはしなかった。それどころか、改めて彼の衣装と髪のが可愛らしさを絶賛し、うちの娘も見習わせたいものだなと言ふものだからヴィアーナは立つ瀬がなかった。

ヴィアーナは社交界を離れても今なお真紅の貴婦人はお元気だろうかと噂される——ヴィアーナはロンドデリルの双子からそれを聞いたのだ——美しい母に少なからず劣等感を抱いていた。同じ真紅のドレスを着ている母と娘であったが、母の隣に座ると同じ色でも自分のそれが霞んでしまうのを感じる。ヴィアーネーラは大輪の赤薔薇であった。

（私が社交界に出た時、これが真紅の貴婦人の娘なのか、とがっかりされたら嫌だわ）

昨今、憂いの多いヴィアーナだった。

大輪の薔薇の横で自信を失ってしおれていく小さな赤い薔薇の感情を読み取ったのか、ハリアドルの隣に座るハディールは苦笑した。

「それにしても、奥方が意外とお元気そうで良かった。ヴィアーナから身体が弱いと聞いたものですから」

ハリアドルの発言に、ハディールが説明しようと口を開く。が、ヴィアネーラが遮った。

「ご心配をおかけしましたわね。身体が弱いと言いますか、平素は何ともないのですけれども、この屋敷から一步出ようとするとわたくし、何だか胸が苦しくなってしまうんですのよ——眩暈までしてしまつて——大事になつてしまふといけないので、外には出ないようになっているんですの」

「ほう、それは……不思議なご病気だ」

ハリアドルの興味を示したように紫の瞳は微かに煌いた。紫の瞳は魔力甚大の証であると言う。彼がサンルームへ来る前にヴィアーナは母からそつと教えて貰ったのだつた。

「屋敷から出さえしなければこの通り元気なので、あまり気にしておりません」

ヴィアネーラの声は明るかった。ヴィアーナには分かる。それは努めて明るく装ったものではない。屋敷の中にいれば、彼女は本当に元気なのだ。

「深刻でないのなら、良いのですが」

言つてハリアドルが話を変えようと思ったのか、視線を窓の方に向けた。窓の外には広大な真紅の庭が見える。緑の絨毯の上に咲き乱れる薔薇も、アーチに這わせた薔薇も赤なら、紅玉で出来た水盤から湧き出る泉水も葡萄酒であつた。

「空が明るくなつたので、庭作りも面白くなりましたわ。何でも、宮廷魔術師様のお陰らしいですね。前に新聞で読みました」

屋敷の外には出ないものの、造園はヴィアネーラの監修であつた。

「そうです。この空は魔法の空なのです、奥方。ヴァール・ドウナが一日中闇の中であつた頃を忘れそうですね」

「本当に。暗闇であつた頃は一日中、庭の木にランタンを沢山吊るして少しでも赤が美しく見えるように工夫していました。懐かしいですわ」

「あ。そうだわ、お母様、庭の空いた場所に噴水を置いてはどう？
それも、このサンルームに入ったら水が吹き出す仕掛けの」

モスリーの青薔薇の屋敷で見た噴水を我が家にも取り入れたい。
通り過ぎる客の側で突然葡萄酒を吹き出して驚かせるのだ。

「あら、いい考え」

ヴィアネーラがごろごろと笑う。

「仕掛け噴水か。それは面白そうだね。夢が広がるね。――私も、昼にカンテラを持って恋人とピクニックしていたのが懐かしいです、奥方」

ハリアドルがにこやかに言ったその時、ヴィアネーラが手に取って受け皿から少し浮かせていたカップを取り落とした。和やかな空気のなか、けたたましい陶器の音が鳴り響く。ヴィアネーラの顔は青ざめその白い手は震えていた。ただならぬ様子である。

「どうかしましたか、奥方」

「ああ――いいえ」

ハディールが口を微かに動かして何かを唱えるのを、ハリアドルがちらりと横目で見やる。

青ざめたヴィアネーラの顔はたちまち元の血色に戻った。

（お兄様、何か魔法を使ったのかしら）

しかし魔法が一切使えないヴィアーナにはハディールの口の動きから何の呪文か読み解く事は出来ない。

「あら、わたくし、どうしたのかしら」

場の沈黙の意味が解らぬかのように、ヴィアネーラは周りを見渡しながら手持ちぶさたな手で自身の赤い髪を耳の後ろにやった。

「そう言えば、宮廷魔術師様と言えば、もしかしてうちの子と昔よく喧嘩していたと言う子じゃありませんかしら？　記憶違いでした

かしら」

「——おっしゃる通りです、奥方。我が甥のモスリーです」

ハリアドルは素早く頭を切り替えたのか、思い出したように破顔する。

「まあ、先生の甥ご様でしたか。引きこもっていますので、なにぶん世情にうとくて——そうです。お会いした事はありませんが、宮廷魔術師になられたんですのね——二人がやんちゃを起こして決闘だとかで街の時計塔を壊してしまった時は、それはもう、びっくりしましたわ。わたくし」

「母上それは」

ハディールは会話を制止しようと身を乗り出す。妹には聞かれたくないようだ。

「私もびっくりしましたよ。新聞沙汰になりましたよね。時計塔の時計の部分が見事に吹き飛んでしまって」

とハリアドル。

「そんな事が？」

ヴィアーナは驚きを隠せなかった。街の時計塔と言うと、中央街にあるあの壮麗な時計塔の事だろうか。街の象徴ではないか。

「ヴィアーナ、貴方はまだ小さかったから」

ヴィアネーラはすっかり話してしまったとばかりに、口元に手を添えた。

（お兄様ったら、不良どころじゃないわ）

いやあ、懐かしい、とハリアドルは笑い、ハディールは渋い顔をした。

やがて楽しい時間は過ぎ、銀色の貴婦人は真紅の屋敷を後にした。

ヴィアーナがその日学んだ事の復習を終えると、夕食と入浴を済ませ夜着に着替えた。さあ、これからが自由な時間だ。

ヴィアーナは自室に戻ると、入浴後のうつすらと濡れた髪のまま、辞書に挟み込んだ例の本、『甘い果実』とクッキーの入った瓶を持って続きの部屋へ行き、ベッドに寝そべって本を開いた。とうとうあの続きが読める。

主人公メロリアンはどちらの男を選ぶのか。

メロリアンは毎夜のごとくバルコニーから忍び込んでくるアドルをなしくずしに彼を受け入れてしまう内に、やがてアドルへの気持ちが募っていく。一方、政略結婚ではあるものの、誠実な愛を捧げる婚約者ダトリール男爵にメロリアンの心は揺れ動く。

メロリアンとアドルの濡れ場が訪れる度に、ヴィアーナは扉の外

に誰かいないか気が気ではなかった。

アドルは色々な性技を知っている男のようで、毎回メモリアンは様々な体勢で貫かれた。その度に衝撃的な挿絵が入るのだが、やはり局部は見えぬように描かれているのでヴィアーナにその詳細は分からない。しかし、メモリアンはアドルに貫かれる度に彼への思いを募らせ、アドルもより情熱的になった。

（もし、これが私とお兄様だったら。アドルのようなお兄様の愛撫が、私に……）

ヴィアーナは突如湧き出た妄想を慌てて追い払う。

（何を考えているのヴィアーナ。昨日、お兄様が私にした行為は、お仕置きであって、アドルの行為とは違うものよ）

そう自分に言い聞かせるものの、気付けばヴィアーナは切ない声で兄を呼んでいた。

（どうすればいいの？）

またお仕置きをされたいなんて、自分は変なのだろうか。

（お兄様に駄目もとで、お願いしに行ってみようかしら）

またお仕置きをしてください、などと言うのは変だ。けれど、うまい口実が見つからない。

考えあぐねているうちに、ヴィアーナの欲求は増し、頬は火照り、少し息が荒くなっていた。まるで身体の中で火が燃えているようだ。

（——お兄様の部屋へたどりつくまでに考えればいいわ）

ええい、とヴィアーナはベッドから降りると、スリッパは履いたものの、ガウンも羽織らずに薄い夜着のまま部屋を出た。

家人に悟られぬようにそっと扉を閉め、薄暗い廊下に出たヴィアーナは、板張りの上に敷かれた赤い絨毯の上を、兄の寝室へ向かって歩き出した。少し肌寒い。ヴァール・ドウナの本来の気温だ。昼間は宮廷魔術師が強烈な光源を作っている為に温かいのだ。廊下の途中、明かり取りの小窓から見上げた空には月が出ていた。

月明かりに照らされた階段の、月明かりが反射して光がつう、と伝い落ちたような飴色の手摺りにつかまり階段を上がると、ヴィアーナはやがて鷹の彫刻が施された檜材の重厚な扉の前にたどり着いた。ハディールの居室兼寝室である。

ここへ来るまでにうまい口実をととうと思いつかなかった。仕方がない。

扉をノックしようとして、ヴィアーナは躊躇する。兄はもう眠っているだろうか。引き返そうか。

しかし身体が切なく鳴いている。兄の愛撫を求めて。

「おに……さま……」

ヴィアーナはごくごく小さな声で呟いた。扉の向こうに聞こえるはずなどないような声で。が、直後。

扉が開いた。中から出て来たハディールが妹の姿に目を見開く。

「ヴィアーナ？ どうした、そんな格好——」

妹の異変に気付いたのか、家人に知られる事を恐れてか、ハディールはヴィアーナの背へ手を回し、中へ、と半ば無理やり引き込んだ。

夜なので明かりを最小限にした、薄暗く温かいハディールの部屋では、赤大理石の暖炉の中で薪が燃えていた。ヴァリドゥー家の当主の居室らしく、やはり赤を基調とした部屋である。手刷りの壁紙には赤い鷹の意匠があった。家具は机と赤いびろうどの張られた椅子、テーブルとソファがあり、壁中を棚が覆っている。棚の中には書物や薬品の瓶が並べられていた。ハディールが主に魔法の勉強をする部屋だ。続きに寝室がある。

「一体どうした、そんな格好で。ガウンくらい羽織れ。風邪をひくぞ」

ハディールは動揺しつつソファに腰掛けた。机の上に本と眼鏡が置かれている所を見ると、どうやら読書中であつたらしい。彼は地の厚い落ち着いた深い赤のガウンを羽織っている。はだけた夜着から垣間見える兄の逞しい胸元に、ヴィアーナはどきりとした。

「まあ、そこに座れ」

向かいの席を勧められるが、ヴィアーナは自身の身体を抱き締め、首を横に振った。

「どうしたんだヴィアーナ。何か悩み事でもあるのか？」

案ずるような彼の声に、ヴィアーナの中で甘えた気持ちが頭をもたげる。兄はいつも私の事を心配してくれている。きっと言う事を聞いてくれるはずだ。

「もう小遣いがなくなったのか？」

ヴィアーナは小遣い制であり、あまり外出を許可されないヴィアーナの欲しい物は、よく馬丁のキールに買いにやらせていた。大抵月末になるとヴィアーナの小遣いは底を突き、神妙な面持ちで兄の元を訪れるのが常だ。

兄は何か勘違いしている。月末の理論武装した小賢しいヴィアーナでない事は、見て判るだろうに。

「……を、して」

「何？ 声が小さいぞ」

ハディールは席を立ち、再びヴィアーナに近づく。兄の接近に、ヴィアーナは彼から目を反らす為に俯いた。鷹のような鋭い瞳を今見てしまうと、くじけそうになる。

「お兄様……お仕置き、して」

ぴたりとハディールが足を止める。数秒の沈黙の後、

「——何を言っている。お前は今日、先生の言う事を聞いてちゃんと勉強して、良い子だったじゃないか。どうして懲らしめる必要がある」

ハディールは笑いながら席へ戻ろうとした。しかしその動作は固い。

「じゃあ——」

ヴィアーナはハディールのガウンを掴んで引き止めた。待ってお兄様。

「可愛がって。ヴィアーナを可愛がって」

咄嗟に出た言葉を兄の背にぶつける。

「ヴィアーナ」

ハディールが驚いた顔で振り向いた。妹の発言が俄かには信じられないようである。自分の視線のはるか下にある妹の肩に手を置き、少し腰を屈めて覗き込む。

「何だか眠れないの。身体が——変で」

泣きそうな声で兄に身体の変変を訴えた。何だろう、この惨めな気持ち。夜着一枚きりの頼りない我が身を思い出して、ヴィアーナは自身を抱き締める手に力を込める。しかし身体は依然として熱い。

ヴィアーナの様子を見てやっと事態を飲み込めたのか、ヴィアーナの肩に置かれたハディールの手は微かに震えた。

「——許せ。私のせいだ。まだ固い蕾であつたお前をいたずらに刺

激してしまった私の……」

ハディールはヴィアーナを抱き締めて彼女の髪をそつと撫でた。

「まだ湿っているじゃないか——風邪をひいたらどうする」

兄の愛撫によってヴィアーナの真紅の髪は乾いていく。その間ヴィアーナはうつとりと兄の逞しく厚い胸に頬を預けていた。この場所には自分に絶対の安心をくれる。

次にハディールはヴィアーナの頬を両手で掴むと顔を上げさせた。彼女の無垢さを感じさせる柔和な眉の下、ヴィアーナの真紅の瞳は情欲に潤んでいる。白い歯を覗かせた、ふつくりとした半開きの唇は、まるで接吻を求めているようだ。しかしヴィアーナに兄を誘っていると言う自覚はない。

妹の顔を見てハディールは一瞬、数十年来の宿敵に出会ったような鬼気迫る顔をした。

ひつ、とヴィアーナは思わず声を上げる。

「お、お兄様……？」

何て怖ろしい顔をするのだろうか。迷惑なのだろうか。それともヴィアーナの事が嫌いになったのだろうか。

我が苦悩は増すばかりだ、とハディールは呟いた後、ヴィアーナを再び強く抱き締めた。

「一線を越える事は出来ないが、お前の身体の火照りを鎮める事く

「はいは出来る」

そう言うと、ハディールは妹に口付けし、夜着を脱がせにかかった。ヴィアーナは夜着の下には薄い生地ドロワーズを履いているだけだ。ハディールが彼女を抱き寄せたまま、薄い夜着のボタンを片手で器用に外されると、夜着はすんと、と彼女の腰のあたりまで落ちた。薄闇の中、先のつんと尖った丸い二つの胸が露になる。

ハディールはヴィアーナの胸を両手で揉みながら、親指で胸先を刺激した。ヴィアーナの息が俄かに荒くなる。胸先が兄の手によって弾かれるたびに、痺れるような刺激を感じてヴィアーナは身体をびくんびくんとしならせた。その刺激から逃れたいと言うヴィアーナの意思に反して、身体は強い刺激をもつと求めるように胸を突き上げる。何て浅ましい身体だ、とヴィアーナは己を恥ずかしく思った。

「あつ、あつ」

突き上げられた胸先にハディールは身を屈ませて口付ける。しばし嬲り続けた後、彼は唇を離す。

「ここからはベッドで」

掠れた声で囁くと――彼もまた欲情していた――ハディールは妹を抱き上げて続きの寝室へと運んだ。

妖しい時が過ぎた。

ハディールはぐったりとしたヴィアーナをシーツの上に仰向けに寝かせると、彼女の乱れた夜着を直さずにはばらくその痴態を眺め

た。愛しげな眼差しで。

枕の上に豊かに散り広がる真紅の髪。白い額には滲んだ汗にその髪が数本張り付いている。眉根が微かに切なく寄せられ、閉じられた目の端には羞恥に流した涙の跡。唇は初々しい最後の嬌声の後に果てた為、微かに開かれて舌を覗かせている。

「――愛している。貫きたい、お前の中に私の情熱を注ぎたいが、お前は私を兄と呼ぶ。所詮は叶わぬ夢なんだ。いつかはお前に相應しい男を探してやらなければならない。それが私の役目なのだから」

ハディールは自分に言い聞かせるように言いながら、ヴィアーナの夜着の胸のボタンを留めて、夜着を完全に正してやった。

朝になり

ヴィアーナはカーテンの隙間から差し込む朝の光に目を覚ました。起き上がると、そこは自分の寝室のベッドの上だった。

（あれは夢だったのかしら）

昨夜、ヴィアーナは身体の火照りでどうしようもなくなり、兄の部屋を訪れ、そして、自分から願い出て兄に愛撫して貰った。

……そんな夢を見た、と言う事なのだろうか。

「私つたらなんて……」

なんて淫らな夢を、とヴィアーナは薔薇色に染まった頬に両手を添える。

枕元には伏されたままの『甘い果実』とクッキーの入った瓶があった。就寝前のいつもの自堕落な状態のままだ。きっと本を読んでいる途中で眠ってしまったのだろう。

「それにしても生々しい夢だったわ……」

夢の中、ヴィアーナは兄の逞しい腕に抱き締められ、未知の快感を体験した。その感触を、はつきりと覚えている。

ヴィアーナは布団の中へ手を伸ばすと、夢の中の兄に触れられた部分にそっと触れてみた。

「えっ？」

夜着一枚きりのような心もとない感触に、ヴィアーナは布団を捲って夜着の下を目で確認してみた。

「えっ？」

仰天してすぐさま布団と太腿を閉じる。

夜着の下に何も履いていないではないか。履いていたはずのドロワーズはどうした。

ヴィアーナはきよろきよろと辺りを見回すと、本が置かれた場所の反対の枕元に、きちんと折りたたまれたドロワーズを発見した。

「ええっ？」

衝撃が走る。普段、ヴィアーナはこんな場所に下着など置かない。それではあの夢はやはり。

ヴィアーナの顔は耳まで真っ赤に沸騰した。

こうしてはいられない。兄に問い質さなければ。ヴィアーナはぎこちない動きでベッドを降りると、ガラスの扉を開けてバルコニーへ出た。ヴィアーナの部屋は二階である。

ひよつとしたら庭にもう兄が出ているかもしれない。彼は私達よりも先に朝食と摂って出かけるから。ヴィアーナは急いで広大な真紅の庭にハデイルの姿を確認する。

「あつ、いたわ」

ヴィアーナは兄の真紅の外套を纏った後姿を確認した。彼は両脇に薔薇の咲き乱れる小道を通り、塀へ向かって歩き出している所であつた。もはやその姿は遠い。鷹の姿となつて地上世界へ飛び立つ直前である。

ヴィアーナはバルコニーの柵をぎゅっと掴んで身を乗り出した。

「お兄様、待つて！」

ヴィアーナが声を張り上げると、階下のハディールはぴたり、と足を止め、バルコニーの妹を仰ぎ見た。弱り顔である。

「待つて、すぐ行くから」

ヴィアーナはガウンを羽織ると、すぐさま部屋を飛び出した。

「お兄様」

数分後、ヴィアーナは息を切らせて薔薇の庭に朝陽を受けて佇む美貌の兄の元までたどり着いた。

真紅の貴公子ハディールは非常に陰鬱な面持ちで、両膝に手を付いて息を整えるヴィアーナの側へ自分から歩み寄る事なくじつと見下ろしていたが、やがて口を開いた。

「何だ。朝から騒々しい」

その声はひどく冷たいものだった。

「お兄様、昨日——」

昨日、私にした事は、夢じゃないのよね？ 面を上げてヴィアーナが問おうとすると、ハディールが歩み寄って来た。いつもヴィアーナに温かい眼差しを注ぐハディールの真紅の瞳は、何故か冷たく凍り付いていて、一切の感情が読み取れない。

「それ以上言うな、あれは夢だ」

やや無機的な声で、諭すように、ハディールは言った。

「ゆめ……」

ヴィアーナは兄の言葉に、ああそうか、やっぱり夢かと一瞬納得する所であった。が、数秒後にはつと矛盾に気付く。

「やっぱり夢じゃなかったのね！」

改めて頬を薔薇に染め、ヴィアーナは兄を見上げるが、彼を取り巻く重々しい空気はまったく妹に同調しない。

「……もしかしてお兄様、怒っているの？」

そんなに怖ろしい顔で、と言う言葉をヴィアーナは飲み込む。面と向かって言えぬほど、ハディールの顔は冷やかで、怖ろしかった。

「お兄様？」

返事がないのが切なくなり、ヴィアーナは兄に抱き締めてもらおうと彼の胸へ飛び込もうとした。が。

「よせ」

ハディールは歩み出した妹を外套の中から金の指輪を嵌めた手を出して押し留めた。

「どうして？」

肩を押されて拒絶され、ヴィアーナは後ろによろけそうになりながらも、泣きそうな瞳で兄に訊く。いつもなら、私を抱き締めて髪を撫でってくれるはずなのに。

「いつものお兄様じゃないわ。どうしてなの？」

やっぱり、昨日のヴィアーナは兄にとって迷惑だったのだろうか。

「お前は私に甘え過ぎだ。お前と同じ年頃の娘達は皆社交の場に出ていると言うのに、そんな事でどうする」

ハディールの言葉はヴィアーナの胸に突き刺さった。友達に遅れを取っているヴィアーナが、最近、常に気にしている事だ。

「いずれは他家へ嫁がなくてはならないんだぞ」

追い討ちをかけるようなぶっきらぼうな兄の台詞に、ヴィアーナの周囲の景色は真っ暗になった。

（そうだわ。いずれは私、お兄様と離れて暮らさなければならいんだわ）

目の前の愛する兄と。母と。真紅の屋敷と。真紅の薔薇の庭と。

「そんなの嫌……」

口接けして欲しい。またベッドの上で力強い手で優しく愛撫して、私を可愛がって、蕩かして欲しい。昨日だけでなく、たくさん、たくさん。この先も。一度あの感覚を知ってしまったから、知らない時には戻れない。

（嫌よ、お兄様……お兄様の優しい手が欲しいの）

兄を見上げるヴィアーナの真紅の瞳が切なく潤む。その感情が、もはや兄と妹の一線を越えたものであると言う事に、気付かずに。

「やめろ……そんな瞳で…私を見るな」

額に汗したハディールが、妹を睨んで威嚇しつつ忌避するようによろよろと後退さった——それは猛禽類が鳥の雛に慄くような滑稽な構図だった——その時。

「お嬢様っ」

緊迫した空気を打ち壊す、洩刺とした声がした。ヴィアーナが振り向くと馬丁のキールが銀の盆に便箋を載せて駆け寄ってくるではないか。

「どうしたの？ キール」

「お早うございます、旦那様、お嬢様」

ヴァリドゥー家の赤いお仕着せを着た馬丁の少年はまず当主と令嬢に挨拶し、早くご機嫌を直してください、とヴィアーナに盆を差し出す。キールは本来このような役目は負っていない。自分から申し出たのだろう。突然、盆の上から次から次にしゃぼん玉が吹き出してヴィアーナは目を丸くした。

「お嬢様へお手紙です。使いの方が直接届けに来たお手紙で、急いでお返事を、との事でした。使いの方は玄関でお返事を待っています」

便箋は七色に輝く封蝋で封がされていた。印は中心に渦巻きがあり、その周囲に波形の模様が入っている。ロンドデリル家の紋章だ。

ヴィアーナは便箋を手に取りペーパーナイフでそれを開けると、中の手紙を開き、目を落とした。手紙には一行だけ、

『今日、うちへ遊びにいらっしやいよ。面白い事があるから。
追伸 三時のお茶の時間ね』

とある。あの双子らしい、と思いつつ、ヴィアーナは伺いを立てる為に兄を見上げる。

「ユランとミランから。遊びにいらっしやいって。行ってもいいかしら。ちなみに、先生は今日来られないわ」

ハディールは一瞬、渋い顔をしたが、

「昨日の今日だが、外の世界に慣れる事も重要だ。許可する」

突き放すような兄の返事に、ヴィアーナは少し淋しく思いながらも、返事を伝えるようにキールに命じた。

その間にハディールは身を翻すと真紅の鷹の姿に変じて空へ飛び立って行った。

「あ、お兄様」

ヴィアーナは兄を見送りながら思った。いつもの兄なら、庭の薔薇を散らさぬように塀の上で変化するのに。

約束の時間までにヴィアーナは自室で『甘い果実』の続きを読む事にした。

寢室の続きの部屋の机に向かって本を開けば、一見勉強している風に見えるだろう。突然母が訪れたとしても平気だ。

さて、『甘い果実』の主人公、メロリアンはダトリール男爵からとうとうプロポーズされ、数日以内に返事をしなければならないと言っ局面に立たされた。

それを人づてに聞き及んだ謎の青年アドルは、ダトリール男爵の屋敷を訪れる。二人の初めての対面である。緊迫した場面に、ヴィアーナは固唾を飲んだ。

アドルはメロリアンへの気持ちをダトリールに告げる。そしてもう、彼女とは身体の関係があると言っ事も。

（ちよ、ちよっと、それはまずいわよアドル）

それを聞いたダトリール男爵は烈火の如く怒った。

（当たり前じゃない、だってダトリールはプロポーズの返事待ちの段階だけど、政略結婚だからそれは形式であって、メロリアンはほぼ婚約者だもの）

『甘い果実』の舞台はヴィアーナのいる時代よりも少し昔の古き良き時代であったが、現在でも貴族の令嬢が婚前に純潔である事は必須である。

しかし、ダトリール男爵はメロリアンに失望するかと思いきや、なんと手袋をアドルに投げて決闘を申し込んだではないか。メロリアンが純潔でなくとも構わないと言っのだ。

（ダトリール男爵、貴方のメロリアンへの愛はきつと本物だわ）

ヴィアーナは大いに感心した。この時点までヴィアーナはドル・ハリアドルと同様、危険な男アドル派であったが、ここへ来てダトリールの株が急上昇し、どちらを応援して良いのやら迷った。

（どちらも捨てがたいわね）

迷いながらヴィアーナはページを捲る。やがて弁護士が呼ばれ、正式に二人の男の決闘の日取りが取り決められたのだった。

二人が決闘すると言う話を聞いたメロリアンは苦悩した。そして二人の男を同時に愛してしまっていた事に気付いた。

（二人の男を同時に愛する……そんな器用な事、出来るものなのかしら）

ヴィアーナはふと、今朝の兄の言葉を思い出す。自分が他家へ嫁いだら。無論、夫を愛し、尽くさなくてはならない。けれども自分は同時に、兄を引き続き愛し続けるだろう。

それは果たして、メロリアンの境遇と同じものなのだろうか。ヴィアーナは少し考えたが、答えは出なかった。

そして決闘の日。森の中で、魔法の杖を持った二人が対峙した。

（杖を持って決闘なんて、古風ね）

ヴィアーナは杖無き大魔導師と言われるドル・ハリアドルの偉大さを改めて感じた。その弟子であるハディールも、魔法を行使する際に杖は用いず、呪文も非常に短い。

いよいよ二人の男の間に立つ弁護士が決闘開始の合図をしたその時。

なりふり構わぬ姿のメロリアンが髪を振り乱して走って来た。二人とも、私の為に戦うのはやめて、と叫びながら。

「『二人とも、私の為に戦うのはやめて』……」

ヴィアーナは鼻息を荒くしながらメロリアンの台詞を呟いていた。何て羨ましい。自分もこんな台詞を一度でいいから言ってみたいものだ。

メロリアンは次に、二人の男の目の前で懷からナイフを取り出して自分の喉元に突き付けた。二人が殺しあうのなら、争いの元である私が死にます、と。

ふとヴィアーナは一昨日の夜の出来事を思い出した。書斎の引き出しの中で、ヴィアーナはペンを胸に突き付けて兄に死ぬと脅した。もちろん冗談だが。

その時兄ハデイルは引き出しの外で何と言っていただろうか。ヴィアーナは記憶の糸をたぐる。

——例の悪書の影響か？ 脅しには乗らん！

（お兄様ひょっとして、この本を読んだのかしら……最後まで……）
妹を案じるあまり全てに目を通したのだろう。兄はこの本を読みながら何を思ったのか。それよりも続きだ。メロリアンと二人はどうなる。

呆然と立ち尽くすアドルとダトリール。が、しかし、一足先に我に返ったダトリールが隙を狙って魔法の杖から殺傷能力のある光線を発射してアドルの心臓を狙い討つ。

（危ない、アドル！）

しかし、メロリアンが飛び出てアドルを庇い、メロリアンは背に

ダトリールの一撃を受けた。

（メロリアン……！）

驚く二人の男の間で、メロリアンは致命傷を受けて倒れた。

これでいいの、これで。とメロリアンは二人の男に告げて、とうとう息絶えたのだった。そして物語は幕を閉じた。

（嘘……嘘でしょう……？）

本を閉じながらヴィアーナは涙していた。

（こんな終わり方なんて……果実が甘かった代償かしら。でもメロリアン、貴方はきつと二人の男の思い出の中で永遠に輝き続けると思うわ）

涙を拭いながらヴィアーナがふと窓を見ると、

『お嬢様そろそろお時間ですよ』

と書かれた色とりどりの風船が浮かんでいた。その中にそろそろ許してください。と言うメッセージが紛れている。

（もう、分かったわよキールったら）

ヴィアーナは肩を揺らしつつ、気持ちを切り替えて出かける仕度を始めた。

ロンドデリル邸はヴィアーナの屋敷の近くにあるが、ヴィアーナは今まで訪れた事が無かった。交流は奔放で機動力のある双子が一方的に遊びに来る形だったのだ。ただし王宮等の公の場ではハディールとロンドデリル男爵やその夫人や双子達との間で交流がある。

ロンドデリル家の始祖は『百色の迷夢』と言われ、その詳細な姿や能力については一切公表されていない。他人を屋敷に招く事も滅多に無いと言う、謎めいた名家である。

果たして、双子の手紙にあった面白い事とはどんな事なのか。ヴィアーナは期待に胸を膨らませつつ、真紅のドレスに兄から贈られた紅玉の首飾りを付け、手にはやはり兄から贈られた扇子を持って馬車に乗り込んだ。今朝の兄の件は帰ってから考える事にして、今日は楽しもう。

ヴィアーナは炎の馬が引くヴァリドゥー家の真紅の馬車の窓の中から、徐々に近付いて来たロンドデリルの屋敷を見た。屋敷は全体が白くきらきらと輝き、ケーキの上でちゃんとホイップされたクリームのようにふんわりとしてその頂が尖った形をしている。

「不思議な形のお屋敷……」

招きを受けて訪れた旨を門番に取り次いで貰い、門が開かれる。門柱には白い板にロンドデリルの紋章——渦巻きの上に波線——が螺鈿細工で虹色に輝いていた。

ヴィアーナの馬車が白砂の上に貝殻の散らばる敷地——馬車道は

舗装されている——の中に入ると、すでに正面玄関に停車している馬車があり、中から人が降りてくるのが見えた。

すらりとして背が高く、漆黒の外套を羽織る黒髪の紳士の後姿に、ヴィアーナは見覚えがあった。窓から扇子で口元を隠しつつ、じっと見ていると、紳士がまるでヴィアーナの視線に気付いたように少し振り返る。

ぞっとするほど完璧な線を描く、その横顔。

「モスリー！」

ヴィアーナはつい声に出して叫んでいた。

百色の迷夢

馬車から降りたヴィアーナは、玄関に出迎えに出ていたユランとミランから歓待を受けると同時に、目敏い彼女らはヴィアーナが手にした扇子に気付いて褒めそやした。

だが、ヴィアーナは双子の挨拶よりも何よりも、先ほどから視界の端で微笑を浮かべて黙って紹介を待つ青年、モスリーの事が気になり、胸の鼓動が高まるのを感じていた。

宮廷魔術師のモスリーと、青薔薇の屋敷のモスリーは同一人物だった。それだけでも衝撃だが、目の前の禍々しいほどに美しい漆黒の青年は、魔術の学院長ドル・ハリアドルの甥にして、兄ハディーと共に魔術の学院で学んだ、仲の良し悪しは別としても旧知の間柄だと言う事になる。

（どうして言ってくれなかったのよ！）

心の中でヴィアーナはモスリーを詰るが、モスリーと会った時、ヴィアーナは魔法で髪の色も瞳の色も変えていた。ヴァリドゥー家の娘だと言う事も秘匿していたのだからおあいこだろう。

「ヴィアーナ、紹介するわね。この方が宮廷魔術師を務められている、『黒の魔導卿』ことモスリー様よ。普段はお城の図書室からあまりお出にならないけれど、無理にお願いして来ていただいたの」

双子の姉ユランがヴィアーナにモスリーを紹介した。絹糸の長い巻き毛に負けぬ、透き通るような白い頬が紅潮しているのはやはり、モスリーのあまりの美貌ゆえだろう。

「先に図書室に来られた妹君に、滅多に公開しない珍しいお宝を見せていただけると聞いたもので、後学の為にと思いまして」

とユランに断り、モスリーはヴィアーナに目を向ける。

「初めまして、ヴィアーナ嬢」

モスリーは優雅な所作でヴィアーナの手を取り口接けた。ヴィアーナは紅い唇を微かに開く。

彼の手は、唇は、氷のように冷たかった。

「お兄様の事は魔術の学院時代から、良く存じ上げておりますよ」

当たり障りのないモスリーの挨拶に、ヴィアーナは少し落胆した。彼は目の前にいるのが先日会ったヴィアーナだと気が付かないようだ。しかし、髪と目の色と少しばかり服装が変わっただけだと言うのに、彼は目が悪いのか。

「あとはロアン子爵が来られるわ。あの方、空の色が明るくなっ
てから、日中は猛烈な眠気に襲われているらしいから、少し遅れる
かもって」

ミランが背伸びして門に馬車の気配がないのを見て言った。

「猫目子爵の眠気は私のせいでしょうね、きつと」

モスリーが申し訳なさそうに呟く。

やがてヴィアーナとモスリーは双子に誘われて屋敷の中へ入って行った。

二人が通された、七色の紫陽花が咲き乱れる庭に面した部屋では、ロンドデリル男爵夫人が使用人達を采配してお茶の用意をしている所であつた。ロアン子爵も遅れて到着し、ヴィアーナは二人とも挨拶を済ませた。

「それでは改めまして、ようこそおいでくださいました、皆さん」

ロンドデリル夫人は一同が集まつた所で、改めて挨拶をした。夫人はミランとユランがそのまま成熟した大人になつたような、虹色の瞳に波打つ白い髪をした美しい貴婦人であつた。ヴィアーナなどとても太刀打ち出来ない見事な体型を包む、虹色の貝殻のスパンコールが沢山付いた白いドレスの後ろの裾には、床に長くぞろびかせた銀系の飾りが数百本は付いている。

「まさか宮廷魔術師様にもおいでいただけるとは思いませんでしたわ」

ほほほ、と夫人は外套を脱いだ白シャツに黒いベスト姿のモスリーに熟女ならではの危険な流し目をくれたが、彼は朴念仁なのかまつたくの無反応であつた。代わりに蜂蜜色の髪をした糸目の青年、ロアン子爵は同性の美形をちらりと見て、面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「お茶の葉が開くまでの間、皆様方に我が家の家宝をお見せしようと思います」

こちらへ、と夫人に誘われ、一行は部屋を後にして屋敷の一階、

吹き抜けのロビーに出る。漆喰の白い壁には様々な色の貝殻や藻類の化石が装飾的に埋め込まれていた。

「こちらのお屋敷は昔、海だったのですかな」

開いているのかいないのか判らない程の糸目で壁を見ていたロアーンが、夫人に冗談で尋ねる。

「ええ。海水に浸っていました。今はすっかり干上がってしまいましたが」

やがて一行がたどり着いたのは、渦巻きの彫刻があます所無く彫刻された、少しばかり不気味な棺材の扉だった。

「ここにお宝があるんですか、夫人」

ロアーン子爵がここへ来て興味を示したように目を見開く。虹彩は蜂蜜色、瞳は猫のそのように縦長だった。ヴィアーナはようやく彼が『猫目子爵』と言われる意味が解った。

「ええ。我が家が『百色の迷夢』と言われる所以はこの家宝にあります。さあ、皆さん、心の準備は出きまして？」

夫人が畳んだ扇子を手の平でぴしりと鳴らすと、白いお仕着せを来たロンドデリルの使用人達が人数分のカンテラを持って現れた。

「カンテラとはどう言う事です？ 扉の中は暗い森にでもなっているのでしょうか」

カンテラを受け取りながらモスリーが軽い口調で言うと、夫人が

反応を示して艶然と笑う。夫人は確実にモスリーに色目を使っている、とヴィアーナは思った。

「当たらずしも遠からず、ですわモスリー卿。この中は迷路になっておりますの。我が家の始祖の遺骸で作った物で、古くはこの屋敷全体に迷路が広がっております」

「ほう」

そこでモスリーの瞳が興味を示したように煌いた。それを見たロンドデリル夫人がほうつと溜息を漏らす。

「――魔導卿の瞳は紫の炎が燃えているようですわね、まるで――迷路には我が家の始祖が海の底で見た数十億年の夢が詰まっており、魔法の領域となって道順を複雑にしております、かつて、我が屋敷に無断で入った者でこの迷路に迷い込み、正気のまま出て来られた者は一人としていなかったそうです。今は規模を縮小し、このように名残を留めるのみとなりましたが、たまには使ってやらないといけませんので、余興にと思ひまして」

「面白そうですね。一体何が待ち受けているのでしょうか」

「楽しい気分であれば、きつと楽しい事が待ち受けている事でしよう。逆に沈んだ気持ちであれば、解決されていない問題と直面する事もあるかもしれませんことよ」

「じゃあ私達が、とミランとユランが先頭切つて扉を開ける。中は暗がりだった。

「足元にはくれぐれもお気をつけあそばして」

夫人は扉を開け放って一行を促した。

それではお先に、と双子にロアーンが続く。次にヴィアーナ、モスリーの順で中へ入って行った。

「では皆さん、お茶の用意をしてお待ちしておりますわね」

全員が中へ入ると、夫人はいそいそと扉を閉めて焼き菓子の出来具合を見に厨房へ向かったのだった。

暗がりの中、優しい橙色の光を放つカンテラを手に、ヴィアーナは迷路の中を進んだ。

ユランとミランの姿は早々に見えなくなってしまった。数歩先を行く猫目子爵の蜂蜜色の髪が辛うじて見えている。ふいに彼は立ち止まって丸い背をしゃきつと伸ばすと、カンテラの明かりを消した。

「ロアーン様、どうされました？ それじゃ見えないのじゃありませんか？」

ヴィアーナが声を掛けると、ロアーンは振り向いた。

「暗くても見えるので大丈夫です。何だか急に元気になってきました。どうやら私、たった今まで半分眠っていたようです」

お前のせいだぞ宮廷魔術師、とロアーンはヴィアーナの後ろを歩くモスリーに恨み言を言った。

「夜行性の方には大変申し訳なく思っています。当初、一定期間だ

け行うつもりでいたのですが、陛下が変化する空をいたくお気に召され、継続せよと仰せられまして」

「それなら仕方あるまい」

淀みの無い言い訳に、ロアーンは肩を竦めて再びヴィアーナ達の手を歩き出した。

「今は機械で空の色を変えていると聞きましたけど？」

ヴィアーナは昨日ハリアドルから聞いた言葉を思い出してモスリーに訊いた。

「ええ、面倒なので幻灯機を作りまして。それに私の魔力を抽入しているんです」

モスリーはやや声を低めて言いながら、ヴィアーナの真横に並んだ。暗闇のせいもあり、ロアーンの姿はもう見えない。

「モスリー様……」

ヴィアーナはモスリーの横顔に目を向ける。やはり、気付かないのだろうか。また会えるのだと知っていたら、こんなに素敵な紳士なのだ。最初から私はヴァリドゥー家のヴィアーナですと自己紹介すれば良かった。また会ったばかりの他人として一から会話を始めなければならぬ。

ヴィアーナがそう思った矢先。

「様はよして欲しいですね。私もヴィアーナと呼びたいと言ったは

ずです」

囁くようなモスリーの声に、ヴィアーナの顔は輝いた。

「やっぱり、気付いていたのね」

「目と髪の色が変わっただけで別人と認識するような特異な目は持ちません」

闇の中に溶けるようなしっとりとした声で。

「会いたかったですよ。ヴィアーナ」

神秘的な紫の瞳はヴィアーナの目線のはるか上から優しい眼差しを注いだ。

「また会えるとは思っていましたが、こんなにすぐ機会が訪れるとは思いませんでした」

二人は同時に笑った。

「ふむ。壁は漆喰のようですね」

モスリーは壁に触れながら、材質を確認する。

「子爵の姿がもう完全に見えない。角を曲がったのでしょうか」

モスリーが辺りを見回していたその時、ふいにユランとミランがはしゃぐ声が出て、ヴィアーナは声の方を向いた。右側、そして斜め上。すると双子が見えない階段を駆け上がっていくのが見えた。

「双子のお嬢さん方、硝子ガラスの階段で下着が丸見えですよ」

モスリーがカンテラを掲げて指摘するが、彼女らには聞こえていない様子である。モスリーが見るに耐えかねて目を反らすと、双子の姿はすぐに消えた。

「この迷路には二階があるのかしら」

「さて。屋敷の外からは一切窺い知る事が出来ないようになっていましたね」

「ホイップクリームで覆われているみたいだったわ」

「ははは、確かに」

モスリーは肩を揺らす。

「——おや、漆喰の壁がここで硝子に切り替わっている。鏡面だ」

見ると、モスリーが触れる壁には彼の白く繊細な手が映し出されていた。

「通路も狭くなってるわ」

一人がやつと入れるほどの狭さになった。その通路は、壁も天井も鏡で出来ていた。壁同士が合わせ鏡となり、無限に続く空間を生み出している。カンテラを手にしたヴィアーナとモスリーが鏡と同じ数だけいた。

「まあ、何だか不思議」

ヴィアーナが左側の鏡を見てみると、突如、反対である右の鏡の向こうから何かが飛び出して来た。鏡の中だと言うのに。

「きゃっ！」

突然飛び出して来た何かに、ヴィアーナは危うく尻餅をつきそうになった。咄嗟にモスリーが腕を伸ばし支える。

それは真紅のドレスと同じ色の、赤く長い髪をした幼い少女だった。暗がりと言うのにカンテラも持っていない。少女は目の前に立つ二人の存在に気付く事なく駆け足で通路を横切ると、ヴィアーナから見て左側の鏡の向こうに駆け去って行った。

「だ、誰？」

あつと言う間の出来事で、しかも暗がりである。ヴィアーナは少女の顔も確認出来なかった。

「もうすでに『百色の迷夢』と言われるこの家の始祖の魔の領域の中と言う事なのでしょう。扉を入れてすぐに、ではなかった気がします」

淡々と言うモスリーの側の鏡の中で、ぶくぶく、と水の泡が浮き上がった。

ヴィアーナがはっと気付くと、真横で吸盤の付いた蛸の足らしきものが見えるではないか。それにしても大きい。先端だろうに、人の腕ほどはある。

「……蛸…蛸の足だわ……」

恐怖を感じてヴィアーナは壁からよろよろと離れた。こんな物が壁から飛び出して来てはたまらない。

その時だった。再びヴィアーナの目の前の通路を大きなとかげが横切った。口を大きく開けて、牙を剥き出しにして、完全に捕食の体勢だ。

「きゃあああつ！」

悲鳴を上げながら、ヴィアーナは思わずモスリーの懷へ飛び込んだ。彼は躊躇なくは抱きとめてくれた。

（何が面白い事よつ、騙したわね双子っ！）

震えながら心の中で毒づいていると、柑橘系の優しい香りがヴィアーナの鼻腔を突いた。モスリーの纏う香りのようだ。それにしても良い香りだ。

「さっきのは……海に住む蜥蜴ですね。何かの天敵だったようない……とりあえず先に進みましょう」

「でも、また変なのが出て来たら」

これ以上の怖ろしい展開には耐えられない。もうすでに足が竦んでいる。扉を出たい気持ちでいっぱいだ。

「その時は私が何とかしますから」

そう。今、ヴィアーナの目の前にいる彼は、宮廷に仕える魔術師なのだ。それはつまり、魔法王国ヴァール・ドウナの国王が認めた超一流の魔術師と言う事だ。王を守るほどの確かな魔力を持っているはずだ。彼から離れなくて良かった。

「貴方と一緒に、良かったわ」

ヴィアーナが彼の腕の中で安堵の吐息を漏らすと、モスリーは笑みを深くしながら、ヴィアーナの髪にそっと触れてきた。

「だ、だめ、触らないでっ」

ヴィアーナは慌ててモスリーの懷から飛び退く。どさくさに紛れて、ヴァリドゥー家の令嬢に、何をするのだこの男は。

モスリーは残念そうな面持ちで、所在のなくなった手を引っ込めた。しかし、この場に二人だけだからなのか、モスリーの態度は少しも怯んではない。

「何故？ 無礼だからですか？ それともすでに想う方でも？」

「私に触っていいのは、お兄様だけだからよ」

肩をいからせたヴィアーナの頑なな台詞に、モスリーは一瞬ぼかんとした顔をし、やがて肩を竦めた。

「お兄様ですか……あのお兄様が相手では難儀しそうですね」

ぼそりと呟いた彼の言葉を、ヴィアーナは髪を正しつつ聞こえな

いふりをした。モスリーは見れば見るほど素敵な殿方ではあるが、唐突な展開に、心の準備が出来ていない。それほど人馴れもしていない。

そしてヴィアーナとモスリーは一定の距離を保ちつつ、更に迷路の奥へと進んだ。

「ねえ貴方、昔、お兄様とよく喧嘩したって本当？」

ヴィアーナは昨日、魔導師ハリアドルを交えてお茶をしていた時に、話題に上った兄とモスリーの学生時代の事を思い出しながら言った。

「喧嘩と言うほどのものでは。それに、学院内で、家柄と存在感において右に出る者なしの『真紅の貴公子』として君臨されていた兄君と比べたら、私ははるかに地味でしたし、あまり接点はありませんでしたよ」

兄の性格は知悉しているヴィアーナである。モスリーが本当におとなしく何もかもぱつとしない地味な人物であれば、その存在すら気付かないだろう。しかし彼は今をときめく、才能ある宮廷魔術師だ。おまけに絶世の美貌でもある。

「お勉強の方はどうだったの？」

「——そう言えば、順位はいつも仲良しでしたね」

何となく兄とモスリーの関係が分かりかけて来たヴィアーナだった。おそらくモスリーは地味派手と言うやつなのだ。ヴァリドゥー家の人間、特に当主となる男子は、何よりも目立つ赤と言う色を標

傍する限り、常に他よりも抜きん出ていなければならず、自分に少しでも追いつこうとする者とは全力で戦わなくてはならないと言う鉄の掟がある。無論、ヴィアーナもそのように教育されてきた。ただし鉄の掟はひどく緩和され、ハディールからは砂糖菓子 of 掟と揶揄されているが。

ヴィアーナは推測した。今日を入れてたった二日会っただけだが、モスリーの性格からして自分から喧嘩をふっかけるような人物ではなさそうである。時計塔での決闘を申し込んだのはおそらく兄の方だろう。

歩いているうちに、ヴィアーナは行き先にそこだけ明るくなっている少し開けた場所を発見した。なんと葡萄棚とベンチが用意されているではないか。

「何でこんな所に葡萄棚が？」

驚きつつもヴィアーナはそこへ駆け寄った。本物だ。スカート部分膨らんだドレスのヴィアーナが三人やつと入るくらいの小さな土地に緑の芝生が生えていて、青々とした葡萄の葉に紛れて、たわわに実った葡萄が幾つも垂れ下がっている。

ヴィアーナはベンチの上にカンテラと扇子を置くとそこへ腰掛けた。追いついたモスリーもその隣へ座る。

ヴィアーナが見上げると、葡萄の蔓や葉の隙間から青空が見えた。おそらく魔法の空だろう。白いふわふわした綿菓子のようなものが空をゆつくりと流れている。それは水や氷の粒の塊で雲と言うのだと、ヴィアーナは最近知った。

「窓もないのに空が見えるわ。——そう言えばモスリーは、どうして魔法の空を作ろうと思ったの？」

「上に見えるあれは私が作った物ではありませんが——私は子供の頃、事情があつて地上で暮らしていた時期がありまして。その頃に見た空の色彩が素晴らしかったものですから、暗闇の国であるヴァール・ドゥナで再現してみたいと思ったのです」

「地上で……地上つて、人間達のいるところよね？」

ヴィアーナはまだ地上へは行った事がなかった。兄ハディールは魔法王国ヴァール・ドゥナ・ガーシュの存在を知らしめる為、日々地上へ出ては人間達の住む街や村への破壊行為を繰り返し、その凄まじい破壊ぶりに国王から先日、勲章を授与されたほどであるが、ヴァール・ドゥナの大多数の民は地上へ出る事は出来ない。地上をあまねく照らす光——光源の名は太陽と言い、魔術師モスリーの被造物はそれを模した物である——が強烈過ぎて、あまり魔力持たぬ者がその光を浴びようものなら、一瞬にしてその身が溶けてしまうのだ。

そのような怖ろしい光源のある地上世界で暮らしていたと言うモスリーは、やはりそこそこの魔力の持ち主なのだろう。ヴィアーナは母の言葉を思い出す。紫の瞳は魔力甚大の証だと。ハリアドルは彼のおじだ。

「ええ。かつて母は不義の子を身籠つてしまい、身の置き所がなくなつて、家を出て地上へ逃れたものですから」

不義の子、と聞いて、ヴィアーナの身体に緊張が走った。よくそんな事を知り合つたばかりの者に話せるものだ。

「……不義の子って……」

「かく言う私です。母とおじとの」

モスリーの口調はあくまで淡々としていて変わらない。先刻と変わらぬ、柔らかな微笑を浮かべている。彼はもしかすると感情が麻痺しているのだろうか。

「おじ様つてもしかして……ハリアドル様……？」

「ああ、貴方の家庭教師の方ではありません——昨日叔父から聞きました——奇抜な叔父ですので、会った時はびっくりしませんでしたか？」

「素敵な方だわ。まだ一度しか授業を受けていないけれども。あの、今の事、誰にも言わないわね」

微妙な空気を払拭する為に、ヴィアーナはベンチから立ち上がり、棚から下がっている葡萄を一房手に取るうとした。しかし、葡萄がある場所まで手が届かない。

ふいにヴィアーナの背後で気配がした。モスリーが代わりに葡萄をもちでくれている。モスリーに後ろから包まれているような体勢に、ヴィアーナはどきりとした。それにしても、彼は何と言う背の高さなのだろう。ヴィアーナが幾ら手を伸ばしても届かない葡萄に、容易く手が届く。

ヴィアーナはモスリーから手渡された、たわわな葡萄を受け取った。

「ありがとう」

一粒、口に含む。果肉を噛み締めると甘い果汁が口の中いっぱいに広がった。

「とっても甘いわ」

「昔は二人とも手が届かなくて、悔し紛れにどうせあれは酸っぱいのだと言いましたっけ」

「そうだったわね。貴方はとても背の高い子だったけど、それでもそこでヴィアーナは笑っている自分にはっと気付く。」

「——私、今、何か言った？」

モスリーは沈黙したまま、ヴィアーナをじっと見つめた。が、やがて口を開く。

「——やはり貴方はエリンだ」

「それは、貴方のカラスの名でしょ？」

いや、初恋の娘の名を付けたのだと言っていた。

「何も、覚えていないのですか？」

「何を言っているの？ 私、貴方と会ったのは一昨日が初めてよ」

「哀しいですね。再び会えたと言いつのに、どうしてそんなに何もかも忘れてしまっているんでしょう」

モスリーは少し切なげな顔をした。表情に乏しい彼なので、よく観察しないと判らないが。

「忘却の川の水でも飲んだのですか——思い出すのが辛いのか——ほら、目の前を御覧なさい」

モスリーはヴィアーナの背を軽く押して正面を見るように促した。すると、彼の声に呼び出されたように二人の正面に鏡の壁が出現する。そこには二人の姿が映し出されていた。

しかし、鏡の映ったヴィアーナの髪は真紅ではなく金色をしていた。瞳も緑だ。キールに先日かけて貰った魔法が解けていなかったのだろうか。

「これが本当の貴方だ」

「違うわ。これはきつと魔法で……」

ヴィアーナはモスリーの方に身体を向けてきつと彼を睨む。

「——貴方の魔法ね？ 私はヴァリドゥー家のヴィアーナよ。からかうのはよして！」

ヴィアーナは強い口調で言い放った。赤い髪を勝手に変えられるのには我慢がならない。

「心配は無用です。鏡に映ったのは幻影。貴方の髪は先ほどから変

わらずにヴァリドゥーの真紅だ。きれいな胸飾りですね」

まだ怒りの収まらないヴィアーナの、胸元で光る紅玉^{ルビー}のペンダントを見てモスリーが言う。

「お兄様にいただいたの」

つんとして答える。

「お兄様、お兄様。少々不快になってきました」

眉宇を寄せ、不機嫌そうにモスリーは言った。直後。

「あっ」

モスリーはヴィアーナを抱き寄せて髪をひき掴むと、顔を上げさせてその唇を強引に奪った。

ヴィアーナは驚きに目を瞪る。それは口の中へ彼の舌が入り込ん
で来る、深い口接けだった。

「ああ……うつ」

（お兄様っ、ハディールお兄様っ！）

心の中でヴィアーナは兄に助けを求める。が、兄は今ここにいない。どうすれば。ヴィアーナは咄嗟に思い付いて口の中に侵入する彼の舌を思い切り噛んだ。

微かな呻き声と共にモスリーの唇がヴィアーナから離れる。

「可愛い唇から、甘い葡萄と血の味がしましたよ」

モスリーは口の端を指先で拭いつつ、ヴィアーナを睨み付け、少々恨みがましい口調で言った。

「お兄様に、言い付けてやる……」

ヴィアーナの息はまだ荒かった。まさかこんなに手の早い男だとは思わなかった。否、最初に会った時、すでに危険な香りはしていたが。

「どうぞお好きに。ですが、いい年をしてまだ兄離れ出来ない甘ったれなのですか？ 貴方は」

ヴィアーナを腕に捕らえたままモスリーは言った。彼に冷たく厳しい眼差しを注がれ続けたヴィアーナの潤んだ瞳は、更にじわりじわりと揺れていく。

黒い睫毛に覆われたモスリーの紫のそれは、何と言う容赦のない、殺傷能力を秘めた瞳だろうか。兄の瞳が全てを焼き尽くす激しい炎なら、この男の瞳は身を切るように冷たい氷の刃だ。温室育ちのヴィアーナに彼の眼力は辛過ぎた。この上あともう少し、意地悪な言葉を吐かれようものなら、悔しいがたちまち涙の海が溢れてしまいそうだ。

「……済みません。言い過ぎました」

ヴィアーナの様子を見てか、モスリーは謝りつつ、ヴィアーナを解放した。

「けれども、ついなので一つだけ。お兄様じゃありませんが、家族に無断で勝手に出歩くのはおやめなさい。見ず知らずの者に誘われて屋敷に入るような世間知らずの貴方だ。危険過ぎます」

「貴方になんか……言われなくても……ううっ」

奪われた唇を拭うヴィアーナの瞳から、ぼろり、と涙が零れ落ちた。悔しいけれど、反論出来ない。まるで兄のようにもったもな事を言う。断りもなく唇を奪ったくせに。

顔をくしゃつとして本格的に泣き始めたヴィアーナに、モスリーが目を背けながら懷からハンカチを取り出して手渡す。が、ヴィアーナはぴしつとそれを払い除けた。

「そうでした。貴方、意外に癪癪持ちでしたよね。折角作った花輪も打ち捨てられた記憶があります」

モスリーははあつと溜息を吐きながら芝生の上に落ちたハンカチを拾い上げた。

「違うつて言ってるでしょ！ 私は貴方の恋人なんかじゃないわ」

次から次に零れる涙をヴィアーナは手で拭う。化粧が崩れるかもしれない。意地を張らずにハンカチを受け取れば良かった。惨めだ。

「迷路を出るまでに泣き止まないと、みっともないですよ」

「分かってるわよ。ふえ、え」

ヴィアーナは泣きながらもベンチの上に置いた扇子とカンテラを手にした。

「まあその葡萄でも食べて、落ち着いてください——何ですか貴方、扇子にカンテラに葡萄って……一つ持ちましようか」

「結構よ！」

二人は再び歩き始めた。

途中、きらきらと光る石が敷き詰められた場所や、壁や天井の模様が万華鏡のように回転する場所、色とりどりの風船がいつぱいの場所に入り込み、ヴィアーナはその辺りでようやく泣き止んだ。モスリーはどこかの時点でそれらの空間を房室と呼び始め、おそらく迷路は魔術で目くらましをしているものの、その形状は単純な渦巻状をしており、中心に折り返し地点を作り別の場所から出られるようにしてあるのだと推測した。おそらくモスリーにはロンドデルルの始祖の正体が分かったのだろう。彼の推理は後にロンドデルル夫人を大いに驚かせた。

迷路の出口である別の扉から全員が抜け出ると、一同が迷路へ入る前に淹れられた紅茶の葉がようやく開く頃合であった。

禁断の呪法

魔術師モスリーはロンドデリルの屋敷を後にすると、王城の中へ馬車を入れた。夕暮れ時であった。

モスリーは城の敷地の隅に立つ高い塔の階段を上がって行く。

七層ある塔の最上階にたどり着いたモスリーは重い扉を開けた。そこには草原と青空がどこまでも広がっていた。

モスリーは青い草の上を、行く手のずっと先にぼつんと佇む小屋へ向けて進む。この空間とその小屋は国王から下賜されたモスリーだけの場所であり、モスリーが一人では広すぎる屋敷に帰宅せずに普段寝泊りをしている、ほとんど家のようなものでもあった。

草原の中の所々にある赤茶色の地面が剥き出しとなった箇所には魔方陣を書かれた跡が残されている。モスリーが魔方陣を編み出す研究に使った跡だ。過去、モスリーは手違いで魔方陣から地底王国ヴァール・ドウナの更に深淵の国から巨大な化け物呼び出してしまった事がある。何とか打ち負かし、配下にした。

（あの時は焦りましたよ）

苦闘の末に得た、ヴァール・ドウナを壊滅させるほどの力を持ったその化け物は、自分が本当に困った時に呼び出すつもりだ。今は異空間に繋がる見えない引き出しの中にしまい込んでいる。

小屋の側にはレンズの付いた仰々しい箱型の機械が置かれ、その機械から放射線状に光が拡がってこの空間の空の模様を映し出して

いた。モスリーが作った魔法を用いた幻灯機の試作品である。ヴァール・ドウナの空の色を彩る大掛かりな幻灯機は塔の屋上に設置されていた。

モスリーは簡素な小屋の中へ入った。内部は彼専用の図書室となっていた。小屋の大きさよりも内部の空間の方が明らかに広い。小屋が三つは入りそうである。高い天井までの、壁と言う壁は書物で多い尽くされ、中二階がある。中央には閲覧用の、飴色に輝く櫥材の机と椅子があった。

モスリーは椅子を引いてどかっと腰掛ける。

「お帰りなさいごませ、ご主人様」

モスリーの使い魔であるガラスのエリンがどこからともなく飛んで来て主人の肩の上に止まる。

「疲れました。滅多に外出などしないものですから」

モスリーはエリンの乗った反対の肩を回しながら中空から日記帳を出現させて机の上で開くと、机に置いてあったペンを取った。

モスリーは日記に今日の出来事を書き記す。ロンドデリルの茶会に招かれた事、ホイップクリームのような外観をしたその屋敷の中には、かの家が『百色の迷夢』と言われる所以である魔法の迷路があったと言ふ事。

魔法の迷路は渦巻きの形状をしており、幾つもの部屋があった事。おそらくかの家の始祖は古生代に生きた渦巻き貝の中の魔力を持ったものであると言ふ事も。

そして追記する。迷路の中で海蛸の怖ろしげな幻影を見た。かの家の始祖が海の底で見た恐怖の記憶であろう、と。

更に行を変えて、モスリーは素晴らしい速さでペンを進める。ヴィアーナの事について。しかし彼女の名の綴りを間違えてしまったので、書き損じたを宙に浮かせて吹き飛ばす。

ヴァリドゥー家の真紅の姫君、ヴィアーナ。彼女は私の初恋の少女、エリンに違いない、と。

（本当に、彼女は見れば見るほどエリンに良く似ていた）

モスリーはそこでペンを置き、背伸びをした。

屋上の幻灯機を点検しに行こうか。それとも、もう眠ろうか。

「ヴィアーナって、数日前に来たあの娘ですか？　ヴァリドゥー家ってどう言う事、こと？」

主人の肩の上でカラスのエリンが騒ぎ立てる。

「静かになさい」

「何なの、何なのよ。私の知らない所でっ。それに、ご主人様が白いブラウスなんてどう言う事？　いつも全部黒なのに、なのに」

「そう言えば」

眠そうであった目をモスリーはかっと開く。紫色の瞳が鮮やかに

輝く。

身だしなみなど、必要最低限整えればどうでもいい自分が、どう言う訳か、普段持たないハンカチまで携帯してしまった。

ヴィアーナ。あの娘が茶会に来ると聞いたからだ。きっと。

（浮かれていた？ この私が？）

モスリーは秀麗な眉を寄せ、気難しい顔で机に頬杖を付いた。その精緻な彫刻のような奇跡の横顔に、たとえ彼が黄金や宝石で作られた城の中にいようと、背景は全て色褪せる。これまでに城に仕える女官から舞踏会に訪れた貴族の娘達まで、幾人がその横顔に卒倒、或いは発狂したのか、勉強に勤しむ彼は知る由もない。

モスリーは茶会で再会した娘の姿を頭に思い描く。

ちよつと睨んだだけで真紅の瞳をすぐに潤ませる癖に、気だけは強い娘だった。小さな唇が愛らしく動く。

お兄様、お兄様と。

ふん、と不快げにモスリーは鼻を鳴らす。

（少年時代に地上で会っていたエリンに違いないと言うのに。私の事はすっかり忘れて……）

一体どういう事だろうか。記憶喪失。否、やはり別人。他人の空似なのか。

——否。彼女がエリンとは別人ならば、迷路で共有した葡萄棚での思い出はどうなる。

やはり彼女はエリンだ。間違いない。どう言っただ経緯でヴァリドゥー家の令嬢となっているのか知らないが。

（ひょっとすると、彼女はもともとこちらの住人であつたのかもしれない。何か事情があつて地上へ来ていたとも考えられる。出来る事なら、私の事を思い出させたいものだ。私の初恋の人なのだから）

初恋以来、女性には全く興味を失つていたモスリーであつた。ただし、執拗に迫られて仕方なく女を抱いた事は幾度もあるので童貞ではない。過去、モスリーは技巧など何一つ用いず、生理現象のみでも女を抱いた事もある。世間には、仰向けになつていれば勝手に踊り出す女もいるのだ。

（この世に真実の愛を捧げる者はたった一人でいい……エリンだけで……）

しかしモスリーが惹かれ始めているその娘が、ヴァール・ドウナの名門中の名門貴族、ヴァリドゥー伯爵家の娘にして、魔術の学院『イグナ・ダヤ』でその名を轟かせた真紅の貴公子ハディールの妹ときては、ヴァール・ドウナで名を馳せているとは言え、一介の宮廷魔術師でしかないモスリーにとってその障壁は高く、彼女を得るのは容易ではない。

（しまった。あんな妹がいると知っていたら、真紅の貴公子とはもう少し友好的に接しておくべきだった）

モスリーは指を鳴らして日記帳とペンを消失させ、椅子から立ち

上がった。

「どちらへ？ ご主人様」

「今日は屋敷へ帰ります。馬車の用意を」

「えっ、お帰りになられるんですか？ めっずらしい」

カラスに答えず、モスリーは図書室を後にした。

モスリーは街中に所有する自身の屋敷へ到着した。空はすでに夕闇である。

門柱に青薔薇の紋章が掲げられた門を、モスリーは馬車の中から指を鳴らして開け、馬車を中へ進めさせる。門番はいない。

モスリーを乗せた馬車は、石像や古代遺跡の柱のようなオブジェが点在する前庭を通過していく。途中、仕掛け噴水の出迎えがあった。モスリーは窓の中から無感動にそれを見つめる。

やがて馬車が建物の前へたどり着き、モスリーは馬車から降りた。肩にはカラスのエリンが乗っている。

ふとモスリーは前庭を振り返る。

「石像が増えていたような」

モスリーは目の前にある苦悶の表情を浮かべた男の石像に目をやる。数日前に訪れた時はこのような石像などなかった。

「侵入者ですか。珍しい事です。エリン、招かれざる客にはそれ相応のもてなしを」

「了解。くちばしで粉々に砕いちゃいましょうねっねっ」

肩に乗っていたエリンが羽をはためかせて飛び発つと、モスリーは外套を翻して屋敷の中へと入って行った。

黒い外套を脱いだモスリーは、ふとベストに張り付いた一筋の長い髪に気付き、それを摘み上げた。おそらくヴィアーナのものだ。彼女を抱き締めた時の。

髪の毛は天井から吊り下がる灯りに透かしても赤かった。

（やはり魔法の匂いがする）

最初にヴィアーナと出会った時、モスリーは彼女に二つの魔法がかけられている事に気付いた。一つは宮廷魔術師の彼にとっては話にならないほどお粗末なものだったが、一つは強力過ぎて魔法の全貌や隠された意図が掴めないほどのものだった。

「この魔法を解くとどうなるんでしょう。エリン本来の金色の髪が現れるんでしょうか……しかしこの魔法を解くには私でも時間がかかりそうだ」

とりあえずモスリーはヴィアーナの髪を丁寧に洗面台の上に置い

てから衣服を脱いだ。

壁のタイルがあちこちひび割れた浴室のバスタブの中、モスリーは長い脚を伸ばし——脚が収まりきれないので縁にかけているが——冷水のシャワーを浴びながら天井を見上げた。

均整の取れた美しい肢体。濡れた黒髪が象牙の首筋に張り付いて、あまりにも妖しくなまめかしいその姿は、かつて彼が通った寄宿学校、『イグナ・ダヤ』の共同浴室で大いなる波紋を呼んだのだが、彼はその事を知らない。気付かなかった。ただ自分が浴室に入ると、真紅の貴公子以外は皆逃げるようにその場を立ち去っていた事だけは覚えている。

モスリーは思い出す。彼——真紅の貴公子ことヴァリドゥー伯爵家のハディールは、剣術や乗馬にその他の競技に秀でているだけあって、見事に鍛えられた、地上世界で言うならば太陽神のような肉体美を誇っていた。しかしそんな事はどうでもいい。エリンだ。エリンとヴィアーナ。どうしてここへ来てあの貴公子を思い出さねばならないのだ。社交の場でも衝突を回避する為に、互いに極力顔を合わせないようにしていると云うのに。

（控えめに言いましたけど、兄上とはチェスやフェンシングも互角でしたよ、ヴィアーナ）

普通の事なかれ主義が災いし、いざと言う時に妙齡の好みの令嬢に己を主張し損ねた事をモスリーは悔いた。

（それにしても、ヴィアーナとエリン……）

モスリーの頭の中には今日再会した娘ヴィアーナと、そして金髪

の初恋の少女の姿エリンの姿があった。頭の中で似た面影を持つ二人を並べるうち、やがて金髪の少女の姿の方が大きくなる。

エリン。残酷な思い出と共にある、永遠に色褪せぬ初恋の少女。モスリーは彼女の全てを今でもはつきりと思い出せた。

かつて、モスリーは少年時代を地上で母親と二人きりで暮らしていた。誰も足を踏み入れぬ森の奥でひっそりと。

母と二人だけの生活でも、それはそれでモスリーは楽しかった。しかし、モスリーはある日、森に迷い込んだ人間の少女と出会った。それがエリンである。

陽の光に優しく照り輝く、長く淡い金髪に、芝生と同じ色の緑色の瞳の少女だった。以来、モスリーは森へ頻繁に遊びに来るようになった。その少女と木の実を拾ったりしてよく遊んだ。エリンは柔らかな外見とは裏腹に気の強い子だった。ただし泣き虫だが。

エリンが笑えばモスリーの心は弾み。冷たくされれば切なくなつた。それを恋と言うのだと、モスリーは後になって知った。

（私が素直な心で人と触れ合ったのは、あの少女が最初で最後だ……）

エリンと仲良く遊ぶうち、モスリーは森の外の世界へ好奇心を抱き始めた。森の外には人間の住む世界があり、そこにはエリンの住む村があるのだ。彼女に遊びに来てもらうだけでなく、自分からエリンを訪ねてみたい。そう思うのは自然の流れだ。

そしてとうとうモスリーは好奇心から、森の外へ出てしまった。

残酷な出来事が待ち受けているとも知らずに。

モスリーが訪れた人間の村には、彼のような紫の瞳を持つ者など一人もいなかった。加えて禍々しいほどの美少年に、村人は魔物の化身ではないかと警戒した。しかし世間知らずのモスリーはそんな事などつゆ知らず、母親から貰った青薔薇をエリンに渡したのである。エリンはことのほか喜んだ。しかしモスリーは今でもその事を悔いていた。

（何て愚かな事を。あの薔薇は母上が魔法で出現させたものだ——人間の世界に、あれほど青い薔薇などどこにも存在しないと言うのに）

やがてエリンの受け取った青い薔薇が引き金となり、事件は起こった。

エリンの部屋で妖しい青薔薇を見た彼女の母が、娘を案じて村の神官に相談した。結果、それは魔界の花であると言う事になり、神官は村人達に、村に魔物が忍び寄っている旨を伝えた。そして神官の指導のもと、村人は魔物狩りと称して集団で森の中へ踏み入る事となった。モスリーの母の住む森へ。モスリーの母が村人達から弓矢で襲撃を受けているその間、モスリーはその容姿が災いし、村の男達に捕らえられ、鎖に繋がれて集団で蹂躪された。

その時の情景を思い出し、青ざめた彼は虚空を睨みつつ我が身を抱く。

体の良い口実を吐き捨てながら、モスリーの衣服をむしり取り、欲望の赴くままに代わる代わる身を引き裂いた野蛮な村人達。

下卑た笑いの中で未熟であつたモスリーの身体は興奮させられ、辱めを受けた。人間ごときに。

追憶の中の無力な我が身に言い聞かせるように、モスリーは自身の肌思い切り爪を立てる。自分は今、無力ではない。今の自分は確かにここにいるのだと言う事を、この痛みで感じるがいい。しかし、どれほど深く爪を立てても、さほどの痛みは感じない。

あの日以来、モスリーの心は凍ってしまった。

常に微笑を湛えているのは自分の素の顔がおそろしく無表情だと言う事を知っているからだ。痛覚すら鈍磨してしまった冷たい身体と心の中で、しかただ一つ、純粋な怒りだけが熾火のように燃えている。

森から出る事さえしなければ、母とエリンとのささやかな幸せはずっと続いていたのかもしれない。

誰も心から愛せない。ただ一人、エリンだけを、彼女との思い出だけを心の片隅で希求する生活から抜け出る事が出来ない。もう決して。

屈辱の日は、しかしそれまで何の力を持たぬ無力な身であつたモスリーに終止符が打たれた日でもあつた。

誇りを汚されると言う、その強い怒りによってモスリーの体の中に眠るヴァール・ドウナの民の血が、大いなる魔力が発動したのである。

村人は全て、石となった。母も——おそらくエリンも。かくして

魔法王国ヴァール・ドウナへの門は開き、モスリーは魔術の学院『イグナ・ダヤ』の学院長を務める叔父、ハリアドルと出会い、魔術の学院でひたすらに勉学に励み、やがて宮廷魔術師に就任した。それが『黒の魔導卿』ことモスリーの経緯である。

宮廷魔術師として名声を得ても、モスリーはどこか空しさを感じていた。けれども真紅の令嬢ヴィアーナに——彼女と出会った事でエリンへの気持ちが再び膨れ上がり、生命の火を点されたような気がしてならなかった。

手に入りたい。ヴィアーナを。ヴィアーナと言う名のエリンを。あの、兄離れ出来ていない甘ったれの娘の目をこちらへ向けさせるにはどうすればいいのだ。

ふいに、先ほど前庭で見た石膏像がモスリーの脳裏をよぎる。

「良い事を思い付きました——あれの魔法を解くのはやめです。まずは彼女を落とすのが先でしょう」

モスリーは微笑を浮かべつつ浴槽から上がった。

浴室から出てガウンを羽織ったモスリーは、濡れた髪もそのままに、いそいそとカラスのエリンに石膏粉と水の入った器、そして台座を用意するように指示した。

しばらくして、命じた物が用意されると、モスリーはカラスのエ

リンを追い出し、先日ヴィアーナを招き入れた大理石の暖炉のある絢爛な応接室で作業に取りかかった。どうせ滅多に人が訪れない屋敷のだから、製作はどこでも良い。

ヴィアーナの体型は今日、迷路の中で彼女を抱き締めた時に触れたので憶えている。型取りなど不要だ。

シャンデリアの薄明かりの下、モスリーは石膏で手を汚しながらヴィアーナの顔を、ごくゆるやかに波打つ流れる髪を、首筋を、肩を正確に形作っていた。石膏の中には彼女の一筋の髪の毛が練り込まれている。

丸い額、品のある鼻梁、瞼、大きな瞳、ふくよかな耳朵を持つ耳よく薔薇色に染まっていた、ふつくらとした頬。そして甘やかな唇。

「今日奪った可愛い唇も……はつきりと覚えていますよ」

モスリーは指先で愛撫するように彼女の唇を形作る。血の味の接吻をくれた、憎らしい唇。けれどももはや、それが愛しくてならない。

「——また奪いたくなりましたが、全てを作り終えるまで我慢します」

小ぶりだが、乙女らしい夢が沢山詰まっているような丸い胸。きつと胸先は上を向いているに違いない。すんなりと伸びた可憐な腕、深窓の令嬢らしい繊細な指先、コルセットに包まれた腰の線も完璧に憶えている。きつく締め上げていたが、甘やかされて育った彼女は、淑女が行う過激なダイエットをまだ開始していないはずだ。それを計算に入れる。

製作している間、モスリーは終始、常の微笑を湛えていたが、彼女の尻や秘所を形作る時、さすがにその表情は強張り、額に緊張の汗が滲んだ。眼差しはいつになく真剣である。

石膏像の前に跪いて彼女の脚を製作しながら、モスリーは狂気に囚われていた事によやく気付いた。しかしもう遅い。もうすぐ完成だ。

跪いた体勢のまま、モスリーは出来上がった石膏像を見上げた。頭脳明晰のモスリーが、知力の限りを尽くして見えぬ箇所は計測して作り上げた、実物と寸分違わぬヴィアーナ像がそこにあった。

「ヴィアーナ……」

モスリーの胸はときめいた。久々にガウンの中の男が熱くなるのを感じた。よもや、自分にこんな才能があったとは。

「その格好では寒いでしょう。母上の服を持ってきますね——明日、仕立て屋を呼びますから、それまでは母上の物で我慢してください」

モスリーは立ち上がると魔力を用いて手に付いた石膏を完全に払いつつ、暖炉の上に置かれた小さな肖像画に目をやる。モスリーの母の肖像画だ。

「母上。今、私が胸を焦がしているのは、先日この屋敷へ来ましたこの令嬢です。ヴァリドゥー伯爵家のヴィアーナ嬢……この娘はきつと、私が昔、地上にいた頃に恋した初恋の少女、エリンなのです」

肖像画の隣、金の置時計の針は真上を向いて重なり合っていた。

きつと彼女は眠っている頃だ。何も知らずに。夢を見ているのかも
しれない。

モスリーは石膏像にそつと手を触れた。

「夢の中で私を感じてください……ヴィアーナ」

彼女の石膏像——彼女の魂の一部である髪の毛が入っている——
にモスリーは自身の手を滑らせていく。自分の手の感触を覚えさせ
るように。余す所なく。

やがてモスリーはヴィアーナ像を抱き締めると、その唇に、首筋
に、唇で触れていった。

ふいにモスリーは愛撫を止め、石膏像から離れて暖炉の方へ歩む
と母の肖像画を後ろに向けた。

「すみません、母上。私も男です」

モスリーは再び戻り石膏像を抱擁すると、彼女に愛撫を始める。
究極の自慰行為だと言う事は解っている。しかし欲望が止まらな
かった。

自分の創造物だと言うのに、この感覚は何だ。日中つれなかった
彼女の優しさに包まれているような気さえする。身体の奥処に眠っ
ていた官能が目覚めさせられる。今までに自分を通り過ぎた女とは
生理現象で行為に及んでいただけだったが、今はどうだ。自ら欲し
て熱く猛っている。

モスリーが両手で石膏像の胸先に触れていると、徐々にそれが硬

くなつたような気がした。気のせいだろうか。

「いや……」

彼女を模した石膏像の胸先は、確実にモスリーの愛撫に反応していた。

これは石膏像の原型、ヴァリドゥー邸の寝室のベッドの上で寝息を立てているであろう彼女が反応していると言う事だ。自分はそのような魔法をこの石膏像にかけたのだから。魔術は成功したようだ。しかしこんなにも早く彼女と同調するとは。

「ヴィアーナ……」

モスリーは感動に打ち震え、もはや彼女そのものと言っても良いヴィアーナ像に、ソファーに無造作に掛けておいた黒い外套を着せると、とうとう台座から持ち上げた。ぷち、と花の茎を手折るような音がして、ヴィアーナ像は台座から離れた。もはや四肢の関節が動くようになったその身体をモスリーは横抱きに抱き上げる。モスリーの青白い頬には微かに朱が差していた。

「こんな所で済みませんでした。幾らなんでも、恥ずかしいですよ。ね。貴方は淑女だと言うのに、私とした事が。ベッドへ運びます。埃だらけですが勘弁してください」

モスリーは腕の中の彼女に目を落とす。裸身のヴィアーナは目を閉じて、眠っているようだ。それにしても、何て軽い。

「貴方は小鳥？ それとも小兎？ こんな気持ちになったのは初めてです……可愛い。大切にしたい」

エリンと過ごした時のモスリーは少年であり、その恋は淡いものだった。愛しい者を包んで守りたいと思う気持ちは芽生えていなかった。

「ヴァリドゥー邸で眠る本体のヴィアーナの夢の中に私の存在が刷り込まれれば——きっと彼女は私を愛するようになるはずです……」

思い付きの魔術は成功を収めたが、おそらくこれは一時だけのものだろう。本体のヴィアーナが目覚めた時、映し身は石膏像に戻るのかもしれない。

「貴方を変えて見せる。貴方が目を覚ます夜明けまで、充分時間があります」

モスリーは寝室へ向かう階段を上る。塵の積もった階段の踊り場の窓から、長い事手入れしていない庭が目に入る。

「——本当に荒れ放題だ。庭師を呼ばなければ。花嫁を迎える屋敷ではありませんね」

モスリーは寝室の扉を蹴り開けると、ヴィアーナの映し身を埃塗れの天蓋付きのベッドに運び上げ、彼女に着せていた外套を脱がせると、自身もベッドの上に乗り上げた。

扉を開けると同時に点灯したベッドの側にあるランプの明かりのみの薄闇の中、モスリーが組み敷いた、ベッドの上に横たわるその映し身は、この上なく無垢な身体をしていた。枕辺には真紅の髪が散り広がり、幼さの残るあどけない寝顔をしている。

「ヴィアーナ。私の記憶を刷り込んであげます。お兄様の事をきれ
いさっぱり忘れられるくらいに」

どうか私のものになってください、と囁き、モスリーはヴィアー
ナの映し身に唇を落としていく。

モスリーの唇が肌に触れる度、映し身は小さな甘い声を上げた。

夢の中

ロンドデリルの屋敷を訪れたその夜、床に入ったヴィアーナは夢を見ていた。

開けた場所。空は青く澄み、綿菓子のような白い雲がゆつくりと流れ、地上には緑の絨毯の上にとりどりの花々が咲き乱れている。優しい風が吹く懐かしいようなその場所に、ヴィアーナは佇んでいる。

どこだろう、ここは。

ヴィアーナの目の前、草の上に二人の少年と少女が向かい合って座っていた。金色の長い髪の少女と、黒髪の少年の横顔が向き合っている。しかし少年の方は俯いて難しい顔でせつせと花冠を編んでいるのに対し、少女は無言のままじっと、そんな彼を意地悪そうな目つきで見つめている。

まるで豎琴の奏者のような少年の細く繊細な指先は、側に咲く花を無造作に摘み取っては、ぎこちない動きでその茎を製作途中の輪の中に編み込んでいる。

（手伝ってあげればいいのに）

ヴィアーナは気の毒に思う。きっと、少年は花冠を編んだ事などないのだろう。そして同時に驚愕する。この少年の美しさときたら。

象牙色の肌、濡れたようにしっとりとした黒髪に、瞳は野に咲く堇と同じ色をしたその少年は、和やかなこの場所に不似合いなほど、

異様に美しかった。そしてどことなく気品漂う。

少年の典雅な横顔に、ヴィアーナは少し既視感を感じた。誰かに似ているような。

「出来た。これで機嫌を直して」

少年はそう言って少女に花冠を差し出す。その花冠の下手くそな事と言ったら。花など編む途中で潰してしまっつてよれよれである。

「いらないっ！ そんなよれよれの花輪なんて！」

少女は怒鳴りながら、差し出された花冠を引き掴んで奪い取ると、草の上にぴしゃっと叩き付けた。

（ちょっと、それはないんじゃない？ 男の子が折角作ってくれたのに）

少年は打ち捨てられた花冠を見て、傷付いたような顔をした。見ているこちらが切なくなるような。時間をかけて作ったのだろくに。

「明日はきつと、青い薔薇を持つてくるから」

意気消沈した様子で少年は言う。

「本当？ 約束ね。持つて来てくれるまで私、貴方を許さないから」

ヴィアーナは再び思う。何てわがままな子。この少年も可哀想に。

「約束するから。僕の事、嫌いにならないでエリン」

エリン。

「エリンですって？」

思わず発したヴィアーナの声に、少女が今初めてその存在に気付いたかのように、あどけない顔をこちらへ向ける。

ヴィアーナを見上げる少女の瞳の色は、広がる草の絨毯の色と同じ、緑色だった。

そしてその顔は。

（私に、似てる——）

どうして？

夢はそこで途切れた。そして。

——ヴィアーナ。

暗闇の中、誰かに名を呼ばれた。

（だれ？）

体が、動かない。目を開けようにも瞼が重くて。

突如、皮膚に感じた感触に、ヴィアーナの身体はびくりと震えた。

人の手の感触。

（触らない……で）

繊細な指先の感触。それはヴィアーナの皮膚の上をゆっくりと滑っていく。続いて包み込むような手の平の感触が、ヴィアーナの身体を形造るように、全ての輪郭を撫でていく。

（誰……なの……？）

——私を感じてください、夢の中で。

低く、甘く耳元に囁いてくる男の声は、聞き覚えがある。

（貴方は……モスリー？）

そう。確かに、その声は昼間に再会した魔術師モスリーのものだ。ならば暗闇の中、余す所なく触れてくる人の手の感触は、彼のものなのだろうか。

撫でられている内、ヴィアーナの身体に官能の火が点される。

（あっ……）

——感じているんですか？ ヴィアーナ。

彼の声が掠れた声で尋ねる。

ふいに、首筋や胸元に微かな痛みを感じた。唇で食まれているのか。彼の息遣いが生々しい。

（感じて…なんか……）

「あっ」

しかし、その手や指の細やかな動きに、ヴィアーナはつい声を上げてしまう。

「や……ああっ」

（お兄様……私……どうしたら……）

「あ、ああ」

（やめて、やめてモスリーっ）

ヴィアーナは昼間の出来事を思い出す。彼から接吻された時、その舌を噛んでしまった事。差し出されたハンカチを払い除けた事。

（だっていきなりだったんだもの。びっくりして……貴方の親切を無下にした事は謝るから、だから）

「ん……やあ、あ……お兄様……あっ」

——やれやれ、こんな時にもお兄様ですか。

——貴方が望むのなら、我が家の青薔薇を全て赤く染め上げましょう。だから。愛しています。どうか、私の物になってください。

（勝手な事を言わないで。貴方は私の暮らし全てを奪ったくせに！）

ヴィアーナの心の奥底で、誰かが叫んだ。

——ただ一人の存在に向ける親愛の目で私を見て欲しいのです。あの日以来、死んだように生きている私に、再び生命の火を点してください。

（あの日……）

あの日とは？ 昔の記憶の扉には何故か錠がかかっているものがあるのだ。鍵は持たない。誰が持っているの？

（それに、私は……貴方の思っているエリンじゃないわ……本当に人違いよ）

「わたし……は……エリンじゃ……っ」

——本当に、憎らしいほどの忘れっぷりで……腹が立ちますね。近々、貴方に忘れ得ぬ痛みを差し上げますよ。いずれ貴方は私にそうされる事を望むようになるはずです。そうしたらもう、完全に私の物だ。

「ひっ——ひいいッ、ひいいいあッ——」

——…感じやすい身体だ…早く貴方の中に入りたい…私をその場所で、痛いほど締め付けて欲しい…ですが今はまだ奪いません。大切な貴方ですから、そこはきちんと、やはり我が家の代々の当主がそうしたように、新婚初夜に散らした妻の処女の証を白い絹のハンカチで拭って夫婦の宝とするつもりです。

——それが早く実現出来るよう、私は毎晩貴方の夢に訪れ、こうして愛を囁き続けるでしょう。

彼の声を聞きながら、ヴィアーナは心の中で悲鳴を上げた。もはや声に出す気力がない。

——ごめんなさい、ヴィアーナ。男の事情が迫ってきました。不埒な私を許してください。

彼の荒い息遣い。衣擦れの音。彼の微かな呻き。ややあつて、何か、温かい雨のようなものがヴィアーナの身体に降ってきた。

「ん…ふ…」

カーテンを透かす朝の光の中、ヴィアーナは泣き濡れた瞳で目を覚ました。

（私ったら何ていやらしい夢を……）

思い出すだけで羞恥に身体が震える。夢の内容も内容だ。登場人

物を選んだらどうなのだ。架空の人物ならまだいい。よりもよつて、昨日会った宮廷魔術師モスリーに淫らにいたぶられる夢だなんて。

（どうしてモスリーが……昨日唇を奪われたからって……よくもあんな発想出来たわね……恥ずかしすぎて、しばらく会えないわ——いえ、あんな手の早い男、会おうとも思わないけど）

と思いつつも、心の片隅では確実に気になってきている事は確かだ。宮廷魔術師モスリー、黒の魔導卿。

モスリーがあんな男だと知っていたら、間違っても彼の屋敷に入る事などしなかったろう。まるで『甘い果実』のアドルのように危険な男だ。

ヴィアーナは身を起こして棚の上の時計を見た。朝食の時刻をとくに過ぎている。誰も起こしに來なかつたのは昨日疲れたヴィアーナへの配慮だろうか。

（……良かったわ）

ヴィアーナは安堵の吐息を漏らす。こんなはしたない姿を使用人に見られていたら、ヴァリドゥー家の令嬢として、いや、それ以前に乙女として身の破滅だ。

「この時間だとお兄様はもう発たれた後ね。あと三時間で先生が來られるじゃないの。ちゃんと身支度しなきゃ」

（それにしてもどうしてこんな目に）

ヴィアーナは再び泣きそうな顔でおずおずとベッドを降り、クロゼットへ向かうと下着を替え始めた。次に夜着を脱ぐ為に胸のボタンを開け始めたその時、

「や、やだ、なに」

鏡台の鏡にたまたま映った自分の姿にヴィアーナは目を止めた。よく確認しようと鏡の元へ歩み寄る。首筋に何かの跡がある。虫にでも刺されたのか。

鏡の前に立って再度確認すると、それは打ち身のような内出血だった。首筋や胸元に幾つもの花びらのように散っている。

「嫌だわ。お化粧で隠れるかしら」

はあ、とヴィアーナは憂鬱な溜息を吐いた。昨日から何なのだ。

「どうしたの？ ヴィアーナちゃん」

ハリアドルが顔を覗き込むまでヴィアーナは彼の問いかけに気付かなかった。また授業中に上の空だったようだ。モスリーと同じ色の妖しい紫の瞳に、思わずどきりとする。

「顔が青いよ。気分が悪いの？」

机に向かったヴィアーナの隣の椅子に腰掛けるハリアドルは、気遣う口調で言った。彼は相変わらず、星の輝きを集めて紡いだよう

な銀髪を驚くほど高く結い上げ、桃色のドレスにうつすらと化粧ま
で施して女装している。当初は彼が女性と聞いて驚いたヴィアーナ
だったが、もはや慣れつつあった。それどころか、常識に囚われな
い自由な彼を羨ましいとさえ思い始めているのだった。

「先生……」

「何か悩み事かな？　僕で良ければ相談に乗るよ」

ハリアドルの声には、やはり『イグナ・ダヤ』の頂点に立ち、多
くの生徒達を世に送り出ただけあって、包容力がある。少しの間
ヴィアーナは言い淀んでいたが、彼だったら打ち明けてもいい、と
意を決し、とうとう口を開いた。

「今朝、変な夢を見て……少し寝不足みたいなんです」

「どんな夢を見たんだい？」

訊かれて、ヴィアーナは激しく後悔した。あんな夢の内容など、
たとえ物分りの良いハリアドルでも、やはり話せない。

みるみるうちにヴィアーナの顔が沸騰していく。その間、ハリア
ドルの目は目敏くヴィアーナの首筋に白粉で隠されたものを見つけ
たが、彼はそれについて何も口にしなかった。

「君の真つ赤な顔から察するに——少し淫らな夢かな、それは」

ハリアドルは扇子の端を顎に当てて、机の正面にある午後の光に
満ちた窓の外眺めながら静かに言った。カーテンが風にそよそよと
揺れている。

言い当てられ、ヴィアーナは無言でこくん、頷く。さすがは兄の師、ドル・ハリアドルだ。隠し事は出来ない。

「何だか妙に生々しくて……」

「一つ聞くけど、君はまだ処女だよね？」

「あ……当たり前——」

一瞬、兄との夜がヴィアーナの脳裏をよぎる。けれどあの行為で何も失ってなどいないはずだ。けれど。

「——ですわ」

返答の微妙な間に、ハリアドルの紫の瞳がちらり、と横目でヴィアーナの様子を窺う。何やら後ろめたくて、彼の視線にヴィアーナは身を小さくした。

「君は年頃だし、こんなに可憐なんだ。言い寄ってくる殿方と色々あるのかもしれないけど。結婚前に一線を越えてはいけないよ。僕が言うのもなんだけど、何と言ってもヴァリドゥー家は目立つ。悪い噂はすぐに広まるんだからね」

ハリアドルの言う通りだった。家の者に黙ってちよつと家を出たくらいで新聞に載る所だった。ヴァリドゥー伯爵家で公の場に顔を出すのは当主である兄ハデイルだけだが、それでも非常に目立つ家なのだ。

「言い寄ってくる殿方なんて……」

一人での外出が許されたのは数日前の事で、知り合った殿方もまだ二人だけだ。ハリアドルはその辺の事情までは知らないのだろう。そう言えば明後日はロンドデリル邸で会った猫目子爵の交霊会にも誘われている。子爵は靈感が強いと言う。どうしようか。ヴィアーナの生活は打って変わって忙しくなりつつあった。その内、ハリアドルが懸念する事に直面する日が来るのだろうか。

「――夢に出てきた人と言うのは、君が今気になってる殿方なんじゃないのかな」

「え……」

ハリアドルの唐突な言葉に、ヴィアーナは煩雑であつた思考を停止する。

気になっているから、モスリーが夢に出て来た。そうとも考えられる。昨日の無理矢理に接吻されてから、彼の事が心に刻み付けられてしまったのだろうか。だから、あんな夢を見たのだろうか。

（モスリーの事が好きになりかけている、と言う事なの？）

メロリアンがアドルの事をいつの間にか好きになったように？

（いいえ、いいえ、断じて違うわ）

ヴィアーナは激しく頭を振りかぶる。

「私が好きなのは、お兄様で……！」

思わず叫んだヴィアーナに、ハリアドルは、ぽかんとした顔をした。しかし、やがてそれは温かい眼差しと微笑に変わり、愛おしむようにヴィアーナの真紅の髪に触れた。

「君と言う子は――」

ヴィアーナはハリアドルの微笑の意味がわからないまま彼を見つめる。何か、おかしい事を言っただろうか。

「心配の必要はなかった。真紅の貴公子を兄君に持つ君だもの。理想は高いよね」

まただ。また、いつかは兄と別れなければならないと言う事を思いつく。あんなに素敵な兄なのに。いつかは違う人と添い遂げなければならぬなんて。

その時。

唐突に猛烈な眠気が襲ってきた。やはり、あんな夢を見たのだ。深く眠れていなかったのだろう。かくり、とヴィアーナはうなだれ、そのままハリアドルの胸に倒れ込んだ。

ハリアドルは自分の胸に倒れて来た教え子を咄嗟に抱き止める。その際、彼の扇子が床に落ちた。

「どうした？ ヴィアーナちゃん」

ハリアドルが案じて問いかける。ヴィアーナはぴくり、ぴくりと身体を動かした。

「痙攣か？」

俄かに厳しい顔付きとなったハリアドルはヴィアーナの腰を支えて少し顔を上げさせる。ヴィアーナの顔はひどく青ざめていた。いつも艶やかに輝く紅い唇すら今は色を失っている。

「んっ……あ」

ヴィアーナの少し開いた唇から、悩ましい薔薇の吐息が零れた。

「む？」

妙齡の少女の誘うようなそれに、だがハリアドルは少しも好色を示す事なく、ただ彼女を冷静に観察しながら怪訝な顔をする。本来氷のような性の男なのであろう。

「ああ……」

眠ったままのヴィアーナは、眉を顰め、何かに苛まれているような苦しい表情をした。

「これは……」

ハリアドルは目を眇める。普段穏やかな彼の紫の瞳は今、針の先のように鋭く輝きを発していた。

「おそらく呪法だ。怨恨ではないな。この子に執着する者の仕業だろう。質の悪い男に懸想されてるな、ヴィアーナちゃん——」

銀色の眉を片方吊り上げ、ハリアドルはヴィアーナの額に触れ、

その前髪をそつと掻き上げると、ほとんど空気を震撼させぬ、囁くような声で呪文を唱える。

「訳知りの精霊達よ。我が名の下に、この娘に不埒な呪いをかけた者の所在を明らかにするがいい」

有無を言わせぬハリアドルの声に、ヴィアーナを取り巻く空気が揺れる。その反応にハリアドルは眉根を寄せた。

「かなり強力な魔力を持った者のようだ。何者だろう。この僕の命令を聞くのを下級の精霊が躊躇するなんて」

大氣中に偏在している人畜無害な下級精霊達は、皆、その場で起こった事、魔術の痕跡などを記憶として携えており、魔術師の要望によりその記憶を開示する。しかし、一様に口を閉ざす事もあった。情報を提供する事で自分達が害される恐れがある場合だ。

「おい、お前たち。僕より上なんてそうそついないぞ。守ってやるからさつさと答えるんだ」

再びヴィアーナの周囲の空気が揺れる。

「——何だつて？」

ハリアドルは目を見開いた。ヴィアーナを横抱きに抱くと、青ざめた顔で彼は立ち上がる。ヴィアーナを軽々と抱き上げている彼は、貴婦人の装いをしてはいるものの、まさしく男だった。

「ごめん、ヴィアーナちゃん……うちの甥が」

何でよりにもよって、とハリアドルは自身のドレスの裾を豪快にさばきながら真紅の令嬢を続きにある彼女のベッドへと運ぶと、早々にヴァリドゥーの屋敷を出た。

呪われた家系

夕暮れ時。自宅の応接室にて、魔術師モスリーは暖炉の側のヴァリドゥー家の令嬢にうり二つの、素晴らしい光沢を放つ絹の紫色のドレスを着た石膏像の前に佇み、恍惚の表情でそれを見つめていた。

窓からの夕陽を受けて向かい合う、生気を感じさせぬ滑らかな青白い肌の二人は、いかにも似合いの男女であった。部屋は静寂に包まれているものの、屋敷のいたるところで改修工事の音が鳴り響いている。

「本当に、どこかしこも痛んだばる屋敷で……今の今までどうでも良かったのですが……貴方のお陰ですよ」

やはり、花嫁を迎える屋敷はきれいにしておかねばなるまい。ひび割れた壁や噴水などもつての他だ。

常に黒い装束に身を包んでいるがゆえに、宮廷内で『黒の魔導卿』と言われるモスリーの出で立ちは今、生地はともかく、白ブラウスに臍脂のネクタイにベストとズボンと言う、ごく普通の紳士の出で立ちであった。ただしヴァール・ドウナのどの貴公子よりも美貌と気品において別格と言える程に抜きん出ているが。

モスリーが昨晚台座から引き離れたヴィアーナ像は、再び同じ台座に据えられていた。夜にはヴィアーナの映し身として生命を宿し、モスリーの愛撫に反応を示した石膏像であったが、朝になると再び石膏で作られた彼女に戻り、モスリーが応接間に置き去りにした台座に据えると、まるで何事も無かったようにぴたりと収まったのであった。

「ヴィアーナ……そのドレス、とても良く似合っていますよ。勿論、赤い生地でも作らせていますので安心してください」

ヴィアーナ像が今身に付けているドレスは、モスリーが早朝から王室御用達の仕立て屋を呼んで急ぎ仕立てさせたものだ。仕立てには店に殺到している予約を考えて、いきなりの注文では数十日はかかるであろう所を、モスリーが店主に無理やり金を握らせ、先約を押しつけて午前中までに一着、仕立てさせたのだ。数日経てばもう数十着は届くはずだ。石膏像の採寸を行った仕立て屋は怪訝な顔をしていたが、モスリーはまるで気にならない。

（裸のままでは寒いでしょうし、それより何より、近い将来私の花嫁となる人に恥をかかせるのは耐えられないのです）

「それとヴィアーナ。ガウンやスリッパ、私達の夜の為の可愛い夜着や下着も作らせていますよ。もうすぐ届くはずですよ——喜んで、と言っても、昼の貴方は同じ顔、か……」

モスリーはヴィアーナ像に歩み寄り、指先まで神経の行き渡る極めて品の良い手で硬い石膏の髪に触れ、軽く吐息する。もしこれが舞台の一場面であれば、それが冒頭であれ取るに足らぬ場面であれ、観客は皆、一斉にハンカチを取り出すだろう。そして共に願うだろう。石膏像の娘よ今こそ人となって動き出せ、それも彼からの接吻を受けた後が望ましいと。それほどにモスリーの横顔は、憂いに満ちてあまりにも美し過ぎる。

「昨晚貴方にしてしまった事——どうか許してください。貴方と来たら本当に敏感で……どこもかしこも、いちいち可愛い反応をするものですから、つい」

昨晚、モスリーは生身に変化したヴィアーナ像に興奮するあまり、ベッドの上で息も絶え絶えの彼女の映し身に情熱を放ってしまった。その白い肌に散った己の飛沫に、モスリーは大いに満足して映し身の隣で眠りに就いたのだった。

「貴方の無垢な身体に、私は何と言う破廉恥な……もうあんな事は、今の段階ではしません」

翌朝目が覚めて、元の石膏像に戻っていた彼女を見た時は少し寂しい気がしたもの、また夜は来る。

「夜が待ち遠しいですよ」

また夜になれば彼女と存分に触れ合えるのだから、昼間の辛抱くらい何でもない。

「昔の記憶があろうとなかろうと、ヴィアーナはもう、間違いなく私を意識し始めているはずです。この胸の想いを夜の間中、囁き続けましたから」

そう。これは、この魔法は、いずれ彼女の本体を手に入れる為の仕込みなのだ。次にヴィアーナと会った時、彼女はどんな顔をするのか。真紅の瞳に確かな恋慕の情を示してしてモスリーを見つめるのか。それともその頬を薔薇色に染めて伏し目がちに恥じらう様子を見せるのか。

「どちらの貴方も見たい……」

モスリーはヴィアーナ像を抱き締めると唇に唇を重ねた。そんな

時だった。

唐突に応接室の扉が開く。

「勝手に入らせて貰ったよ」

声とともに現れたのはモスリーの叔父、大魔導師ハリアドルだった。彼は流れる銀髪をそのままに、手には脱いだ外套、白ブラウスにベスト、ネクタイにズボンと、モスリーと同じ様式の出で立ちをしている。女装が多い彼には珍しい事だ。

「叔父上」

モスリーはヴィアーナ像から顔を上げると、邪魔が入ったと言わんばかりに細く優美な眉を寄せて叔父の方を向いた。

「やっぱり。まったくお前はと言う子は——」

ハリアドルは大股で石膏像の元へ歩み、モスリーをその迫力で退避させた。

「ヴィアーナ嬢じゃないか。お前は自分が何をしているのか解っているのか？ これは非常に質の悪い呪法だぞ！」

ハリアドルは甥を振り返って厳しく告げた。

「そうなのですか？ 知りませんでした。少女がよくやる他愛ない恋のまじない程度の魔法だとばかり……先日会った令嬢に一目惚れしまして……単なる思い付きです。いささか自分を情けなく思いますが」

モスリーはとぼけたような口調で叔父に説明する。が、これが呪法だと言う自覚は少なからずあった。長期間行えば確実に相手は憔悴し、死に至るだろう。その前に彼女を落とせばいいだけの話だ、と。

「思い付きで？ ほう」

ハリアドルは皮肉げに銀色の片眉を吊り上げて体をモスリーに向ける。

「さすがは呪殺と毒殺がお家芸のシメンドウル家の当主だ。忌まわしい血ゆえの才能には驚かされるよ」

皮肉たっぷりにハリアドルは言う。

モスリーの家であるシメンドウル家は、お家騒動で互いを呪い、殺し合い、その血を受け継ぐモスリーが地上から本来の世界であるこちらへやって来た時にはすでに無人の屋敷となっていた。

青薔薇の咲き乱れる屋敷の庭には、モスリーの母アルアデーラとその妹イアルジェンナがかつて遊んでいたと言うブランコがある。今は鳶が絡んでロープが見えないほどだが。モスリーはたまに屋敷に帰宅して窓から庭を見た際に、少女時代の母と叔母をそこに幻視した。今は二人ともこの世を去った。

感傷はさておき、このままではまずい。呪法の成就が阻止される。大魔導師の叔父にはまだ敵わない。モスリーは意を決し、目の前のソファに腰を落とした。

「抱きますか？」

叔父に言いながら、ネクタイを自ら解く。ヴィアーナとの恋路を邪魔されるくらいなら。叔父が両刀だと言う事は分かっている。不感症のこの身体などいくらでも捧げてやる。

「口封じに身体を売ろうと言うのか？ 水くさいじゃないか我が甥よ」

「叔父上がこの事を誰にもしやべらぬ事は分かっています。加えて、口を挟まないでいただければと」

ハリアドルは待ち受ける甥の元へ歩むと、彼を挟み込むようにしてソファに両手をかけた。銀髪がモスリーの頬を撫でる。美貌はもとより、胸板厚く、その腕も逞しいハリアドルである。即座に禁断の構図が出来上がった。

「好きにして構いませんよ」

そう言つて無感動な瞳を向ける甥に、ハリアドルは更に上をいく酷薄な微笑で答える。

「やめておくよ。お前の心は乙女よりも頑なだと言うことくらい分かっている。仮にその身体を手に入れたとしても、中は虚ろ——そうだろう？ モスリー」

「はて何の事やら」

とぼけるが、笑みが引き攣ってしまう。駄目か。次の手段を考えなければ。

「どうしてそんな事になったのかは、知るつもりはないがね」

否。多分彼は知っている。モスリーは思う。人間不信と凍り付いた心に気付かぬ鈍い叔父ではない。気を抜けばこの世の誰も持ち得ぬような、鋭く射抜くような瞳をしている彼だ。煌く銀髪は大いなる魔導の力に目覚めた証だ。その瞬間、並の者ならば死に至るほどの力を消耗すると言う。

（――身体では駄目となると）

モスリーは悟られぬように視線を動かさず次なる手段に思いを巡らせる。が、しかし。

「おやめ。取引の材料について考えるよりも、もっと楽な方法があるだろう」

彼の言葉に突き動かされたように、モスリーは叔父の胸に飛び込んだ。

「叔父上……私はどうすれば……！」

この胸は、嫌でも心情を吐露させる胸だ。心と身体が乖離しているがゆえに時に行き詰まる自分を、いつまで経っても独り立ち出来なくする。だからしばらく避けていたのだが。

「そう。それでいい。可愛い子だモスリー」

ハリアドルはモスリーの黒髪を優しく撫でた。

「彼女は——ヴィアーナは、私が地上で暮らしていた頃に遊んでいた初恋の娘なのです。そうに違いありません。だから日に日に私の頭の中で彼女の占める割合が大きくなり——気付けば彼女の像を作っていました。そうすると、彼女を振り向かせたい、恋しいと言う気持ち、更に強く、止まらなくなつて」

「屋敷まで改装し始めたと言つわけか。花嫁を迎える為に」

「この呪い——いえ、魔法は、私の願いを成就させる為のものなのです」

「プロポーズしたらいいじゃないか。正々堂々と」

「それが出来ればどんなにか——だって叔父上、彼女はヴァール・ドウナきつての名門貴族、ヴァリドゥー家の伯爵令嬢。それに対し私は一介の宮廷魔術師でしかない。いかんせん、身分が釣り合わないのです」

やや沈黙があつて、ぷつ、とハリアドルは笑つた。

「お笑いになればよろしい！」

モスリーは泣きたい気分だつた。涙などここ十数年出た事はないが。

「好きだよ、お前のそう言う所。お前の本来の身分を思い出すがいい——その身分を引つ下げて彼女にプロポーズすれば、先にどのような名門の貴公子との取り決めがあるうと、ヴァリドゥー家はその要請を無下には出来ない。そうだろう？ シメンドウールの『青薔薇公』よ」

モスリーはハリアドルの言葉が未だ理解できぬふうの、ぽかんとした顔で叔父の顔を見上げた。普段決して人には見せぬ、あどけない無防備なモスリーがそこにあった。

「シメンドウール公爵家の当主じゃないか、お前は」

叔父の言葉がようやく理解出来たようにモスリーの顔が、花開いたようにぱつと輝く。

「そうでした……城の図書室で寝起きする生活を送っていたので、すっかり忘れていました」

「とんだ公爵様もいたものだね——可愛いよモスリー、食べてしまいたい」

「早速彼女にプロポーズを！」

喜び勇んで立ち上がるうとしたモスリーを、しかしハリアドルが再びソファに押し戻す。

「叔父上？」

「気が変わったよ……お前は目の前の僕を見て何とも思わないのかい？」

「そう言えば、どうして今日は女装されていないのですか？」

彼は魔術の学院『イグナ・ダヤ』の中でも儀式の時の大魔導師としてのローブ着用時以外は堂々と弟子達の前で女装している。

「無論、お前の弱みを握って押し倒せる好機の到来を予感したからさ」

「矛盾していらつしやる」

しまった。この叔父は自由なのだった。彼は天才ゆえに性の別はおろか、自分の発言にすら縛られない。

「問答無用だよ。だけど思考の過程を辿るならこうだ。最初は何やら暴走しているらしいお前に父性を発揮しようと思った——ヴィーナ嬢が何か変だったから呪いの所在を探ったのさ——下心を引っ込めてね。けれどもお前がさつき見せた輝いた顔で良心の天秤が傾いたよ。心に羽根が生えて飛んで行こうとするお前を引きずり降ろして独占したくなった。彼女には黙っておいてやろう。今日こそ僕の物におなり」

「叔父上」

叔父は本気だ。いつもと違って瞳に余裕がない。抵抗してでも逃げるべきか。我ながら矛盾しているとは思うが、牙を剥いた獣の前に逃走本能が働かぬ者などいるまい。

「アルアデーラ姉上にそっくりのお前が欲しい」

ハリアドルの手がモスリーの滑らかな顎を捕らえ、その唇に触れる。

思いもかけぬ叔父の告白に、モスリーは納得して逃げる気を失った。母アルアデーラは危険な美しさを持つ女性だった。しかし本当

に穏やかで、優しくて、少女のようで、彼女の心にはおそらく一滴の悪もなかったろう。モスリーは伯父と母の子だ。悪いのは伯父だ。そうに決まっている。

「忌まわしい血ですね。闇が濃くなる一方で」

「本当にね」

そう言うところハリアドルは甥のブラウスの胸元を大きく裂いた。

「放蕩息子だった僕が長い旅を終えて家に帰ると、この家には誰もいなくなっていたよ。姉上さえも——元はと言えば姉上から逃げる為に家を出たって言うのに。お前が地上から来てくれたお陰で空家が埋まって助かったよ。僕はもう世俗に戻る気はないからね」

ハリアドルは髪を無造作に？き上げて独りごちるようにぼやくと、ふうつと葉巻きを吹かした。着乱れたハリアドルが座るソファの向かいには、ソファにうつ伏せに横たわるモスリーがいる。その腰には彼のブラウスが掛けられていた。

シャンデリアが照らす明るい応接室の窓の外は闇であつた。改修工事の音はもはやしていない。

「雇越しの業者とのやり取りはなかなか乙だったよ」

「……叔父上には裏切られた気分ですよ」

モスリーは少し頭を動かして叔父を睨んだ。白い頬にかかる乱れた漆黒の髪が艶っぽい。

「痛かったかい？ てつきりお前には青い血が流れているものだと思うっていたけど」

ハリアドルの優越から来る劣いを意に介さず、モスリーは身を起こして何事も無かったかのようにブラウスを羽織る。

「別に――痛くも痒くも」

「もっと酷くすれば良かったね」

ハリアドルの瞳が静かな光を宿して甥を見る。モスリーはそれを強烈な侮蔑の目で返すと、ソファから立ち上がり、戸口へ向かった。

「何処へ行くんだい？」

「シャワーを浴びに。その間に出て行ってください。もう御用はお済みなのでしょうから」

「本当につれない子だ。誘うような腰をしておいて」

「いずれ倒さねばならぬ敵が一人増えたようですね」

「おいおい、僕は君の叔父だ。最強の味方だよ」

「どうだか」

「ところで敵と言うのは？　まさかハデイルじゃないよね？」

言い当てられ、モスリーは振り返る。この叔父の勘の良さと来たら。心の奥底で思っていた事をついつかり口を滑らせてしまった。

「あの子、まだ兄離れ出来ていないようだったから……頼むからもう、『あの時』みたいな子供じみた真似はやめておくれよ？　後始末が大変だったんだから」

「彼次第ですよ。でも、叔父上の助言のお陰で最悪の事態は回避できそうな気がします——それに、あの時は私も彼も、身分の上下など結局の所関係のない少年でしたしね」

学院の中と言う狭い世界では、実際の身分の上下よりも結局の所、強い者が上に立つ。学院内において最も華やかな存在であったヴァリドゥー家の貴公子ハデイルは、身分と実力が伴っていた人物と言えるだろう。しかし少年モスリーは、そんな、そこにいるだけで無言の圧力を投げかけ、全ての生徒が道を譲ると言う彼に、一步譲るどころか微塵も譲る事をしなかった。無論、モスリーは空気が読めない訳ではない。公爵位である事を失念していても、己の存在が彼より下だとは思わなかったのだ。当然、二人は衝突に至った。

しかし今、モスリーはハリアドルの助言でヴァリドゥー伯爵家の現当主であるハデイルに、公爵位を掲げて彼女を引き渡して貰おうと考えている。地位と名誉で圧力をかけての求婚でも、何事も無く彼女を得られるのならそれに越した事はない。最善の方法だ。少年時代であればそんな卑怯な策を耳打ちする叔父にすぐに反発しただろうが、自分も大人になったものだ。

「それを聞いて安心したよ。それともう一つ。先祖伝来の求婚方法

はよしておいた方がいいよ。時代錯誤だし、酷い」

モスリーは今それに気付いたように目を瞋る。

「それも彼次第ですよ……」

微笑を浮かべ、モスリーは部屋を去った。

素足のまま廊下を歩きながら、モスリーは直近の予定を思い出す。明後日、モスリーは猫目子爵から交霊会に誘われていた。胡散臭いので気が進まないが、ヴィアーナが誘われているのを見て自分も出席する事にした。彼女が心配でならない。猫目ごときに大事な彼女を攫われたら。

「早く私の物になってください、ヴィアーナ。結婚したら屋敷に閉じ込めておきたい」

「姉上。貴方の息子は美味しくいただきましたよ。不感症でつれなかったけど」

モスリーが去った後、ハリアドルは大理石の暖炉の上に飾られた肖像画に歩み寄り、語りかけた。

「夢が叶いました。貴方への永遠に報われぬ想いに囚われるのは、今日をもって終わりにします。あの子には酷い事をしたけど、僕の気持ちも解ってください」

さて、とハリアドルはヴィアーナの石膏像の方に目を移す。

「呪法は解かせてもらうよ——砕いたらあの子が発狂しかねないから、さらさらの砂にしよう」

ハリアドルは石膏像に向けて手を翳すと、短い呪文を唱えた。

次の瞬間、石膏像は白砂糖のような砂となって静かな音を立てつつ崩れ落ちた。

その砂の山の中に、長い髪の毛が一本紛れているのをハリアドルは目敏く発見し、歩み寄って手に取る。

「赤い——ヴィアーナちゃんの髪の毛か？」

髪の毛をシャンデリアの灯かりに透かしたハリアドルの双眸が俄かに陰しくなる。

「何だ？ これも魔法がかかっているじゃないか——しかも強力な——そう言えばあの子は全身から魔法の気配がしていたな。ヴァリドゥー家の令嬢だけに、潜在的な魔力が放出しているのだと思っていたが……」

再び彼は呪文を呟く。魔法を解除する呪文だ。非常に短い言葉でそのような力を発動する域に達するまでには、才能ある魔術師でも相当の年月がかかる。国王に仕える宮廷魔術師モスリーでさえもその域には達していない。大魔導師ドル・ハリアドルは並の魔術師ではなかった。

そして紅の髪は、金色のそれに変わっていった。

どうして、お兄様

夢の中、ヴィアーナは目を覚ました。

朝の光の中、ヴィアーナがベッドから身を起こすと、胸の辺りではりぱり、と言う軽い音がした。見ると、薄い掛け布団がゆで卵の殻のように碎けていた。

掛け布団だけでなく。

部屋の中の全ての物——タンスも、クローゼットも、ベッドも。一切が白い石に変わっていた。

「何、これ」

これは夢？ 私はまだ夢を見ているの？ ヴィアーナは石の床に降り、カーテンが少し開いている窓辺へと歩む。カーテンまでが石に変わっていた。

ヴィアーナがカーテンを除けようとすると、石で出来たカーテンの布地は崩れてぱらぱらと床に落ち、それで窓が見えるようになった。

ヴィアーナは二階にあるこの部屋から窓の外を覗いてみた。するとどうだ。窓の外も全て、真っ白ではないか。敷地の地面も、井戸も、物干し竿も、遠くに見える畑も、森も、全て石膏で出来ているようだ。ただ事ではない。

早く目を覚まして。ヴィアーナ。なんだかぞっとする。これは悪

夢だ。

「私だけなの？ 石にならなかったのは」

心臓が早鐘を打ち始める。家の中の者はどうしている？ 父や母は？ 使用人は？ 階下に確認しに行かなければ。

ヴィアーナが踵を返したその時。白一色の中でとある色彩が目に入った。

石と化したベッドの上。ヴィアーナが先ほどまで寝ていたその枕元に、美しい青い薔薇があった。

ヴィアーナは目を覚ました。

（何て怖ろしい夢……）

ベッドから起き上がり、周囲を確認する。ベッド。鏡台。クロゼット。窓。全て本来の色彩、木材にニスを塗り重ねた重厚な飴色だ。

「夢の中の部屋は違う部屋だったけど、あれはどこだったのかしら」

まるで異空間を旅して来たようだ。目が覚めたと言うのに、何月の何日なのかすぐに思い出せない。窓の外は夕暮れ色だ。

そう。確か自分はハリアドルの授業を受けていたはずだ。彼に淫らな夢を見た事を打ち明けて、それから記憶が無い。まさか倒れたのだろうか。

「私、寝不足だったから……」

夢に出てきたモスリーから散々な目に遭って、昨日の睡眠は良質とは言えなかった。起きても眠気が続いていたのだ。無論モスリーのせいではない。

（私が彼の事を気にし始めているから……多分）

ヴィアーナは頬を染めつつ、いつの間にか夜着に着替えさせられている我が身を抱き締める。

彼から現実にあんな事をされようものなら。きっと自分は流されて身体だけでなく心までも、あつと言う間に彼に明け渡してしまうだろう。今さらだが異性と言うものが怖くなった。

「そしてお兄様は、助けてはくださらないのだわ」

それがこの家にとって相応しい相手であれば、ベッドの上でどのような目に遭おうと、兄は自分を助けてはくれない。それ以前に、夫婦の営みの内容を兄に語る事などとはいけない。誰に学ばずともそれくらいはヴィアーナにも分かる。

（お兄様から一人立ちしなければならぬ日がくるのね、もうじき）

ヴィーナは思い出す。先日、兄から魔法で小さくされた時の事を。出来る事ならば結婚せずに兄の引き出しの中で暮らしたい。そう出

来ればどんなにいいか。

「お兄様の瞳はときに怖ろしいけれど、いつもとても優しい。ヴィアーナはお兄様の真紅の瞳が大好きです」

誰もおらぬ部屋でヴィアーナは一人、切ない胸の内を言葉にしたその時だった。

扉を叩く音がした。誰だろうか。

「入っていいわよ」

夕食が載った盆を手に入ってきたのは赤いお仕着せの馬丁のキールだった。繰り返すが、彼は普段このような役目を負ってはいない。

「——ご夕食を持ってまいりました。ご気分はいかがですか？」

「キール。ありがとう。よく覚えていないんだけど、私一体どうしたの？」

「お倒れになられたんですよ。大魔導師様とのお勉強の途中でベツドで召し上がりますか？」

「いいえ、そのテーブルに置いて頂戴」

キールは夕食を小さなテーブルに置くと心配げな面持ちでベッドの方に歩んできた。夜着姿の令嬢の部屋へ男が入るなど決して許されない事だが、彼ならいい。

「先生には失礼な事をしてしまったわね。怒ってらっしゃった？」

「いいえ、大魔導師様はお嬢様を心配なさっておいででしたよ。多分睡眠不足だから安静にしておくといい、との事でございました。旦那様はもうじきお帰りになられると思います」

「昨日はしゃいで興奮して、良く寝付けなかったのね。きっと」

「お嬢様ったら子供みたいですわ。あの双子のお嬢様のお屋敷はいかがでした？」

「あの双子らしい、不思議なお屋敷だったわ。魔法仕掛けの迷路があったの。誰にも言わないでね」

「ええ、言いませんとも。魔法の迷路ですか——へえ。それは面白そうですね」

キールの黒い瞳が少し上を向いて夢見るように輝いた。ヴァール・ドゥナの民はそのほとんどが魔力を持っている。平民が持つ魔力は魔力甚大の始祖を持つ貴族階級のそれとは比べ物にならない微小な物だが、しかし平民出身のはずのキールが使う魔法はへっぽこではあるが実に多種多様であり、ヴァーナは密かに彼の魔力は彼の身分の上での平均的な水準をはるかに凌駕しているのではないかと思っていた。

実際、大魔導師ハリアドルはヴァリドゥー家に訪れるようになってすぐに、ささやかな魔法を使う人畜無害なこの馬丁に注目し始めた。最初は彼の持つあまりに善良そうな雰囲気のために訓練されたどこぞの間者ではないかと警戒の色を見せたほどだ。しかしヴァリドゥー家に雇い入れる者は全て執事が厳しく下調べを行って合格した者達だけなので、その点の心配はない。

「キール、私が言うのも何だけど、貴方、本気で魔法の修行をしたかどうかしら。先生が貴方を『イグナ・ダヤ』に入りたいとおっしゃってたわよ。見込みがあるって」

「ええっ？ 俺を？」

「お兄様に相談するから」

「とんでもない、あんなお貴族様の坊ちゃんかわんさかいる学校――馬の世話で充分ですよ。お給金も充分過ぎるほどいただいてますし。俺は高望みはしない主義です」

俄かに及び腰になり、両手を振りながらキールは断固拒絶する。

「キールったら、逃げないで聞いて頂戴よ。うちの馬が貴方に懐くのも、貴方の魔力のせいだって先生がおっしゃってたわ。すごく珍しい性質の魔力だそうよ。あのハリアドル様が是非にと言ってくださっているのだから、勉強して伸ばさない手はないわ。それにお兄様が後ろ盾になれば、貴族の師弟の中で勉強したって誰も文句を言う者はいないはずよ」

「もうよしてください。立場を弁えて生きていくつもりですから――それに、ここに小さな幸せをみつけている事ですし」

「小さな幸せって？」

キールの動作が凍り付いたように止まる。次の瞬間、彼の顔は耳まで沸騰した。

「い、今は気にしないでください——失礼しました。それでは」
そう言うとキールは逃げるように、途中壁にぶつかりそうになりながら部屋を去って行った。

どうして急におきれいに、と言う彼の微かな呟きは、しかしまだ卵の殻の中で夢見るヴィアーナには聞こえない。殻はハデイルの守護以上に、世間の様々な情報を見事に遮ってきた。今はもうひび割れているが。

「キール……？」

（面白い子ね）

馬丁の少年の想いに気付かずヴィアーナはきよとした顔で彼の背中を見送った。

その後ヴィアーナが夕食を終えた頃、娘が目を覚ましたと聞き及んだ母ヴィアーナが心配した面持ちでヴィアーナの部屋を訪れ、しばらく母娘で語り合った後、就寝の時間となった。

ハデイルとは顔を合わせぬまま、シャワーを浴びたヴィアーナがベッドに潜り込んで本格的な眠りに入ろうとした時だった。

扉を叩く音がする。

「誰？ こんな時間に」

（もしかしてお兄様？）

脱ぎかけのガウンを羽織り直し、枕元に点した就寝前の最後の照明を頼りに、ベッドから降りて扉を開ける。案の定、ハディールの姿がそこにあった。心配顔だ。もう大丈夫なのだから、自分から兄の元へ行けば良かった。

「ヴィアーナ。倒れたと聞いたが」

「もう大丈夫よ。どうぞ、中へ入ってらして」

ヴィアーナが部屋の中へ誘うと、ハディールは躊躇しつつも薄暗いその中へ入った。まだ彼は寝間着ではなかった。

「先生が、お前が倒れたのは寝不足のせいだと言われていたらしいが、どうも心配だ。こんな事は始めてじゃないか」

ハディールは鏡台の椅子を引き、背もたれを正面に腕を組んで座る。真紅の貴公子は意外と行儀が悪いのである。ヴィアーナは向かいにあるベッドにちょこんと腰掛けた。

兄はもうすっかりいつもの兄のようだが、試しに確認してみようか。

「お兄様に甘え過ぎるのをやめたからかもしれないわ。ヴィアーナはもう一人ぼっちで頑張り始めているから。色々な人に出会ったり」

何、とハディールは顔を上げる。

「……少し厳しく言い過ぎた。今まで通りでいい、お前には私がいる……我が家の赤い薔薇が世間から甘ったれで礼儀作法もなっていないなどと言われたら、私が黙らせる」

そう。いつも折れるのは兄の方。どんなに厳しくされても、また元だ。ヴィアーナは心の底から安堵した。うれしくて足をばたばたやっってしまう。スリッパが飛んで行きそうだ。

「お兄様ったら。もう大丈夫だから安心して。それに昨日は楽しかったんだから。そうそう、明後日はロアン子爵の交霊会に誘われているの。行っていいかしら」

「交霊会だと？」

ハディールはうるんな目をする。

「子爵は靈感が強いんですって。見えないものが見えるってどんな感じがしらね」

「ロアンと言うと、あの猫目か——駄目だ。そんな胡散臭い集い。第一私は霊なんてものは信用せん。お前を誘う口実だ。それにしてももう少しましな催しに招待すればいいものを。とにかく駄目だ」

「……わかったわ」

兄に駄目だと言われても、ヴィアーナは母に甘えて許可を得て行くつもりだった。普段から交流のあるロンドデリルの双子も一緒に行くと言えば大丈夫だろう。折角一人で遊びに行っても良いとの許可が出たのだ。色々な体験をしたい。

「ん？ 妙に聞き分けがいいじゃないか。怪しいな……」

ハディールは疑惑の目でしおらしい表情の妹を窺っていたが、次

の瞬間、彼の真紅の瞳が驚愕に見開かれた。

「お兄様？」

兄の異変に、ヴィアーナは声をかける。彼は無言のまま椅子を離れると、ただ事ではない様子でこちらへ近付いて来た。どうしたと言うのだ。

「何だこれは」

怖ろしい声で指摘され、ヴィアーナはようやく気付いた。首筋にあった無数の青あざ。それを隠していた白粉がシャワーを浴びて落ちてしまったのだ。

「えっ……あっ……」

「何だと聞いている」

鬼気迫る表情のハディールは、ヴィアーナに掴みかからんばかりの勢いで彼女のガウンを開きながら問う。ヴィアーナは開かれた胸元を隠さずに頭を小さく振りかぶりながら戸惑いの表情を見せた。

（どうしてお兄様はこんなに怖ろしい顔をしているの？ 大した事はないのに）

「どこかに打ち付けたみたい……で」

「嘘を吐け！」

「これを付けられたのは昨日か？」

「えっ、いいえ、昨日は無かったわ」

ハディールは妹を放すと、明らかに怒っている様子でバルコニーに続く窓辺へ歩み、カーテンを乱暴に開いて外を覗く。鷹のような非常に鋭い目でバルコニーとその向こうの敷地を見回す。ここは屋敷の二階である。

「高い塀を越え、敷地中に張り巡らしている我が結界の網を抜け、妹が眠るこの部屋へ侵入出来る者など果たしてヴァール・ドウナにどれほどいるだろうか——髪長姫が自らその髪を差し出して男に這い上がれと言わぬ限りは……そう言えばメモリなにがしなる娘の部屋にも窓から男が忍び入って……」

「お兄様、何を言っているの？ 変よ」

侵入者が妹の首筋に打ち身を作ったと思っているのだろうか、兄は。いくら何でも心配し過ぎだろうに。

ヴィアーナはベッドからとん、と降り立ち兄の元へ駆け寄った。窓の方を向いていたハディールが振り返る。

「思いたくはないがヴィアーナ。まさかあの悪書の影響で部屋に男を——」

そこでハディールは言葉を切った。

窓からの月明かりを受け、兄を見上げるヴィアーナの、その流れる真紅の髪の艶やかさ。悩ましさ。美しい髪に包まれた卵型の白い小さな面に輝く彼女の二粒の紅玉は今、瞬く星のごとき煌きを放ち、

艶めく紅い唇はあどけなく問うような形に開かれている。頭を支えるのがやつとのような、白く儂げな首筋の下、いかにも柔らかそうな二つの丘は魔術師から受けた無数の接吻の跡と共に微かに上下していた。見ようによつては、さあ、私が欲しければ貴方もここに所有の印を、と誘っているようにも見える。彼女は月夜の晩に窓辺に現れる無垢な乙女の姿をした夢魔であろう。手を出した男は命を吸い取られて翌朝には冷たくなっているのかもしれない。

「どうしてこんな、急に……」

ハディールは何があらうと滅多に崩れない秀麗な顔を引き攣らせ、妹に恐怖するように更に窓辺の方へよろりと後退した。

「お兄様？」

「く、来るな！ それ以上——」

やっぱり、兄は私の事が嫌いになったのだろうか。だとしたら何故。

「お兄様どうして……やっぱり、私があ夜、あんな事をお願いしたから？」

迷惑。それとも、先日之夜を思い出したくないのか。

「はつきりと言ってよ——」

ヴィアーナは一步前に歩み出て言い放つと、兄の胸へ飛び込んだ。

「お前は——」

ハディールは猪のように突進して来た妹を抱き止める。ハディールの背が窓枠にぶつかって、窓が大きな音を立てた。危うくガラスが割れる所であった。

「おにいさ……？」

兄に寄り添ったヴィアーナはふいに、その下の方に何やら違和感を感じた。何かにぶつかるのだ。そう言えばあの夜も感じた。

「お兄様、何かここに」

兄は一体このような場所に一体何を入れているのだろうか。使い魔でも入っているのだろうか。

「それ以上言ってくれるな……ヴィアーナ」

情けない声と共にうなだれたハディールは、ややあつて妹を抱きしめた。自身の高まりを知らせるように腰を引き寄せ密着させて。体格にかなりの差がある二人である。彼が加減せずに力を入れればヴィアーナの細腰は折れてしまいそうだった。

青い窓辺に一つとなった影は微動だにせず、そのまましばしの沈黙が流れる。

「……ヴィアーナ？」

始めに口を開いたのはハディールだった。妹を抱き締めたまま、気遣うようにその耳元にそつと声をかける。

「お兄様……」

どこを見ているか判らない呆然とした瞳で、ヴィアーナは兄の胸から顔を上げた。

ヴィアーナが顔を上げると、そこには狂おしい表情の兄がいた。

「確かめたい……確かめさせてくれ。お前が何も奪われていないか。そうしなければ、私は眠れない」

「奪われて……？」

唐突に昨日の記憶が蘇る。魔術師モスリーに唇を奪われた事を思い出す。兄には言えない。あの夢の内容も。

ヴィアーナが考えあぐねている間、ハディールは無言を言わせぬ手付きで彼女のガウンを脱がせにかかった。

「ちょ、ちよつとお兄様!？」

気付いて抵抗するが、もう遅い。ガウンは床に落ち、夜着のボタンが外されようとしていた。

「だ、駄目よお兄様、いやっ!」

第一、何を確認すると言うのか。ヴィアーナは兄の手を押し除けようとしたが、駄目だった。抵抗すると布地が軋む。下手をすれば夜着は裂けてしまうだろう。兄は本気だ。

そしてとうとう夜着も、ドロワーズさえも腰紐も解かれ、同じく

足元に落ちた。無理やり衣服を剥ぎ取られて一糸纏わぬ姿を兄に晒す事となったヴィアーナは、俯き、室内の微かな明かりと窓の月明かりに怯えるように両手で自身の身体の隠すべき場所を覆う。

「お兄様…… どうして…… どうして… うふ、ふえうう」

悲しくて恥ずかしくて、ヴィアーナの瞳から涙が零れ落ちる。まさか兄がこんな事をするなんて。

「手を退かせ」

言いながらハディールの手がヴィアーナの身体に触れる。

「やああ…… ああっ」

ヴィアーナは兄の手から逃れようと後退した。しかし、逆にベッドに押し倒される事態となった。

「お兄様っ！ いや」

溶かした紅玉が零れて流れ出すようにヴィアーナの髪がシートに散り広がる。ベッドへ乗り上げたハディールがそこへ覆いかぶさる。

「首筋だけか。他に跡がないか——見せろ——全て」

余裕のない口調だった。ハディールは妹の全身をつぶさに確認していく。しかし、首筋と胸元以外にその跡は見当たらなかった。枕元の薄明かりで反射するほどに彼女のその肌は白い。

妖しい時は過ぎて。

始末を終えた彼は、しどけない姿で安らかに眠る妹に布団をそつと掛けてやると、逃げるように妹の部屋を後にした。

交霊会

ヴィアーナはハデイルが地上へ出立したのを見届けると、早速母ヴィアネーラの部屋へ向かい、彼女にロアン子爵の屋敷で行われる交霊会へ参加したいと言う旨を告げた。

最初は難色を示していたヴィアネーラだったが、ロンドデリルの双子も一緒だと聞くと渋々承諾したのだった。

「貴方がどんどん、わたくしの手から離れていくような気がして、少し寂しいわ」

窓辺で刺繍していたヴィアネーラは手を止め、紅い睫毛に僅かな憂いを載せて娘を見上げた。

「お母様。そんな事は」

第一、正式に公の場に出たわけではない。友人の家で知り合った者に招かれて遊びに行くだけの事だ。そのようにして世界は広がっていくのだろうが。

「だけど、ずっとこのままでいさせるわけにもいかないとは思っていました。何と言っても貴方は年頃なのだから。もうそろそろ正式な形で表に出さなければならぬ——」

「お母様、私、もうその資格があるかしら」

「まだまだだと思う所もあるけれど……貴方の幸せを考えるなら、完璧を求めてその時期を逸するのは愚の骨頂と言つもの。ハディー

ルは何と言つか分かりませんが、頃合ですね」

はあ、とヴィアーナは息を吐く。彼女が手を広げるとヴィアーナがその胸に飛び込むのは同時だった。

「良い殿方の元へ嫁げるように。わたくしは貴方の為に手を尽くします」

母の言葉に、ヴィアーナの胸は切なく締め付けられた。

私がいなくなって、夜に悪い夢を見たりしたら。

——どうするのお母様。ねえ。

母の部屋からの帰り、ヴィアーナは廊下の突き当たりの窓から階下の真紅の庭を覗く。

今朝ヴィアーナが庭先で兄を見送っていた時、側にあった石膏像が倒れかかって来ると言う事があった。咄嗟に兄が庇った為に無傷だったが。

ヴィアーナは思う。暴風でも吹かぬ限り、石像がいきなり倒れる事などあるものだろうか。

「……不吉な予感」

真面目な声で呟いた後、ヴィアーナは直前までの自身を笑う。くだらない。古くなった石像の台座に亀裂でも生じていたのだろう。

その件はもうよしとして、咄嗟に駆け寄って庇って抱き締めてくれたハディールの顔がまだヴィアーナの脳裏に焼き付いていた。灼き付いて、離れない。

その刹那の時、ヴィアーナの世界は兄と自分だけになり、説明し難い高揚感に包まれた。兄と二人、そのまま幻の雲の高みまで飛んで行きそうだった。

ハディールはヴィアーナに何か語りかけようとして止め、今まで腕の中にいた妹を突き放すと、踵を返して地上世界へ発ったのだった。

再び繰り返す朝の光景。しかしヴィアーナは兄の背に何故とは問わなかった。彼の狂おしい瞳と、日に日に哀愁を帯びるその背中が充分だ。

男女の営みの事すら、誰に詳しく教えられずとも実に短期間で分かちかけてきていたヴィアーナであった。同時に他人がそれと見て分かるほど日に日に魅惑的になっていた。卵の殻を自ら突いて完全に外気に触れるのも時間の問題であろう。

（お兄様が赤の他人だったなら良かったのに）

兄に対するこの感情は、ひょっとしたら奇異なものなのだろうか。もはや、この身体を奪ってくれても一向に構わない。初夜の褥で、花婿から汚れていると罵られようと、首を撥ねられて実家に突き返されようと——花嫁が純潔である事を重要視する貴族の間で、過去

にそのような事例があつたらしい。花嫁を害した方の貴族は罪に問われない。すでに摘み取られた花嫁を贈られたと言う、侮辱への正当なる報復だからだ。そして花嫁の家は社交の場から姿を消す事になったと言う。

そこでヴィアーナは考え直す。駄目だわ。このヴァリドゥー家が世間に顔向け出来なくなってしまうわ。だから駄目。それは子々孫々まで被害を被る暴挙と言うもの。

父親のいないヴァリドゥー家である——ヴァリドゥー家の先代当主であるヴィアーナの父は、地上世界で強力な力を持つ魔法使いと対決して相打ちとなり命を落としたと言う。ヴィアーナには父親の記憶がなかったが、応接室の一つに彼の肖像画があり、たまに見上げて心で語りかける事があつた。父の、赤子ならば見ただけで泣き出すような厳格な顔は、ハディールとどこか似ていて、いずれ兄もこのような揺るぎない威厳を纏うのかもしれないとヴィアーナは密かに恐れた——いずれ兄ハディールか、または田舎で暮らしている叔父あたりがヴィアーナの婚約を取り決めるのだらう。もしくはこれから先に出会うヴァリドゥー家とほど良く釣り合った身分の貴公子に求婚されるのかもしれない。

そうなればもう、兄と妹の暮らしはそこで終わってしまう。真紅の薔薇咲くこの屋敷ともお別れなのだ。

振り返り、ヴィアーナは廊下を鬼ごっこする幼い頃の自身と兄の姿を幻視した。

午後になり、ヴィアーナはロアーン子爵の屋敷を訪れた。約束の時刻よりも少し早く到着してしまった為、ロアーンは仕度に追われている所であった。

仕方なくヴィアーナは庭先に出てベンチに腰掛けた。庭ではロアーンの弟達が庭球をして遊んでいたのでヴィアーナはその様子を眺める事にした。二人の弟達の髪はロアーンに似て蜂蜜色だ。猫背まですいているが、それはやはり彼らの始祖が大いなる魔力を持った猫であつたからだろう。コートの中を動き回る彼らの髪が、人工の陽の光を受けてきらきらと輝いていた。

「おや、そこにいるのはヴィアーナじゃありませんか？」

背中に声がかかり、ヴィアーナは振り向く。庭に面した屋敷の木陰の窓から顔を覗かせた、宮廷魔術師モスリーの姿があつた。彼も招待を受けていたのだ。それにしても、急に視界に入ると心臓に悪いほどの超常なる美貌だ。彼を急に見た者の中には思わず悲鳴を上げてしまう者もいるかもしれない。少し離れた場所で見ようがそれは変わらない。何しろその陰影からして見る者を夢うつつの境地に誘う叙情的な詩のようで、やはり美し過ぎる。

「モスリー」

ベンチから立ち上がり、ヴィアーナは笑顔で木陰の彼の側へ寄る。

そしてはたと思い出す。何故彼に笑顔なのだ。先日彼から無理やりされた接吻の事。そして、あの淫らな夢の事を忘れてはいないか。後者は彼のせいではないにしても、少し警戒すべきだ。

ヴィアーナは務めて表情を固くして彼を睨み付けた。

「ごきげんよう」

「どうしたのですか？ 急に表情を険しくして」

モスリーにはまったく悪びれた様子がなかった。彼の口元はいつものように、得体の知れない微笑を湛えている。

「まだあの事、許したわけじゃないんだから」

ヴィアーナは、もっと、責めるように彼を強く睨み付けようと思ったが、やはり直視出来ずに彼から目を反らしてしまった。悪いのは自分ではないのに。

「……もしや私の事が気になり始めているのですか？」

「そ、そんな事……っ」

声が動揺してしまう。昨晚見た夢の何とふしだらだった事。あれが自分の胸の奥底にある願望だとしたら。

「だとしたら、光栄ですよ、ヴィアーナ」

ヴィアーナとモスリーが窓越しに語り合っている時、庭で行われていた庭球の球が、ふいにヴィアーナの元まで飛んだ。使用人が球を探しにやって来たのをヴィアーナは気付かない。

歳若い男の使用人は、窓辺の青年と語らうヴィアーナの後ろ姿を見ると、好色を起こし舌なめずりをした。無論彼は赤い髪とドレス

の示すヴィアーナの身分を知らない。ロアーンの家には貴婦人のごとく着飾った高級娼婦も出入りしていたので、彼は目の前にいる娘もおそらくその類だと勝手に決め込んだ。

使用人はボールを探すふりをしながらヴィアーナのドレスに近付くと、実に慣れた鮮やかな動作でクリノリンで広がった彼女のドレスの中へと入り込んだ。

「ひっ」

ふいにドレスの中に感じた気配に、ヴィアーナは思わず小さな悲鳴を上げる。

「どうしました？」

「い、いいえ……」

何だろう。ドレスの中に動物でも入ったのだろうか。ドロワーズの上から何かが触れる感触が伝わる。

「あっ」

両の太腿を執拗に撫で擦る——これは手だ。人の手。おそらく男の。

「や……っ」

悲鳴を上げたいが、ヴィアーナは辛うじてそれを抑えた。モスリ―に助けを求めるくらいなら。

男の手は下着の上からヴィアーナの尻を撫で、好き放題に蹂躪する。

（い、いや、やめて——）

ドレスの中の慮外者を足で蹴って追い出そうとするが、しっかりと捕まれている。やがてドロワーズの合わせが開かれる。

びっくり、とヴィアーナは背をしならせる。

「ひ……っ」

「ヴィアーナ？」

モスリーが片眉を吊り上げて怪訝な顔をしている。ヴィアーナは窓枠を自然に掴んでモスリーに悟られぬように必死にドレスの中で展開する責め苦に耐えた。

「ああ……っ、ん、く……っ」

手の震えを隠そうと、窓枠に手をかけた拳を握り締める。もう大声で叫びたい気分だ。助けてモスリー。でも貴方になんか。

「ひい、い——」

（お兄様ッ！ 入って——）

「んっ、や」

「青ざめたり、赤くなったり……具合でも悪いのですか？」

「い、いいえっ」

必死の否定に、モスリーの瞳は俄かに鋭くなった。

「もうすぐ開始の時刻だそうですよ。中へ入った方が良いのでは？」

モスリーがやや声高に告げると、ドレスの中の男は腰を低くして逃げるように去って行った。ヴィアーナは責め苦から解放されてほっと一息吐く。モスリーからはドレスの裾は死角になっていたはずなので、一切悟られてはいまい。

いよいよ交霊会の時刻となった。

ロンドデリルの双子を含む十数人の出席者はこの会の主催であるロアーンの説明を受け、部屋の中央に置かれた白樺の簡素な造りの円卓^{テーブル}に用意された椅子にそれぞれ着席した。

テーブルは交霊用もので、誰かが触れればぐらぐらと揺れる、不安定な三脚であった。ロアーン曰く円卓を囲む出席者の中に混じって座る霊媒師の女性の問いかけに、テーブルが勝手に動いて答えるのだと言う。

ロアーンの隣の席を勧められたヴィアーナの心は重かった。すっかり青ざめてしまった顔を頬紅で無理やり明るくしていた。先刻受

けた辱めに、使用人の躰がなっていない子爵——ヴィアーナが辱めを受けている間、ロアーンは会場の準備に忙しく、また、彼の弟たちは庭球に夢中になっていたのだからそう推測できる——を糾弾したい気持ちは山々なのだが、ヴァリドゥー家の令嬢と言う立場上、ヴィアーナはそれを口にする事が出来なかった。耐え難い屈辱であったが、そのような話を他人にしてしまえば、いつどこで漏れ広がるか分からない。外聞が悪すぎる。

悔しくて泣く事すら出来ないが、今は我慢だ。帰ったら兄に相談しよう。

（いえ……お兄様に相談しても、迷惑とお思になるかもしれないわ）

ロアーンの家は子爵位を持っている。子々孫々まで公の場で顔を合わせるであろう間柄なのだ。揉め事はなるべく避けなければならない。

今日受けた屈辱は、忘れるしかあるまい。ヴィアーナが心の中で溜息を吐いたその時。

遅れて漆黒のローブに総身を包んだモスリーが部屋に入ってきた。彼の神秘的な美貌と黒と言う色が持つ圧倒的な存在感に、一同が騒然となる。

「遅くなりました」

遅刻した彼をヴィアーナは不思議に思う。彼は一体どこへ行っていたのだろう。もうすぐ時刻だと自分で言っておきながら。

「お前の椅子など用意していないぞ」

第一招くつもりもなかった、とロアーンが不快を露に、言葉を投げる。

「結構です。ここで拝見させていただきます」

モスリーは壁に歩み寄り、華麗に身を翻すとそのすらりとした体躯を壁に預けて腕組みした。ロアーンは糸目のままテーブルの出席者を見渡し、どうあっても人目を引く魔術師の所作に鼻を鳴らした。

「では全員揃った所でご一同、始めますよ！」

こちらに注目しろとばかりに開始を言い放つロアーンの声は神経質に裏返っていた。

ロアーンの合図で使用人が一斉に暗幕を引き、部屋のいたる所で蠟燭に火が点された。たちまち怪しげな雰囲気が出来上がる。

ヴィアーナは胸の鼓動が早くなるのを感じた。やはり、兄の言う事を聞いていれば良かった。来るべき場所を間違った。少し怖ろしい。

モスリーが案じるように――注意深く観察しなければ、誰しも彼を無表情だと思うだろう――ヴィアーナの様子を見つめているのを、彼女は知らない。

「では皆さん、テーブルの中央に手を重ねていってください――もう来てます。何か来ている感じがします」

「霊ですか？　霊がもう来ているのですか？　子爵」

ヴィアーナの右隣の席に座る、神秘主義の白髪の老人が神妙な面持ちでロアーンに訊く。

「はい。このような会には沢山の靈魂が集います。私にはそれが分かります。今しばらくしたら騒霊現象が起こるかもしれません——あ、今」

突如、爆竹が爆ぜるような音が鳴り響いた。

「きゃああっ！」

ヴィアーナは驚いて耳を塞いだ。斜め向かいの席にいるミランとユランは同時に身を寄せ合っている。何だこの音は。どこかで何か爆発しているのではないのか。

「大丈夫です、ヴィアーナ嬢。ただの騒霊現象です」

ヴィアーナの左隣に座るロアーンが彼女に声を掛ける。

「騒霊……？」

「靈感の強い私がいいますので安心してください」

暗闇の中、ロアーンの糸目は見開かれていた。蜂蜜色をした瞳の虹彩は、猫のそのように縦長だ。

霊の見える者はいざとなったら霊の退治も出来るのだろうか。暗闇の中でヴィアーナは隣に座るロアーンが存在が頼もしく思えた。

「さあ、手を重ねて」

彼に促され、テーブルの中央、すでに他の出席者が重ねた手の上に、ヴィアーナは手を置く。その上に更にロアーンの手が重ねられた。

「小さな手だ」

ロアーンは感動したように呟いた。一瞬、ヴィアーナに覆い被さる彼の手に力が込められる。

「それでは霊媒師殿。用意はいいか？」

着席した中で唯一手を重ねていない人物である、細やかな模様の入った大きな布を頭から被り、沢山の首飾りを付けた女がロアーンに頷く。

霊媒師の女は手を擦り合わせてぶつぶつと何か唱えると、やがて顔を上げた。

「何か霊に質問がある方はどうぞおっしゃってください。はいなら一度、いいえなら二度、テーブルが揺れます」

霊媒師は一同に語りかけた。では私が、と先ほどの白髭の老人が手を挙げる。

「こここの出席者と関わりのある霊は今、来ていますかな？」

霊媒師は再び手をすり合わせてぶつぶつ何かを唱える。

がたり、と一度テーブルが傾ぎ、床に音を立てた。

「誰かと関わりのある霊が来ているらしい——それは誰だ？」

ロアーンはやや引き攣った顔で霊媒師に問う。

突如、霊媒師は脱力したようにうなだれた。が、次の瞬間。

霊媒師はかつとその目を見開き、ヴィアーナを睨むと指差して叫んだ。

「——私は認めない、こんな出来損ないの娘！ おまけに恥知らず！ もうこれ以上ヴアリドゥーの真紅を纏い続ける事は許さない！ 不幸のどん底に落ちるといい！ 呪ってやる呪ってやる！」

先刻までの霊媒師の声とは明らかに違う。積年の恨みを吐き出す呪詛のような声の響きに、ヴィアーナはあまりの怖ろしさに身体を震わせた。声が出ない。

ロアーンが腰を浮かせてうろたえる。

「おい、台本と違うぞ」

うつかり口走ったロアーンの言葉に一同が騒ぎ出す。

そんな中、ヴィアーナは意識が遠のくのを感じた。椅子から転がり落ちてしまう。

「ヴィアーナ嬢！」

ロアーンの声。

ふいに優しい手が支えてくれた。誰？ そのままふわりと抱き上げられる。

「――汚らしい手で無垢な彼女に触れないでいただきたい」

モスリーの声が降ってきた。彼は少し怒っている。

「もう我慢も限界ですよ」

彼の強い口調を聞くのは始めてだ。ヴィアーナはそこで意識を手放した。

「汚らわしいだと？ 無礼だぞ貴様！ たかだか魔術師の分際でこの私に――世間が今時分ちやほやするからと言って勘違いするな！ 身分を弁えろ！」

「何か言われましたか？ 子爵。今、非常に耳障りな言葉が聞こえたような気がします」

ヴィアーナを腕に抱えたモスリーは静かに恫喝した。口元は常のごとく笑っている。しかし、紫の瞳は氷の刃のように怖ろしく鋭利な輝きを放っていた。

モスリーの瞳を見たロアーンはひっと声を漏らし、次の瞬間、威圧に負けた自らを恥じるように怒気を露にした。

「き、貴様、気障もいい加減に——この私に向かって！」

ロアーンが椅子から立ち上がったその時。

「いい加減になさるのは子爵の方でしょうに」

白髭の老人が口を挟んだ。

「先ほどから聞いていれば、何と言う無礼な口のききよう——身の程を弁えられよ。椅子もお勧めせぬとは」

「な、何を言っているんです男爵。こいつはただの宮廷魔術師ですよ、魔法使いに毛が生えただけの。世間が騒いでいるだけで、実の所、地位も名誉も何も無い。これ以上こいつをつけ上がらせるような事は言わぬ方がよろしいですぞ！」

ロアーンの暴言に、老男爵はみるみるうちに青ざめた。

「なんと、なんと怖い者知らずな——それは単なるご酔狂。今とさめく『黒の魔導卿』が、実は国王陛下の御従兄にしてシメンドウール公爵家の当主であらせられる、と言う事は、市井の者ならともかくとして、貴族ならばどのように愚昧な者であつてもほんの少し考えれば分かる事ですぞ」

「な、何……！？ シメン……ドウール……だと……あの青薔薇の……蛇の王の一族……とうの昔に絶えた家だと思っていたが……たしかに、紫眼は王族とその縁戚筋しか持ち得ぬ。まさか、そんな！」

ロアーンは床に腰を抜かして怯えたように叫んだ。

「『青ざめし薔薇の紋章。かの家の逆鱗に触れし者はその身たちまち石に成り果てる』——愚かな」

「男爵、もうその辺で」

「差し出がましい真似をお許しください、閣下。ああ、貴方様は本当に、御母上にそっくりで……私の心が再び——いつそ石に」

モスリーの美貌に当てられたのか、老男爵はそこで絶句していつそ俯き、身体を震わせた。

「彼女は私が家まで送ります」

モスリーはロアーンを傲然と見下ろして言った。

「し、しかし——」

「貴方には任せられません。阻むならば貴方を含めここにいる全員を石にします。躊躇しませんよ」

不穏な発言にその場にいる全員が凍り付く中、ヴィアーナを抱いたモスリーは会場を後にした。

「貴方きたら——やはり来て良かった。可哀想に、こんなに青ざめて……お化粧で隠しているようですが、私には分かりますよ。愛していますからね。兄上はよく許しましたね。こんな集いに参加するなど……猫目の不埒な思惑が見え見えで、私は終始腸煮えたぎり、すぐにでも貴方を会場から攫って行きたい思いました。それにしてもあの時、あんなに辛そうな顔をして、貴方は一体何をされていた

のでしょうか……どうして私に助けを求めなかったのですか。それが何より口惜しい。敵は討ちましたよ。あの下郎、とうとう口を割りませんでした。……後で直接貴方に問いたさなくては」

私の花嫁によくも、不快千万、とぶつぶつ怒りを吐き出しながら、モスリーは黒塗りの馬車に乗り込んだ。

「もちろん私の家に寄り道して行きますよ。何と言っても『生身』の貴方なのですから。この機を逃さぬ手はありません」

ロアーンの屋敷の庭先、人のいない静かな庭球の競技場に、何かに怯えて叫んでいるような下男の石像が一体、取り残されたように佇んでいた。

魔眼の貴公子

ヴィアーナは夢を見ていた。

気付くと、目の前に少女の後姿があった。

闇の中でも分かる、つやつやとした赤い髪。まるで溶けた紅玉がどろりと流れ出したような。

少女は一目見てそれと分かるほどの極上の絹の真紅のドレスを着ている。背丈はヴィアーナの胸のあたりほど。貴方はだれ。

「こちらへ来て」

少女は振り返らずに、ヴィアーナを促す。

少女に続きながら見渡すと、ここはヴァリドゥー家の庭先だった。月が出ていないが、夜だろうか。樹に吊るされたカンテラが所々でほのかな明かりを灯している。

弾む足取りの少女は真紅の薔薇の植え込みに挟まれた石畳の小道を通り抜け、葡萄酒の泉水の躍る紅玉の水盤を過ぎて東屋へ向かう。ヴィアーナは歩調を速めて彼女の後を追った。

「じい、ほら。見て御覧なさいな」

得意げに囁いて、少女は東屋のベンチの背の部分に刻まれた文字

を示す。ヴィアーナと。それは魔法の呪文に使われる古代文字である。

それはいつからあっただろうか。ヴィアーナは覚えていなかった。

「お兄様が彫ってくださったの。学ばれたばかりの古代文字で。ここは薔薇のアーチも、国王様がおられるきらきらと光るとんがった屋根のお城もよく見える、わたくしの特等席だからとおっしゃって」

「お兄様？」

「わたくしのお兄様よ」

当然のように少女は告げる。しかし、ヴァリドゥー家には兄も妹も一人だけ。

「貴方はだれなの？」

「ヴィアーナよ」

「ヴィアーナ？ ヴィアーナは私よ」

「貴方がヴィアーナですって？ 笑わせないで。よくそれでヴァリドゥーの真紅の姫の名を名乗れるものだわ」

少女は幼いながらも高度な嫌味を織り交ぜて軽やかに笑う。

「わたくしはもうこの歳でお母様から、どこへ出しても恥ずかしくない娘だとお墨付きをいただいたわよ——それに比べて、貴方と来たら、何をやっても駄目じゃない。それに、品格も何もあったもの

ではないわ。真紅の薔薇の貴婦人と謳われたお母様から何一つも学んでいやしない。まあ、こう言ったものは一昼夜で仕上がるものではないから、仕方ないにしても」

悔しいとは思いつつ、ヴィアーナは反論出来なかった。少女の凜とした声、美しい発音、空気を瞬時に洗練させる峻烈とも言える気品は確かに一昼夜で仕上がるようなものではない。少女はもはや、幼いながらもヴィアーナに至らないと説教が出来るほどの、完成された淑女である。

「それでも頑張っているつもりよ」

「無駄よ。魔法も使えない、何をやっても駄目な貴方になんか。ヴィアーナになれないのなら、いつそヴィアーナでいる事をやめておしまいなさいよ。貴方が中途半端でいるものだから、お兄様の苦悩は増すばかり。本当にお可哀想で……見てられないわ。だから、出てくるつもりはなかったけれど、こうして」

「どう言う事？」

「――扉を開く『鍵』はお兄様が持っているわ。貴方が強く、死ぬほどの思いで本当に強く望めばきっと」

少女はやつと振り向いた。

ヴィアネーラを彷彿とさせる鼻筋のすんなり通った高雅な顔立ち。その中でも目尻の上がった切れ長の真紅の瞳はハデイルのものに良く似ている。血のように紅い唇。全てが他の追随を許さぬほどの。

少女はヴィアーナがこのようにありたいと願う真紅の姫君そのも

のの姿をしていた。

「お願い。公爵様の所へは行かないで」

揺れる瞳は切なる思いを秘めてヴィアーナを見上げる。さっきはごめんなさい、と微かに呟いて。

「わたくしの事はもう、忘れるように夢の中でお願いするから。だから」

——お願いよ。

「ここは……」

徐々に視界がはつきりして行く。

見慣れぬ格子天井に、ヴィアーナはここが自分の家では無い事に気付く。

「気が付きましたか」

優しい声は、しかし兄の者ではない。覗き込んで来たその顔に、ああ、これは夢から覚めた夢かとぼんやり思う。

ひよっとしたら悪夢なのかもしれない。不吉な予感さえ抱かせる、全くと言っていいほど非の打ち所のないその造作。

「モス……リー……」

名を呼ぶと、彼は痺れたように目を細め、覗き込むのを止める。

彼はヴィアーナが横たわる寝椅子の脇に腰掛けていた。すらりとした長い脚を組み、手を膝の上に重ねて。ずっと見守ってくれていたのだろうか。

それにしても。ヴィアーナは心の中で刮目せざるを得ない。彼は所々で金箔の波打つ紫檀や桃花心木マホガニーの重厚かつ高級な調度類の中に身を置きながら、自らの香り立つ気品でそれらを気負う事なく従えているのだ。王侯さながらに。

目の前の青年の纏う気品はヴァール・ドーナでも一、二を争うほどではなからうか。まだ殿方には数えるほどしか会っていないが、ヴィアーナは元より兄と言う素晴らしい貴公子を知っている。

「貴方は子爵の家で気を失ったのですよ。それで私の家まで連れて来たんです。すぐに休ませてあげたかった。私の家の方が近かったもので」

モスリーは周到に用意されていた台詞のように淀みなく告げた。

「あ——ありがとう、あの、私の家に連絡を」

「使いの者が後で私が家に送り届けると伝えに行っている所です。貴方の家の馬車はこちらで待機させてありますよ」

「何から何まで……」

「いえ」

ヴィアーナは身を起こしながら、はっと昨日の彼の無礼——無理やりの接吻を思い出して身を硬くする。

「まだ怒っていますか？」

彼は眉を僅かに寄せてそこに後悔を滲ませる。

「当たり前——いえ、もういいわ。お世話になったのだから忘れてあげる」

「簡単に忘れないで欲しいですね。やはり貴方はつれない」

彼がばやくのを聞こえないふりをして、ヴィアーナは今ここに至るまでの出来事を思い出す。

そう。自分はロアーン子爵の屋敷に招かれた。

屋敷の庭で不埒者からドレスの中に潜り込まれて散々な目に遭い、それから始まった交霊会でとうとう気を失ってしまったのだ。

交霊会はテーブルの中央に手を重ねて、霊媒師の立会いの下に、見えざる霊に質問などをする。すると答える代わりにテーブルが傾いで合図を送る。そのような概要の遊戯だった。

しかし、途中で霊媒師の様子がおかしくなり、形相も口調も打って変わってヴィアーナに向けて呪いの言葉を叩き付けたのだ。

『——私は認めない、こんな出来損ないの娘！ おまけに恥知らず！ もうこれ以上ヴァリドゥーの真紅を纏い続ける事は許さない！ 不幸のどん底に落ちるといい！ 呪ってやる呪ってやる！』

思い出すだけでもあの時の恐怖が再び蘇る。鳥肌が立ち、鼓動が早くなる。このままだとまた気を失うかもしれない。

「ヴィアーナ」

放心したように一点を見つめたままのヴィアーナに、モスリーが喚起の声を掛ける。

「しっかりとしてください」

ヴィアーナは脳裏に迫ってくる霊媒師の形相から逃れたいあまり、つい傍らのモスリーの胸に飛び込んでしまった。彼は驚いたように小さな声を上げつつも優しく抱き止めた。

彼の懷の中、良い香りがヴィアーナの鼻腔を突く。柑橘系の澄んだ香りを主体として、滑らかに移行していく乳香や白檀の深遠かつ瞑想的なそれに、ヴィアーナの発作的な恐怖は瞬く間に鎮まった。

「——怖い思いをしましたね」

「私、呪われているのかしら。祈祷師を呼ばなくていいかしら」

しかしまだ言葉をうまく紡げず、舌を噛みそつなほどに声が震えている。ヴァール・ドウナの民は死ぬとその靈魂はやがて永遠の野に向かうと言うが、中には現世に留まり彷徨い続ける靈魂もいるらしい。人にとり憑いて様々な悪さをすると言う。

「馬鹿馬鹿しい。ロアーンの書いた台本ですよ」

「え？」

「霊媒師がちょっとアドリブを効かせ過ぎていたみたいですけど」

「あれはお芝居だったって言う事？」

「恐らくね。でもそれを言うのは不粋と言うものですよ。胡散臭いと思いつつ楽しむ者もいるでしょうし。そもそもそう言った趣向の会なのでしょうし。しかしロアーンの奴、いかにも自然の成り行きのように貴方に触れる機会を作ったのは敵ながら見事だと思いましたよ。私には真似出来ませんね」

モスリーの言葉は子守唄のように優しい口調だが、よくよく聞くと様々な箇所に棘を孕んでいて、言っている事は容赦がない。

やはり彼は兄に似ているかも知れない。

「お兄様も同じ事を言うかも知れないわ」

「またお兄様ですか……」

モスリーは嘆息と共に声を落とし、少し間を置いて口調を穏やかにして言った。

「そう言えば、兄君とはそう言う点では意見が一致していたように記憶しています」

言葉を発するたびに震動する彼の胸元。そこに頬を寄せている自分。良い香りの中で。異性の腕の中で安堵している自分が信じられない。

おそらく彼と兄とは反りが合わなかったのだろう。決闘だの言う話も聞いた。彼の前で兄の事を口の端に乗せるのはよした方が良いいのかも知れない。

「それにしても——今日は何て日なのかしら」

「少なくとも私にとっては良き日ですよ。どうか後もう少しだけこのままでいさせてください」

髪を撫でてくるモスリーに、ヴィアーナは肩を揺らしつつ仕方なくそのままだった。もう、大丈夫だ。

「……貴方、前会った時にも思ってたんだけど、とてもいい匂いにするわね。柑橘系の」

ただ少し意外な感じがして、ヴィアーナは顔を上げ、瞳で問いかける。常に闇の色を纏う貴方がなぜ、と。

オレンジ
「橙は『お日様』の眷属ですからね。憧れみたいなものです」

その低く優しい声に、和やかな瞳に、しかしヴィアーナは絶望にも似た計り知れぬ闇を感じた。手を伸ばして希求するような刹那の狂おしさも。

「お日様って、あれでしょ？ 貴方が昼間に空で輝かせている」

ふふ、とモスリーは瞳に柔らかな光を溢れさせて笑んだ。

「エリンの髪の色もお日様のようでしたよ。大好きでした。どんなにつれなくされても」

問うような瞳で見つめられ、ヴィアーナは困惑した。私はエリンじゃないと言っているのに。

沈黙が通り過ぎる。

その時、ふいにヴィアーナの腹が切なく鳴り、静かな室内に思いのほか響いた。

手のほどこしyoungがなく、てヴィアーナは俯いて頬を染めて腹の音が鳴り止むのを待つ。どうしてこんな時に。昼はちゃんと食べたはずだ。

しかし心配など不要だった。モスリーはヴィアーナの腹の音が耳から耳へ通り過ぎ、何事もなかったかのように全く笑わない。これが兄なら読書していようが茶を飲んでいようが耳ざとく聞き付けて瞬時にぶつと吹き出す所だが、彼は心得ているようだ。

「少し遅いですがお茶の時間にしましょう。うちの使い魔がさつき買ってきたケーキがありますから持って来ますね」

えっ、とヴィアーナはつい顔を輝かせてしまった。食い意地がはった自分が憎い。

「待っていてください」

しばらくすると茶器が載った盆を手にしたモスリーが現れた。肩にはカラスが乗っている。髪と羽の色がおそろいだ。

「ごきげんよう真紅のお姫様。歓迎はまったくしてないわよ、わよ」

「これ、エリン。済みませんね」

「エリンは貴方の事がとっても好きなのね」

分かればいいの、とエリンは主の肩から慌しく飛び立って部屋を後にした。

モスリーは運んで来たケーキとお茶を、ヴィアーナの目の前に卓を運んで来てその上に置く。

「安心してください。お茶の葉は新しいものです」

「わあ」

小皿に切り分けられた生クリームケーキにはつやつやと輝く大きな苺が一粒、載っていた。

「いただくわ」

もう堪らずにヴィアーナはフォークを振りかざし、容赦なく苺を一突きにして口に運ぶ。

何と言つ甘味と酸味。口の中で幸せに広がるみずみずしさよ。

そして無言の時が過ぎ。

「……美味しいですか」

気付くと、モスリーは立ったままじっと、亡霊のごとくヴィアーナを見つめていた。観察するように、瞬きすらせずに。

「え、ええ」

先ほどからだろうか。今の今まで食べる事にのみ専念した無防備な顔を見られていたとは、何やら気恥ずかしい。しかもここは彼女の家だ。

「あ、貴方は食べないの？」

嫌だわ、と口元を気にしつつ動揺に揺れる瞳でヴィアーナは訊く。

「食べ物にはほとんど興味がありませんので」

やや無機質な声で彼は答える。

「美食家のように見えるけど、意外ね。いつも何を食べているの？」

「さあ——」

「昨日は？」

「忘れました——そんな事はどうでもよろしい」

早くお食べなさい、とモスリーが脅迫的に急かす。人が食べている仕草が何か興味深いのだろうか。それとも早く食器を片付けたい

のか。

ヴィアーナはそれじゃあ、と半分ほど残っているケーキをフォークで突き崩すと、刺したひと欠片を目の前の彼に掲げる。

モスリーはヴィアーナの突然の行動にぎょつとした顔で身を引いた。モスリーと会ってまだ数日だが、彼が表情を露にするのは珍しい事のような気がした。

「貴方もお食べなさいよ。見ているだけじゃなくって。美味しいわよ」

言いつつも、ヴィアーナは少し後悔した。兄にたまにするような何でもない事なのに、どうしてこんなにも空気が張り詰めるのか。

「甘い嫌いなの？」

「いえ、甘い…と言うのが、よく」

「さあとにかく」

ヴィアーナが更にフォークを突き出すと、彼は戸惑いつつも寝椅子の手摺りに手を付いて腰を屈ませ、僅かに口を開けてそれを食した。

考え込むような面持ちで彼は二、三、咀嚼する。

「やっぱり甘い嫌いなんじゃないの？」

「いえ、色々鈍いと言うだけで。でも、ああ、これは確かに——と

ても甘いですね。私は明日もこれを食べた事をきつと覚えている事でしょう」

「モスリー。可笑しな人。貴方、生きているの？」

ヴィアーナは思い切り破顔してしまった。それにしても風変わりの殿方だ。

ヴィアーナは今笑っている自分の周囲で無数の光の粒子が煌いているのに気付かない。その光景が人によつてはあまりにも遠く眩しく理想郷そのもののように見える事にも。

「ヴィアーナ……」

次の瞬間、モスリーが細めていた目をふいに見開く。

「どうかした？」

笑いを止めてもまだなお輝きを放っている、金色の髪と緑の瞳の姫君がそこにいた。

「いいえ、別に。まったく失礼な人だ」

先ほども幾分かよそよしく言うと、モスリーは片方の腕で我が身を抱き締めながら黄昏の窓辺へ歩んで行った。

ヴィアーナは彼の手が、身体が、微かに震えているような気がした。まるで身体中に微弱な電流が走って、いかんともしがたい我が身を無理やりに抑えているような。だが、それが何故なのかは分からない。

そしてヴィアーナの髪は再び真紅に戻った。

モスリーが退場した後、ヴィアーナは衣服を脱ぐと、続きにあるシャワー室に向かう。

モスリーが勧めてくれたのだ。気を失っている間、ひどい汗を掻いていたと言うから。

先刻、ヴィアーナはロアーンの屋敷の庭先で痴漢から酷い目にあった。あの所業は思い出すだけで鳥肌が立つ。すぐにも身を清めたい思いから、ヴィアーナはモスリーの好意に甘える事にしたのだった。

（それにしても、あんな事をされてお兄様にも言えない、泣き寝入りなんて）

打ちひしがれながら中へ入ると、広々としたそこは何故か真新しい様子だった。

四方の壁は瀟洒な花模様の入ったタイル、床は清潔な薄青のタイルでひしめいている。壁際に設置された白いバスタブも何もかも、上の方にある窓から差し込む外の光に瑕疵なく輝いていた。

「まるで使われた事がないような浴室……いいのかしら」

ヴィアーナは浴槽へ入るとシャワーの蛇口をひねり、まず身体を流した。

腰まで覆う真紅の髪が完全に濡れ、象牙の身体に張り付いたその時。

「お邪魔いたします」

ヴィアーナがぎよつとして振り返ると、室内の濛々とした湯気の中、モスリーが立っていた。衣服を着ているので間違えて入室したわけではなさそうだ。

「やつ……ちよつと！」

慌てふためきつつもヴィアーナは取り合えず胸と秘所を隠して非難の声を上げる。

何かの間違いだろうか。それとも石鹼だとかの届け物だろうか。彼の思考が読めない。

「せ、石鹼はあるみたいだけど？」

「やはり貴方は世間知らずだ」

余裕の微笑を浮かべつつも、モスリーははにかむようにヴィアーナから視線を反らした。

「出て行って」

「ここは私の家ですよ」

言いつつ、モスリーは距離を縮める。

「いや——それ以上近付かないで……お嫁に行けなくなるわ!」

ヴィアーナは懇願した。大貴族であるヴァリドゥー家の令嬢が生まれたままの姿を男に見られるなど、あつてはならない事だ。それが嫁入り前なら尚更。

「そうですね。一糸纏わぬ姿を見られる。ヴァリドゥー家の令嬢としては嫁にいけないほどの大事でしょうね」

「解っているのならどうして——この事は……ここで見た事は黙っていてね。信じてるわよ」

頭がおかしいのか彼は。取りあえず、今後の為に釘を刺しておく。本当に今日は何て日なのだ。

しかし出て行ってくれるものと思っていたモスリーは更に歩を進め、距離を縮め始めたではないか。

「ちょ……っ!」

モスリーは慌てふためくヴィアーナを正視したまま、無表情で浴槽に黒いズボンの布地が触れるほどまで近付くと、ようやく立ち止まった。

シャワーの雨は今なおヴィアーナの頭上から降り注いでいる。浴槽の中で立つ彼女だが、それでもモスリーの目線の方がゆうに高い。

「私が言ってる事、解るわよね？」

モスリーは黙ったまま、ふいに両手を壁に付いてヴィアーナを挟み込んだ。シャワーのお湯に瞬く間に彼の漆黒の髪やブラウスが濡れる。

「——私は善良な男ではありませんので。残念でしたね」

水も滴る色男とは良く言う。美しいがどこか無機物のようであった彼が、突如として情熱と欲望を宿した危険極まりない男となってヴィアーナに迫る。

完全に追い詰められたヴィアーナは、その時やつと彼が男であると言う事に気付いた。それも、昨日無理やり自分の唇を奪った男ではないか。警戒を解き過ぎていた。これは明らかな貞操の危機だ。

「貴方を得る為なら、手段は選びません」

「や、やめて——」

初恋の少女に似ていると言ってもそれは子供時代の事だろうに、出会ったばかりだと言うのに、どうしてここまで情熱の炎が燃え盛るのか。

そしてヴィアーナは思い至る。

「——貴方、まさかうちの身分を手に入れたくて……？」

すると紫の双眸は俄かに剣呑な光を宿した。しまった、とヴィー

「ナは思う。」

「私がそのような男に見えますか？ 地位や名誉ならもう十二分に間に合っていますよ。肩書きなんて掃いて捨てるほど」

彼は鼻先で一笑に附す。

「どう言う——」

彼は宮廷魔術師と言うだけではないのか。しかし、ヴァリドウー家は伯爵位である。間に合っていると言うほどの、それに対抗出来る地位と言えば他にどのようなものがあるだろう。

「——貴方に結婚を申し込みます。貴方ははいと言うしかない。そうでしょう？ どちらにしてもこの状況下では。再度言いますが、私は手段を選びません」

言外の脅迫を添えて、モスリーは力強く言い放つ。逆らえば即座の実力行使あるのみ、と。

不覚にも涙が零れた。人生の詰みがこんなにも早く訪れようとは。

「……はい……」

しかも、こんな最悪の形で。ヴィアーナは泣きながら、壁を伝つてずるずると浴槽に腰を沈めていった。

そんな彼女を見下ろしつつ、壁に手を付いたままのモスリーは片方の口の端でやや意地の悪い笑みを浮かべる。

「よろしい。後でちゃんと正式に申し込みますけどね」

ところでヴィアーナ、とモスリーは腰を落として彼女の顎をそつと捕らえる。

「ロアーンの家の庭先でどのような狼藉に遭っていたのですか？」

問いにヴィアーナはつと気色ばむ。気付かれていたのか。あんなに苦労して平静を装っていたのに。

「気付かぬ私とでも？」

紫の甚大なる魔力を秘めた瞳が煌き、力の一端を垣間見せる。ヴィアーナはその瞳に怯え、視線を反らす。兄の瞳も直視されると怖ろしいが、彼のそれは質が異なる眼力だ。魔眼と言ってもいい。

庭先にいた時、その瞳は和やかであった為にヴィアーナは気付かなかった。こんな怖ろしい瞳の持ち主なのだ。やはり兄と同じで、どんな小さな事でも見逃さないだろう。

「おっしやい」

厳しい口調で促されるが、どう説明すればいいのだ。口にするのは苦痛だ。新たに涙が溢れてくる。

言わねば解放してくれぬのなら。

「……られて」

「何ですって」

「舐め……られ……てっ、後ろ、も」

これ以上口にするのに耐えられず、ヴィアーナの肩は大いに震えた。

「――屋敷ごと石にするべきでしたね」

おのれ、とモスリーは彼女の顎を解放すると拳をきつく握り締めた。瞳には明らかな殺意がある。

「もはや我が家に唾したのも同じ事だ。一族郎党ただでは置かぬ」

「もういいの……これ以上、恥ずかしい目に遭うのは耐えられない……っ」

ヴィアーナが顔を覆い、しゃくりを上げて本格的に泣き始めると、モスリーはそれを静止するように彼女の手を取った。

「泣くのは後で。綺麗にして差し上げる」

「えっ」

「そこに手を付いてください」

浴槽の縁に手を掛けるように指図され、ヴィアーナは頭を振りかぶり激しく抵抗を示す。

「いやっ、いやよー!」

「夫となる者の命令が聞けないのですか？」

「命令も何も……！」

貴方はまだ夫じゃないじゃない、との言葉を飲み込む。もはや二つも弱味を握られてしまっているのだ。彼には相応の支配権がある。

「さあ。無理やり押さえ付けられなくてはならぬ」

有無を言わせぬ口調で、モスリーは腕まくりを始める。

ヴィアーナは浴槽に蹲っていた震える身体を起こし、長方形の浴槽の、辺が短い方の縁に手を掛けた。膝は浴槽に付いている。モスリーから見て横を向く姿勢だ。

「これで……いいかしら」

振り向いてヴィアーナが効くと、彼は鼻歌混じりにスポンジを泡立てている所であった。しかしその目は据わっている。

シャワーが止められ、ヴィアーナが怯えつつも濡れた髪の間からぼんやりと彼の様子を見つめていると、ふいにスポンジが肌に触れた。予期せぬ感触に、びくり、と身体がしなる。

「すみずみまで綺麗にしてあげますよ。おとなしくしててください」

スポンジと泡の柔らかい感触が、全身を撫でていく。ただそれだけの事なのに、他人の手がやると何故か全身の肌がざわめく。

「あっ……」

スポンジはヴィアーナの滑らかに反る白い背中から胸に回って、やがて丸い尻を撫でていく。尻の二つの丘を執拗に、撫で回す。

「ん、あっ、あ……私がっ、私がやるから……っ」

「駄目です。許しません」

背中に、この上なく優しく容赦ない声が降って来る。それすらも刺激的で。

「私はどうやら、独占欲と言うものが並みの者よりも強いようです——さあ脚を開いて」

「い、いや」

ここは明るい場所なのに。何もかも見られてしまっではないか。

「聞き分けのない」

囁くような微かな音がした。直後。

「あ、ああっ、嫌っ」

ヴィアーナは顔を振り上げた。身体が勝手に動き、尻を高く突き出す。

「嫌あああっ！」

あまりの羞恥に、ヴィアーナは絶叫を放った。

妖しい時が過ぎて。

「あ……駄目……えっ、も、やめ……っ、そこはお兄様が……っ」

潔癖であるがゆえの誇りを失っていく中、それでも振り絞るような最後の主張の声に、ぴたり、とモスリーの手が止まる。彼の髪も服も、すっかり濡れて肌に張り付いていた。

「今、何と言いました？ ヴィアーナ」

「そこは…お兄様が……可愛がってくれる場所……」

「……そう言うのって、『近親相姦』って言うんじゃない——ありませんか？」

広々とした浴室の中、モスリーの静かな声は不穏に響き渡った。

囚われの夜

「きんしん…そうか…ん…？」

身体の自由を拘束する魔法がふいに解け、涙に濡れた瞳でヴィアーナは顔を上げる。

モスリーの色を失った顔がそこにあつた。

「……いけない事だと解っていますか？ ヴィアーナ」

「いけなくはないわ。私はお兄様の事が好きで、お兄様も私の事を愛してくださっていて——子供の頃からの延長よ——最初は口付けからで」

悪びれた風もなく言うヴィアーナは気付かない。自身の肌に張り付いた真紅の髪が金色のそれに、無垢な真紅の瞳が緑色に再び変わりつつある事に。

モスリーはヴィアーナのその様子に、はっと目を見開くと眉根を震わせ、次の瞬間、乱暴にヴィアーナを抱き寄せた。

「合点がいきましたよ……貴方は多分……いいえ、これは言わないでおきましょう。何という『兄上』だ」

万死に値する、と私の震える声で呟いた彼の言葉の意味を、ヴィアーナは理解出来なかった。

モスリーはヴィアーナが気付かぬうちに彼女の髪をそつと撫でて

その色を元の真紅に戻す。その手並みの鮮やかさ。

「——お馬鹿さん。いいですか、ヴィアーナ。それはいけない事なのですよ。お兄様が許しても、世間が許さない。貴方は毅然と拒まなければならぬ事だったのですよ」

モスリーは勘違いをしている。兄が悪いのではない。私はそれを願った。私の方から押しかけた時もある。

何故いけないのだ。絶対の安心をくれる兄の腕の中、彼の愛撫を受ける高揚感を。幸せを感じる事。その延長にあたる行為が。

「どうして？」

問うものの、答えは自分でも分かっている。

「兄と妹だからですよ。そんな事も分からないのですか？ 貴方つたらどうしようもなく無垢で——子供の頃は私の方が世間知らずでしたのに、今は貴方のほうが子供のようですよ」

モスリーの言葉に、ヴィアーナの心の内に罪の意識が芽生えた。

（私、お兄様にいけない事をさせていた？）

兄からの口付けは心をときめかせ、ベッドの上での事は二人の心の繋がりを一層強くしたような気がする。

しかし。これらはきつと、他人には知られてはいけない事なのだと言う気はしていた。こんな状況だが、兄の為にモスリーに言い訳しなくてはならない事に気付く。

「……あの……でも、おしべとめしべのような事はしていないのよ」
ほう、と彼は露骨な怒りの声で答え、しかし次の瞬間、安堵の吐息を漏らす。

「それを聞いて安心しましたが——もっと清めなければいけませんね」

再びモスリーはスポンジでヴィアーナの背を擦り始める。

「私のヴィアーナ。ヴィーアナ、ヴィアーナ、ヴィアーナ、ヴィアーナ、ヴィアーナ……」

瞳に狂気を宿し、うわ言のように呟きながら。

「モスリー？　ちょ、い、痛いわ、痛いっ」

皮膚が摩擦され過ぎて痛い。赤剥けになってしまいそうだ。

「痛い痛いっ」

「ヴィアーナ、ヴィアーナ、ヴィアーナ、ヴィーアナ、ヴィアーナ、ヴィアーナ、私のヴィアーナ——」

モスリーはヴィアーナの全身を再び擦り上げる。顎を、首筋を、肩を腕を、太腿を、膝頭を、脛を。

「痛いっ！　やめてやめて、いやあ」

「許しません許しません許しません、ヴィアーナ、ヴィアーナ、ヴィアーナ清めます清めます清めます……」

浴槽の中、泡に塗れながらヴィアーナは彼の腕から幾度も逃れようと試みた。しかしその度に執着の腕に捕らえ直される。

髪を引きつかまれた時、始めて怖い、とヴィアーナは思った。モスリーの腕は存外に力強いのだ。

（お兄様、助けて！）

「私のものです。私のものです、私のもの、私のものだ——千回でも一万回でも言います。もう私を忘れないで」

しかし抱き締める彼の腕が震えている事に気付いた時、ヴィアーナは気付いた。

彼の絶望的な孤独とたった一つの願いを。私がいないと、彼はきつとこのまま。

「モスリー」

「——愛しています、ヴィアーナ。貴方を守ります」

真っ直ぐに彼女を見据え、はっきりとした声でモスリーは告白した。

これほどの純粋な思いに逆らえる者などこの世に 있을까。いささか卑怯な方法を取られたものの、彼は呆れるほど無垢な男だ。乱暴な所業だ謝れ、と言えばひたすら謝るかも知れない。

一生添い遂げる運命の男はきつと彼なのだろう。兄を忘れなければならない時が来たのだ。

「口接けを許してください」

乞われて、ヴィアーナは目を閉じて顎を心持ち上げた。もういい。いずれ彼の妻となって全てを捧げるのだから。

冷たく柔らかい唇が重なる。幾度か押し付けられ、やがて舌が割り入って来た。

「んっ、ふ……」

抵抗せずにヴィアーナはそれを受け入れた。口腔内を蠢く彼の舌の感触。

「んん……」

口蓋を舌先でちろちろと刺激され、ヴィアーナの身体がびくりびくりと反応する。その動きを拘束するように、モスリーの腕に力がかかる。

身動きが許されぬ中、反応は局所に集中していく。

「ん、んふ……っ」

（あ、いや……っ）

自身の微細なわななきで彼のブラウスに胸先が擦れて尖り、奥処

が次第に潤っていくのを感じた。

唇が離れる。しかし名残惜しげな光る線が唇と唇を繋ぎ止める中、二人はしばし、見つめ合った。

「——感じやすいのですから。もう貴方を帰すわけには行かなくなりましたよ。『犯罪者』の元へなどね」

「お兄様の事を犯罪者なんて、そんな」

反駁する間を与えず、モスリーはヴィアーナを腕から解放して、すくつと立ち上がると、何を思ったか戸口の方へ向かう。

「エリン——エリン。こちらへ来てください」

彼は外に向かって言い放った。使い魔のカラスとのやりとりがあつて再びヴィアーナの方へ舞い戻る。

彼のにこやかな顔が気になった。

「どうしたの？」

「エリンに貴方の姿になって貰い、代わりに帰宅させる事にしました。名案でしょう？」

「そんな！」

再び恐怖が蘇り、全身の肌が粟立つのを感じた。所謂拉致ではないか。彼は私を拉致するのだと言っているのだ。

「やがて妻となる大切な貴方を、そんな危険な兄上の所へいる家などに帰せるものですか」

「そんなの、お兄様にはすぐにばれてしまっわ！　そしたら貴方、ただでは済まされないわよ」

第一、カラスが化けた程度の粗雑な身代わりにヴィアーナなど務まるまい。

「一応私、当代一級の魔術師ですので。どんなに不自然なヴィアーナであろうと、兄上が変化を解くのは容易な事ではない——つまり、兄上の目には、少し言動がおかしいだけの本物の貴方と言う風にしか映らないでしょう。なに、結婚式までごまかす事が出来ればいいのですから、ほんの短い間ですよ。問題ありません」

「そんな……！」

様子がおかしいだけの私なら、きっと兄は気付かない。なぜなら最近のヴィアーナは毎日と言っていいほど不安定なのだから。

そしてヴィアーナは思いなおす。元から何をやっても駄目なヴィアーナなのだ。カラスでも十分代わりは務まるかも知れない。兄にひたすら怒られていればいいのだから。

浴槽の中、ヴィアーナが絶望して打ちひしがれていた時。

「あの、私もちょっとシャワーを浴びさせてください。泡が付いてしまっていますので」

声に、ヴィアーナが顔を上げると、モスリーが濡れたブラウスの

ボタンを外し始めているではないか。

「ちょっと、やめてこんな所で脱ぐなんて……！」

「裸の癖に何を言っているんですか。何でしたら後ろを向いてくださっても結構ですよ。私もちよつと照れ臭いですし」

人の入浴中に入って来て何を言うのかこの男は。しかしヴィアナは言う通りに後ろを向いた。

床ではさりばさと音がして、浴槽に人間がもう一人入ってくる物音。

ヴィアナの胸が高鳴る。同時に全身が緊張で強張る。

「ヴィアナ。シャワーで泡を流しましょう」

蛇口をひねる音がして、ヴィアナの背中に湯がかかる。

「それにしても、肌、白いですね。赤と白の対比が素晴らしい」

背後からかった声に、かあ、とヴィアナの頬は薔薇に染まった。

改めて自分が裸だと言う事に気付く。

（これって……アドルとメロリアンの関係みたいだわ）

夜中に一緒に風呂に入るシーンもあった。そして行為に及んでいた。挿絵にもあった。やはり繋がった局部の詳細は分からなかった

が。

「あ、晩御飯はちゃんと厨房に人を雇い入れていますので安心してください。後で庭でも散歩しませんか？ 青い薔薇のアーチをお見せしますよ」

どうして彼は呑気なのだ。身代わりを送り出したからか。警察沙汰になる事を怖れないのか。もしかすると彼は超一級の魔術師集団である魔法警察が束になつてかかっても敵わないほど強いのかも知れないが。ちなみに警察は『イグナ・ダヤ』の卒業生が多いと聞く。そう言えば彼の通称である『黒の魔導師』は、どう考えても一介の宮廷魔術師に付けられるような通り名ではない。

魔術における革命児、大魔導師ドル・ハリアドルは別格として、魔法王国ヴァール・ドーナにおいて、魔法使い自体はそれほど地位の高いものではないのだ。大いなる魔力を持つ貴族は、しかし他人の為に魔法を用いる事を一切しない。魔法を使わねばならぬ雑事用に小間使いとして雇う貴族もいるほどだ。

地位も名誉も十二分にあり、掃いて捨てるほどの肩書きを持つモスリー。一体何者なのだろう。やがてこんな謎の男の妻になるのだ。自分は。

「え、ええ……あの…もう、上がっていいかしら」

このままでいると危険な行為に移行していく気がしてならない。彼は夫となる男だが、心の準備と言うものがある。

それに、結婚に当たって、事前の性教育と言うものもあるはずだ。やはり家に帰らなくてはならないのではないか。

「何故？　一緒に上がりましょうよ」

「いいえ、先に上がるわ。後ろを向いていて」

言って、浴槽から上がろうと立ち上がったその時。

「お待ちなさい、まだ泡が」

彼に二の腕を捕まれヴィアーナは心臓が口から飛び出そうになった。そして動揺して慌てふためいた際、見てしまったのだ。

象牙を彫刻したように、腹筋やその他の筋肉の線がうつすらと陰影を作る、芸術品のような肉体のその中心で、けぶるような夢想を破壊的なほどに主張する、赤黒く隆々としたもの――ヴィアーナは思った。まるで破城槌だ。破城槌はヴァール・ドゥナが一人の王によって統一される前、戦乱の時代によく使われたと言う城攻めの道具だと言う。ヴィアーナはハリアドルよりも前に来ていた家庭教師に教えられると、その日兄に、昔、そんな物があったのだそうねと話した。チェスの勉強をしていた兄は悲壮な顔をしてもうそんな話はするな、まだ早い、などとぶつきらばうに言ってそれまで並べていた盤上の駒をええい糞、と薙ぎ倒した。あの時の兄は全く訳が分からなかった。

つい回想に耽ってしまったが、目の前のこれにはどんな城門もあつと言う間に打ち破られて、やがて城は陥落してしまうだろう。それほどの硬度に見えた。

（なんて恐ろしい……武器……）

「あの……ヴィアーナ？」

真紅の瞳を見開いて一物を凝視するヴィアーナに、モスリーは少々息を荒げながら困惑気味に声を掛ける。

はっ、とヴィアーナは目を反らす。

しかし遅かった。

「処女の癖に視姦なんて高度な事しないでくれますか……貴方ったら、可愛くてつい私の男が反応してしま——」

モスリーは言葉を途切らせて、う、と小さく呻いた。

気まずい沈黙が流れる。

「どうぞ、先にながっていてください。一仕事してから参ります——目を閉じてますから」

頭から浴びるシャワーを冷水に切り替え、モスリーはふう、と艶やかに息を吐き、壁に背を身体を預けて目を閉じ、顔を上げて冷水を颯めた顔面に受ける。

「男の人の事情はよく分からないけど——それじゃ」

浴槽を跨ぎ、未だ立ち込めている湯気の中をヴィアーナはいそいそと浴室を去った。

「貴方を愛しているので辛きを抱きます。しかしこれは酷い拷問ですね」

その間ヴァリドゥーの屋敷では、ヴィアーナに扮したカラスのエリンが家族揃つての晚餐を摂っている所であつた。

高い天井には野菜や果物の精緻な彫刻が施され、重厚な櫓の腰壁は天井に合わせて高い。隣室にある厨房と通じた受け取り口から続々と料理が運び出される中、赤いクロスの敷かれた長い長いテーブルに仲の良い家族は集中して着席していた。

食前酒から始まり、前菜、一の皿、二の皿、とエリンはカトラリーを使いこなし、見事に平らげていく。

「お前がまた倒れたと聞いて、びっくりしましたよ。迎えをやらせる所でした」

ヴァリドゥー家の夫人、ヴィアネーラは案ずるように向かいの娘に声を掛ける。

他の追隨を許さぬ峻烈に上がった目尻と眉。睥睨する赤い睫毛。鋭い紅玉の瞳。口角の上がった優艶な唇。大輪の真紅の薔薇のように堂々として美しい貴婦人だ、とエリンは心の中で思った。

（これはご主人様の母君といい勝負だわね）

「すぐに治りましたのよ。今をときめく宮廷魔術師様がそれはそれは優しく介抱してくださって」

「後でお礼を言わなくてはなりませんね」

魔術師様のご住所はどちらの辺りなのかしら、などと母が話をしている最中、ハディールは無言であった。無言のまま、威圧するようにエリンを睨んでいる。

それにしても凄まじい眼力だ。彼の筋肉質な威風堂々たる体格も手伝って、エリンの心臓は先ほどから縮み上がっていた。睨んでさえいなければ、彫り深く、男ぶり華やかな顔立ちに主君への忠誠も忘れてよるめきそうなのだが。

（さすがは猛禽類のご一家。ご主人様の石化の魔眼に匹敵するだわねこれは。お二人とも目の保養にはなりますけれども、もうエリン、家に帰りとう存じますわよ）

「ハディールや、どうしました。妹を睨んだりして。ヴィアーナを労わってあげたらどうですか。お前ったら、ヴィアーナが帰って来るまでカルフィークを出せなどと騒いでいた癖に。帰ってきたらむすつとして黙り込んで」

カルフィークとは伝説の炎の竜の名だが。おそらく目の前にいる当主の愛馬の名だろうとエリンは推察した。

「私は交霊会に行くのを反対していたんですよ。母上。それなのにこいつと来たら」

「わたくしが許可したのですよ。正直気が進みませんでしたけど、ヴィアーナが外へ出る機会を阻んではいけないと思って。ですから、責めるならわたくしをお責めなさい、ハディール」

「母上には敵いませんね。しかし私もこの家の当主です。以後は私の決断を尊重していただきたい」

「分かりましたよ。貴方最近、一層、お父様に似て来ましたね」

ヴィアネーラはうつとりとした眼差しで息子を見つめた。

（ここ美男美女の家系なのね。あの令嬢は十人並みだったけどガアア、伯爵令嬢じゃなかったら、とてもご主人様の隣に立つような女じゃないわぁガアア）

やがてヴィアネーラの手作りと言う肉料理も食べ終え、出て来た皿を全てを平らげたエリンは自分の部屋へと向かう。先刻まで休憩していたリボンや薔薇の模様が入った壁紙の貼られた瀟洒な家具の並んだ部屋は、すでにエリンの気に入りだった。

「これからしばらくの間、お姫様暮らしが出来るってわけね。まあ、気楽に楽しみましょ」

階段を上り切り、廊下を渡っていたエリンがふと見上げると、行く手に仁王立ちして待ち受けている人影があった。ヴァリドゥー伯爵だ。先回りしたのか。相変わらず妹を鋭く睨み付けている。

「まあっ、どうなさいましたの、お兄様っ！ そのように恐ろしいお顔で。もしかして、わたくしを叱るおつもりかしら」

身振り手振りを加えて、少し大仰な調子で言ってしまったが、令嬢ならばこれくらい許されるだろう。いや、留めにくるりと一回転くらいするべきだろうか。

「大概にしる糞が」

小声で恫喝するようにハディールは言った。

「えっ？」

やや貴公子らしくない台詞に、何やら嫌な予感がしてエリンはぴたりと足を止める。無意識の内に体が回れ右をしていた。

「待て」

声と共にエリンの足が廊下に縫い付けられる。まずい、緊急事態だ。

（ご主人様、やっぱり猛禽類の目はごまかせないみたいですよっ！）

冷や汗を掻くエリンの背後から、つかつかと恐怖の足音が近付く。

「お前は何者だ。ピーマンを美味そうに食べる妹など私にはいないぞ」

付け合せの野菜のピーマン。出された物は食べる主義だったエリンは全てを満面の笑みで食べてしまったのだ。

「帰って来た妹の姿が何やら妙なのでな、試しに入れてみるように厨房に言いつけたのだ」

「何て嫌な感じに頭の良い人でしょうねガァア」

エリンは令嬢らしからぬ語尾にはっと口を塞ぐ。しかし遅かった。

「やはり妹ではないようだな——母上の手前、騒ぎを起こすのを憚ったが」

ハディールはエリンに掴みかかると、喉元を絞めて大いに揺さぶった。

「ぐへえ」

「私の妹をどうした！ 下等の魔物が！ ここをヴァリドゥー家と知っての狼藉か！？」

もはや白目を剥いているエリンに向かって小声で怒鳴ると同時に、ぼつと彼の全身から怒りの炎が湧き起こり、エリンの変化はあっさりと解けた。

変化を解かれて弱ったカラスがハディールの足元へぼとりと落ちる。

「カラスだと？」

彼はカラスを拾い上げると検分に入った。

「カラスにしては相当の魔力だ。怒りに任せなければ私でも変化を強制的に解くのは難儀しただろう。数日はかかったかも知れん」

さてよ、とハディールは動きを止める。

「宮廷魔術師に介抱されたと言っていたな——このカラスは見覚えがあるぞ。さてはお前……奴の使い魔だな？」

「くちばしが折れても主の名は申せませぬ……」

首を捕まれたエリンは息も絶え絶えだった。

「シメンドウール……絶対に奴だ！ ヴィアーナはまだ奴の家にいるんだ。そくに違いはない——！」

おのれ大切な妹を、とハディールはカラスを廊下に打ち捨て、馬引けと馬丁を呼ぶ。勇ましい声は怒号のように廊下に響き渡った。

「——助かった。今のうちに逃げよ」

死んだふりをしていたカラスのエリンはハディールの姿が消えると窓から飛び出した。

「あ……っ」

枕元の明かりのみの薄暗い寝室のベッドの上、モスリーの膝に向かい合わせに乗ったヴィアーナは背を仰け反らせる。はだけた彼女の夜着の胸元に、彼が顔を埋めている。

ヴィアーナは身体の至る所にモスリーから執拗な接吻を受けている最中だった。浴室から出ても彼の暴走は結局止まらず、二人で果実酒を飲んだ後、スポンジで擦り過ぎた肌を落着かせる為にと乳香を配合したクリームを塗り込まれ、それがやがて愛撫となり、今

に至る。

妖しい時が過ぎて。

耐え忍ぶ眉で、モスリーは優しくヴィアーナをシートの上にそつと押し倒す。白いシートの上に真紅の髪が散り広がる。

「痛いのにには変わりありませんが、この方がいいでしょう。気が変わりました。私の方も我慢の限界……お望み通り、貫いて差し上げます」

「ね……はじょうついで貫かれたら痛い……？」

朦朧とした声でヴィアーナは訊く。意識が靄の中に包まれているようだ。つい思っていた事を口走ってしまった。

「破城槌って、貴方。例えばべら棒ですね」

彼は闇に溶けるようなしっとりとした声で笑う。投げ出されたヴィアーナの手を取り、口接けする。縋るように頬擦りする。

「まあ、確かに処女を奪うのは城攻めに似ていますけれど……では、侵略者にせいぜい最後の足掻きをお見せくださいな。無様であればあるほど小気味良い」

「いやあ……怖い……もしゆりい、怖い」

呂律が回らない。

シートの上でしどけなく仰向けになるヴィアーナは、自分を組み

伏すモスリーを濡れた瞳で見上げている。誘うような唇。はだけた白い胸元からは小さな花びらのような胸先を覗かせて。

モスリーは彼女の手で頬擦りしながら、流し目でその様子を見て、息を飲んだ。

「怖い？ 何を今更。今ここで貴方を縊り殺したいくらい愛しい気持ちにさせておいて——もう、何も思い出さずとも良いですとも、生身の貴方と添い遂げる事が出来るのであれば。過去なんて塵芥ほどこにどうでもいい。さあ、覚悟なさい」

モスリーが頬擦りしていた手を解放すると、ヴィアーナは小さく頷き、覚悟を決めた。とうとう彼の物になってしまふ時が来たのだ。出会ってからまだ数日。しかし、朦朧とした意識の中で、彼の面影に既視感があつた事を自覚する。子供の頃だったか。

「ヴィアーナ。明日は百貨店を貸切にして、一緒に指輪を選びましょうね」

愛しています、と囁き、モスリーが彼女の夜着を剥ぎ取ろうとしたその時。

屋敷の外で男の声が響いた。

「——何事でしょう。一世一代のこのような時に」

モスリーは眉を顰めつつ起き上がるとベッドから降り、急ぎ椅子に掛けていた黒いガウンを羽織る。

「待っていてください。部屋から出ないように」

月が照らす夜半、真紅の外套を翻し、炎の鬘を持つ愛馬カルフィークに乗って疾駆したハディールは、瞬く間にシメンドウールの屋敷へ到達した。

「押し通るぞ！」

叫びながら勢いに任せて真鍮の門を蹴破り、仕掛けられた魔術の網などものともせずに、荒ぶる真紅の美丈夫は世にも恐ろしい形相で中へと進む。彼によつて地上のどれだけの村や町が壊滅の被害に遭った事であろう。幾千、否、幾万か。炎の鬘、炎の吐息のカルフィークの蹄鉄は、屋敷まで続く石畳に次々と亀裂を生じさせた。その重量感の凄まじさ。

「何事ですか、騒がしい——おや」

屋敷の玄関前に黒い霧が出現し、次第に人の形を取り、やがてこの屋敷の主の比類なき麗姿となった。彼は突進して来る馬に全く慌てる事なく、微塵も動かずに待った。

やがて馬はモスリーを跳ねる寸前で主に手綱で御されて大きく傾ぎ、前脚で宙を搔いて止まる。

「これはこれは、ヴァリドゥーの真紅の伯爵ではありませんか。お久し振りです」

馬上のハディールに、モスリーは鷹揚に語りかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0187y/>

真紅の館の姫君（S）

2011年11月30日15時53分発行